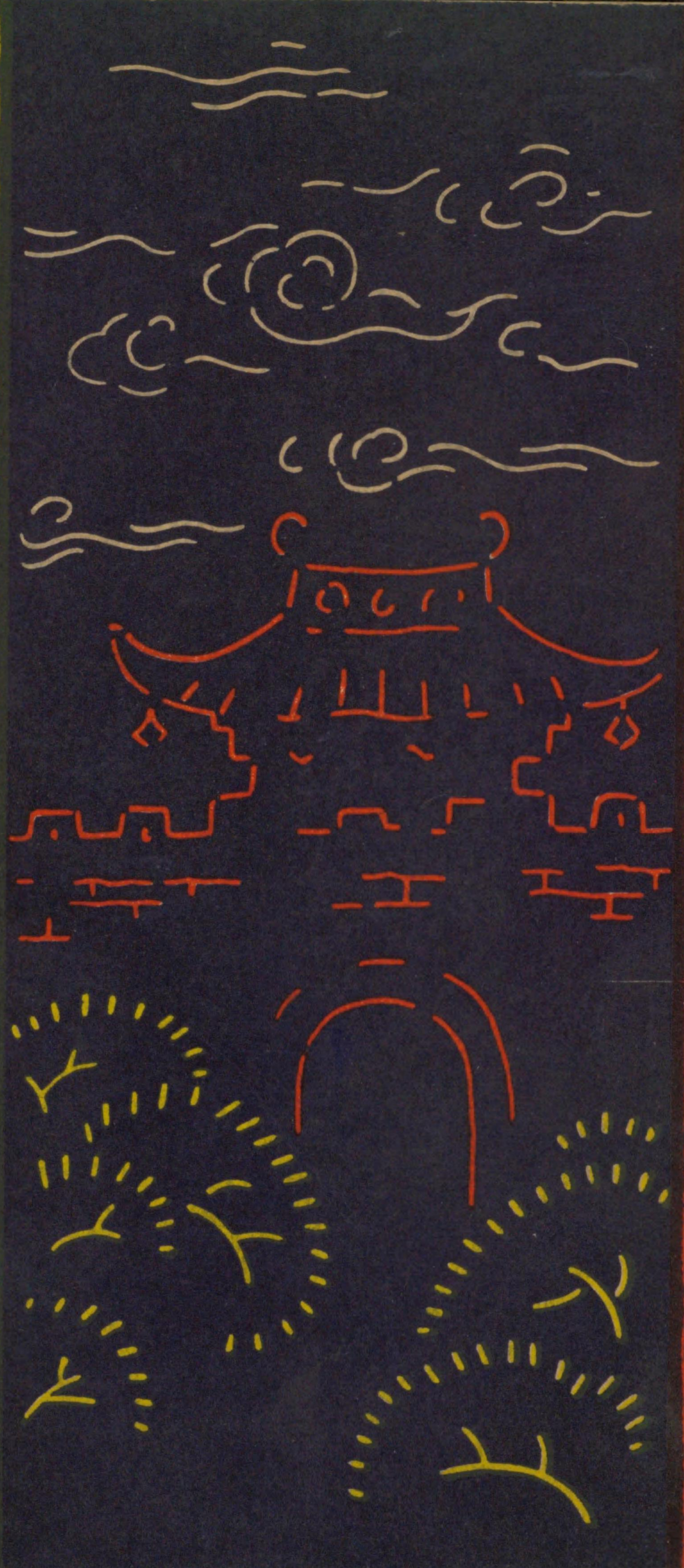
594
136
594-136
1200501527080

鮮満十二日



関鮮満案内所編

鮮満視察團紀念誌

鮮満十二日

下関鮮満案内所編

帝國圖書館藏

301

594-136

目次

□表紙及カット　中土居權太郎

□序　伊東四郎

□はしがき　編者

□記念寫眞二葉（牡丹臺、北陵）

□行程略圖

感想篇

□車窓から　德永淸行（一）

□鮮滿雜感　廣石音彥（五）

□滿鮮旅行偶感　兒玉半峰（八）

□娯樂室の一隅にて　T Y（一二）

□旅行漫談　高田發音（一四）

□鮮滿の旅を終へて　岩本淸（二〇）

□東鷄冠山北堡壘に立ちて　詩津子（二三）

□感じた惡口　MS生（二六）

□安東驛の稅關檢查　泉武二（二八）

□鮮滿視察感　宇野茜五郎（三〇）

□團体旅行より歸りて　樂水（三三）

□感想　淺海こと（三四）

□隨筆　富田政一（三五）

□鮮滿を見て　久光鶴子（三七）

□感想　伊達みつ（四一）

紀行篇

□鮮滿所々　栗林貞一（四三）

□アカシヤの旅　河野山杏子（四七）

□鮮滿一瞥　柴田主一（五三）

□鮮滿視察記　塚原東次郎（五六）

□鮮滿感所　河村廣三（五九）

□鮮滿の旅（日記の中から）　新名仲次（六二）

□偶感　横田榮忠（六五）

詩歌俳句篇

短歌

□鮮滿遊行　安田尙義（六九）
□秋風の中　伊東園（七五）
□雜詠十首　堀野登女（七八）
□日記の中より　ＴＹ（七九）
□鮮滿雜詠　和田藤太（八一）
□旅順戰蹟にて　詩津子（八二）
□雜詠　瀨口五四郎（八三）
□雜詠　一學生（八四）
□偶想　中田文七（八四）
□歌屑　石田芳雄（八五）

俳句

□高梁　上原良太郎（八七）
□鮮滿吟　龜齡（八八）

詩其他

□牡丹臺其他　神田一扇（八九）
□雜吟　椋本完一（八九）
□慶州と金剛山　石田芳雄（九〇）

□鮮滿旅行即興詩　高田美次（九三）
□大同江其他　中田茂雄（九六）
□愚想　小田祐三郎（九七）

日誌及雜篇

□視察團日誌　石田芳雄（九九）
□編輯後記（一二）

附錄

□團員府縣及職業竝年齡別表
□團員名簿（一）

序

今秋朝鮮京城に於て博覽會開催せられ、從來曾てなき大規模にして朝鮮見學には絶好の時機であり、而かも其開催期は鮮滿旅行には最好適の季節でありましたから、此機會に當所初めての試として鮮滿視察團を計畫致しました次第であります、然るに幸に各位の御賛成を得て豫期以上の成果を得ましたに就ては、聊か之れが記念の爲め小冊子發行致度各位に御感想其他御投稿を煩はしました處、各方面より有力なる玉稿を頂き、御蔭を以て記念誌も一段と光彩を添へましたことは大に欣快とする處であります

經濟國難の叫ばるゝ今日、我帝國に取り鮮滿の重要性に就き一度想到すれば、誰れか其研究視察の緊喫事を思はざるものがありませうか、皆樣には最近親しく彼地風物を御視察せられ其感一層深きものあると存じます

之れを機會に將來鮮滿問題に關し御檢討を願れば此度の計畫をして終始一貫頗る有意義たらしめ、單り主催者の滿悦に止まず國家の爲め幸慶之に過ぎずと存じます

記念誌發刊に當り簡單に御挨拶申上て序に替ゐます

昭和四年十一月

下關鮮滿案内所

伊東四郎

はしがき

長途扈從の役目を果してホッと一安心すると仝時に、始めての經驗とは云ひながら皆様の節制ある行動の爲め些の澁滯を來さず、大した事故も無く、そして非常なる效果を擧げ得た喜びが強く胸を打つ、此喜びは蓋し吾々のみの味ひ得る特點であらう

さて、此喜びを此儘瞬間的に葬るには餘りに惜しい尊い法悅である、皆様も御同感であらう様に、これは此儘そつと形に殘して永久の記念にすることが最も望ましき事と、いろ〳〵考へた擧句、遂に此小册子を拙いながら編輯することにしました、これが此小册子の生れた原因であります

謹んで之れを皆様の机下に呈上致しますから皆様もどうか主催者の微意をお掬み下すつて、時折の思ひ出の種として永く此小册子を可愛がつてやつて下さい

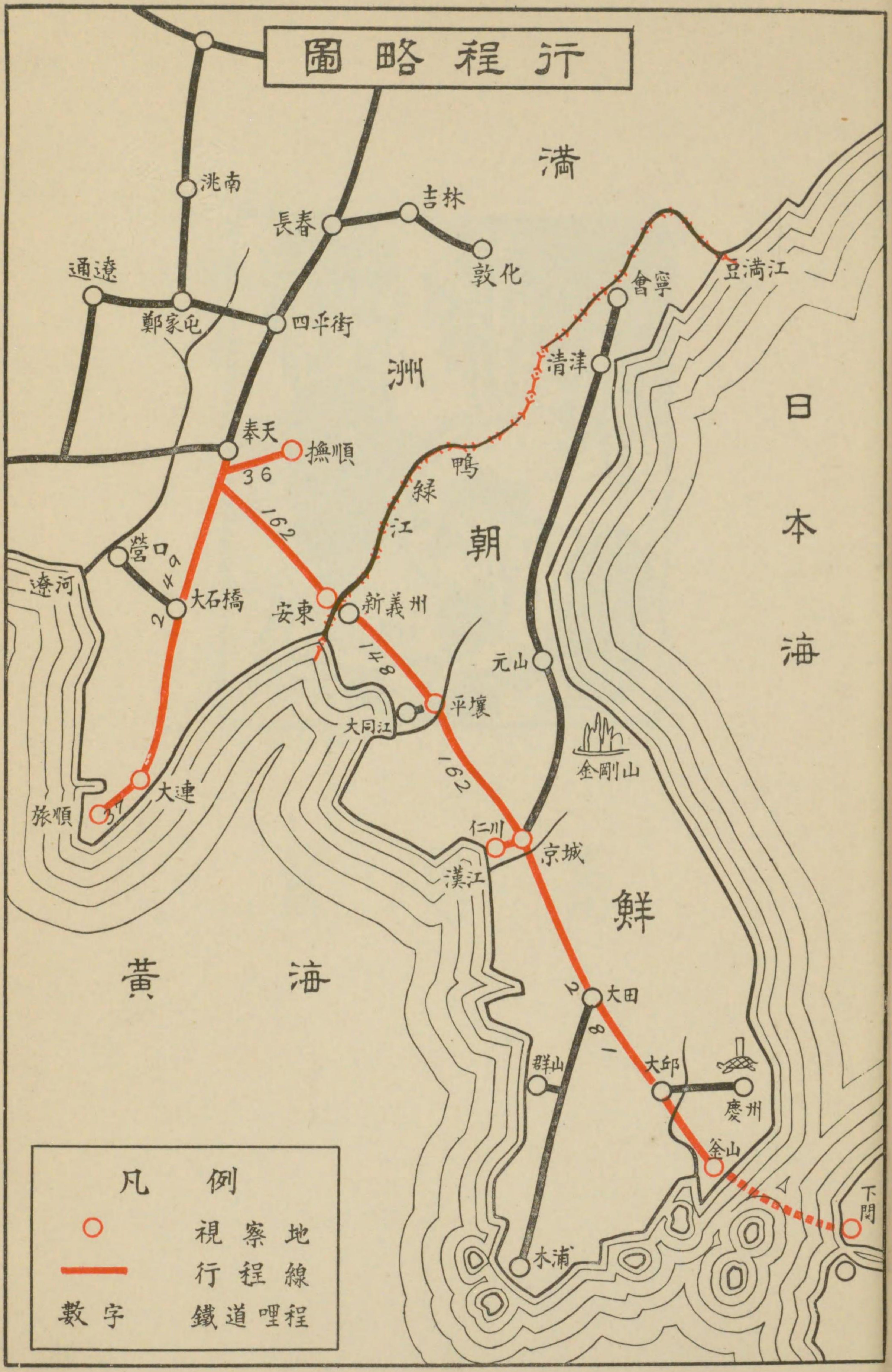
昭和四年十一月

海峽に臨む寓舍にて

編者著す

平壤牡丹臺（紀念寫眞其一）

奉天北陵　（紀念寫眞其二）



行程略圖
滿
洲
朝
鮮
日本海
黃海
洮南
吉林
長春
敦化
通遼
鄭家屯
四平街
奉天
撫順
36
162
營口
249
大石橋
遼河
安東
新義州
鴨綠江
會寧
豆滿江
清津
元山
148
平壤
大同江
金剛山
162
大連
旅順
仁川
京城
漢江
大田
281
群山
大邱
慶州
釜山
木浦
下関
凡例
視察地
行程線
數字 鐵道哩程

感想篇

車窓から

門司市　徳永清行

鮮滿の旅行で細密なる視察を爲さうと思へば、彼此同乗同座、同宿の方法に依る可きであらうが、今般の旅行の目的は、半島と大陸の雰圍氣に觸れ得たら足りると云へよう。確に鮮滿の風俗を始めとして、殊に清澄な秋空に波打つた滿蒙大陸に就いて以下の樣な事を實感し得た。

◈　◈　◈

朝鮮では朝鮮鐵道局主催の下に京城食道園に、滿洲では滿洲鐵道部の招待で大連泰華樓に於て饗宴があつた。前者に於ては妓生、後者に於ては世界の珍味支那料理に印象付けられた。所と共に異る料理の趣味は依つて來る幾多の原因があるであらうが、富源に厚い地と薄い所とでは食糧の含有するカロリーに反映する事は否定出來まい。大連碧山莊で聽いた華工の驚異すべき勞働力の源泉たる食糧は本邦人には確に暗示する所がある。列車が半島を走つて居た間に車窓に映じた景觀と、大陸に入つてからのそれとは趣少からず異れるに氣付かされた。一寸側道にそれるが我々視察團員への待遇も滿鐵線内になるまでとなつてからとは差があつた。その藏する富源に卽して見ても、半鳥では別に深い印象を受けず寧ろ始政後に於ける在鮮官民の努力に敬意を感じたのであるが、大陸に步を印してからは、その無盡藏な天産の寶庫に就いて、滿鐵關係のもののみでも、滿蒙資源館、中央試驗所は見學する者に何を思はした事であらうか。滿蒙の天産、中國全体の寶庫の盡くるなきは喋々の要はない。一同見聞し、視察し得た範圍内のみにても、鐵礦に就ては、曉の車窓遙に鞍山製鐵所を眺め、打續きし經營難に撓まず今日を招來せるを聽き、大陸の藏する鐵鑛十億万噸を憶ひ、羊毛

に就ては資源舘畜產陳列室の緬羊改良成績標本より敎へられ、本邦紡績原料の四分の一乃至三分の一を提供し得る將來ある棉花に就いても亦資源舘農產陳列室より蒙を啓かれ、製鹽のこと又同舘水產陳列室に入る者を啓發した。滿洲重要物產にして旣に世界的商品たる大豆に就いては大連、油房見學によりその一端を識り得た。撫順の露天掘は內地炭坑の概念を格段に進め、殊に油母頁岩(オイルシェール)の製油工場視察は旣に作業開始の日近く、我滿蒙積極政策の躍進としてのみならず、一同に深き感激の淚を催さすものがあつた。林木のことに至つては安東、無限公司製材工場の訪問により識見を高め得た。

◈　　　◈　　　◈

左樣な大陸に於いて、排外的氣分は次第に橫溢して來た事を聞く。問題を天產薄き我國にのみに採つて觀ても邦人の彼地に於ける努力の效は怪しいものになつて居る。移住後環境に薰育され、漸く大陸人としての要素をさへ併せ備へつゝある邦人の地位すら危からんとして居ることを聽かされた。語を强むれば、大陸に於ける問題は邦人一個、一營利會社存否の些少事でなく、國を擧げて難局に對して居るのである。精銳なる拾萬の祖、逝いて貳拾幾星霜！東亞の天地愈ゝ多事ならんとする秋に面して居るのである。大陸視察の途各所で聽いた所は種々の意味で此處へ言及されてゐた。明治初年の頃迄は『眠れる獅子』として怖れられたと聽く支那は淸朝參百年の基礎崩壞し、混亂狀態に在りしも、その形態を變へ依然としてスリーピング、ライオンたるを强く意識されるに至つた。支那に於ける資本主義就中財閥資本主義の擡頭は嘗ては外人により、將又外資を以つて經營されたるを、今や支那人それ自身により、又その資本を以つて、資本主義制には無上の好適者、苦力卽ち華工を殺して最大の果實を獲んする機運に向つてゐる。邦人の失墜原因を支那革命の致す所となすか、否、寧ろ、支那に於ける資本主義の勃起に職由するものであるまいか。豫て聞及んで居た事であるが今度の旅行で痛感した事の一つとして、支那人に軍服を纏させたる相應しからぬ事であつた。然も武裝せる軍人に面する機會が少くなかつた。群雄割據の現狀では致方なき事であらうが、支那の軍人こそ、春秋戰國以來百戰練磨の策謀

を具有する中國本然の姿を、殊更假裝せることを象徵してゐる一例ではあるまいか。

◈　　　◈　　　◈

我國を顧るに、貿易と工業は立國の基礎であつて、對米生絲輸出止み、對支交易絕たば我國の經濟は動搖する外あるまい。滿蒙に對し、資本的進出其の額十四億五千萬圓弱あると云ふも、この進出は內地利潤率の低下に依りしものではない。比較的餘力ありとされたる我が紡績事業の、中國に工場設けしすら、我國經濟の發達に據りしでなく、寧ろ反對の理由にある。大陸に於ける我國の勢力は資本無き故に如何に苦しんだ事であらうか。我國は彼地に於いてレーニンの云へるが如き帝國主義ではないのである。領土獲得による國力の進展或は過剩人口の國外排出による國威の伸張を目的としては居ない。資本問題未解決なるに、富源の國民的所有に言及するは事の前後を誤る誹あらうが、日支の人口密度の數字を揭げ、(元より之のみを以つて人口に對する富源の割合は確言出來ぬが) 我國が何如に富源薄きかを示し得るであらう。

	人口密度	
	一方粁當り	一方里當り
帝國	一四二	一九一〇
內地	一五七	二四一七
支那	三四	五二六

兎に角人口に對する富源の割合は不公平と云へる。茲に、その富源たるやその根源は先占である事を顧慮しなくてはならぬ。富源の國民的所有が如何に變革さる可きかは殘されたる至難の問題である。『支那人の顏に、タケた或る物があると、私が今まで思つてゐたのは、その顏に餘計なものがないからであつた。支那に來てその顏の群れを見た時には全

くそれで好いと思つた。（中略）尤も此奴は惡漢らしいと思はれる顏にも出喰はす。然るに、さういふのに限つて、外國人―殊に日本人―に似た顏であることは遺憾である。』と長谷川如是閑氏が云つてゐる。廣漠たる大陸のうねりに盡くるなき富源を把握せる國民と然らざる國民とが心に於いて顏に於いて異つて來たのは自然の勢であらう。他國人はいざ知らず、少くとも日本人についたその餘計なものは狹隘なる島國に閉込められた所產ではあるまいか。然もその懊惱は年と共に深刻ならざるを得ない境遇に置かれてゐる。

◇　◇　◇

支那大陸に於ける焦眉の對策は或は吟味せる移植民によるとし、或は愼重なる投資によるとされて居る。元より前者は領土擴張政策に據るものでない事は明白であり、後者は國家資本主義を採るものでない事は我國が斯る主義を取る如きは恰も露西亞の革命を我國に持來さんとの場所錯誤と軌を一にすることとなるからである。進みて、我國、伊太利の如きは『一人の爲、又は數千人の爲の世界でなく、全人類の爲の世界』なることを提言し『無條件無留保で支那に於ける門戶開放、機會均等を遵奉し、支那の物資購入に當つても何等の特權を求めず列國の公正なる競爭を歡迎するものであるが、吾人は我國の產業的生命を維持する爲必要缺くべからざる食糧品、原料品の供給を支那に仰ぐものである』と加藤全權が華盛頓會議で聲明せる如く、世界市場の平等、原料品の均等を、大陸の內外に、策を措き信を以て希ふのである。

◇　◇　◇

滿蒙の大陸には軈て來る國際經濟戰を描かなくてはならぬ。それの起らぬ程貧弱なる大陸ではない。日本及日本人の死活にかゝる問題は、支那內部より支那を凝視せる外部諸國より起りつゝあるが、何と排斥されても眞に支那を理解する可能性あるは日本人なのである。そのよりよき理解の爲に今般團員の受けし肝銘は從來の漠然性を或確實性へ導いた事を信じ、當局者の盡瘁に滿腔の敬意を捧ぐる。

（四年十月十八日―山口高等商業學校研究室にて）

鮮滿雜感

福岡縣松ヶ江村　廣石音彥

自分は今回始めて朝鮮滿洲を見せて貰つた、十二日間に於ける鮮鐵及滿鐵の行屆いた御歡待に對しては感謝の外ない、又吾々の得たる見聞に至つては未だ嘗てない知囊を滿たす事が出來た、以下感想の一二を述べさして貰ふ事とする。

朝鮮始政二十年の光輝ある記念の博覽會は大規模で朝鮮文化の粹を集めた感あり諸種の施設の行屆いてゐるのを見內地からの出品にも隨分力を注いでるのを觀取する事が出來た、我福岡縣が鑛產縣としての面目を發揮せるを見て意を强うした。

一体今迄の智識を想像で描いてゐた朝鮮に對する考は全々裏切られて仕舞つた、文化產業の施設は勿論敎育も亦普及し思想生活も共に折合つてゐるのは驚くの外ない、特に邦人の勢力が非常に擴られて居るのは愉快に堪えない、獨立運動現在では其跡を絕つてる樣に見ゑるが內面的思想の安定に至つてはまだ充分ありとは云い得ないらしい、全鮮民をして總督政治に悅服せしむる爲めには更によりよき善政を布かねばならない。

朝鮮の農作は本年の旱害のため南半一帶に於て不作が特に甚だしい、水なきが爲め見渡す限り荒原たる枯野原を見るが如き慘澹たる田面を見る時日本デンマークによりて有名な三河國碧海郡を想起せざるを得ない、日本デンマークが今日の如き繁榮時代と顯現するに到つた理智と發奮と協力との驚くべき偉大力については單に農村ばかりでない凡ての產業に從事してゐる人々が眞劍に硏究して見る必要が有ると思ふ、日本デンマークの今日の繁榮は農林技術化の範域から一步踏み出して農林經濟化に成功してゐるからだ、產業は技術と經濟と並び進むべきものであるに拘らず兎角前者にのみ傾いて後者を等閑に附するからである朝鮮では現に尙米の增殖が奬勵されてゐる、大いに考へさせられる問題である。

鮮人勞働者の洪水も又內地及朝鮮としての大問題である、打續く不況によつて、さらでだに多い失業者は勞働範圍も狹くなり其得る賃錢も安く眞に背に腹はかへられぬ眞劍の問題である、安價な生活に甘んずる鮮人勞働者が內地に入り込む數は夥しいもので內地の人達がこれに依て奪はるる職業も尠くない、其地位の安保をおびやかさるる事は非常なものである而かも彼等鮮人の出稼勞働者は今後尙續出する傾向が濃厚との事である、彼等は何故其土地に定着しないのか?これには種々の原因が有らうが呪はれたる小作制度の罪が重なるものだと考へても差支あるまい、李朝中葉以來の秕政は旣に土地への愛着心を奪つた更に乱暴なる小作慣行―定租法、執租法、打組法―の如き馬鹿々々しい制度―と高利貸の魔手が彼等をして流離放浪の天涯の兒とならしめたものである、一体朝鮮でも內地と同じく映畫やラジオや、光と熱、明りと酒とに迷つて華かな大都會生活の色や音響に醉ひ、地方の血の氣の多い人達がつい故鄕を飛び出して集まつて來るのは同じ事象らしい、然し地方が枯れて何の都會生活があるべきぞ、今直面してゐる最大の急務は如何にして地方を富ますべきか、地方に新産業を興すべきかの点である、爲政者は十分此点に注意して地方の青年をして新たなる頭で改めて懷かしい故鄕の土の香を嗅ぎ返す樣にして貰いたいと思ふ。

◈　　◈　　◈

滿鐵沿線の風光の雄大、高粱より出でて高粱に入る太陽を拜する時滿洲はほんとに廣いなーと感ずる、滿洲に於ける滿鐵の勢力に至つては驚くの外ない、大連に於ける學校、病院、道路、港灣の施設撫順に於ける炭坑、奉天に於ける活躍、そして滿鐵が我國の國際金融財政經濟に及ぼす効驗等數へ來れば限りがない。

私は特に滿鐵の肝煎りで大連に建設中の連鎖式商店街の事が心にこびりついてゐる連鎖店（チェーンストアー）の事は度々聞かされ讀まされたが大規模なのは始めてである、大要を述ぶれば組合員百七人を以て六十五万圓の合資組織を作り滿鐵から八十万圓の補助を受けて一萬三千坪の土地に各種業態を網羅して大商店街を作るのである。各業者に對しては組合に於て營業資

金の融通、商品仕入の仲介をなし仕入商品の檢査や小賣の指定を行つて商店街全体を統制し異種業態を組成分子とした一種の連鎖商店とする事で此計畫は百貨店の壓迫及巧妙な支那商人からの壓迫によつて著しく苦境に在る在滿邦人の中小商工業者を浮び上がらせる目的で大正九年以來計畫中のものが最近具体化して愈々實現したもので此れが成績如何は內地各方面に多大の暗示と指敎を與ふるものと考へる。

次はオイルセール事業であるが此の說明は一行各位が御承知の事であるから略するが本年中に完成され製品を出すに到つてからの國家的事業としての將來に多大の希望と期待とをかけて刮目して成功を祈りたい。

偖滿洲で何を感じたかコ、一体世の中の事業は凡て功罪相半ばするものである世の功業を賞讃する時其反面を考へ度い、世の活きんが爲めの奮闘は必ず其反面に罪を伴ふ、文面の利器の發明の如きもそれが人生に多大の幸福を齎らすと同時に不幸を生ぜしむる事の多いのを遺憾とする、滿洲に於ける邦人の勢力抗充が我國に取り色々の意味に於て喜び感謝すべき事は勿論で將來益々强く廣く高く遠く伸び人事を切望する事は何より先きの念願第一だがとうか其勢力事業をして眞の力ある自我の上に建設して進んで頂きたい、研究と活働を推進すべき原動力は强い自我である心性である、獨逸の哲人フイヒテは「苟も靈性（ガイスティヒカイト）を信じ靈性の自由を信じ……靈性の永久的發展を求むるものは……本來的の人間であり、即ち獨逸人である』と云ひ、同じく獨逸人ラガルデは『獨逸の獨逸人たる意義は心性（ゲミュート）にあつて、血液其物には有せず』と云つてゐる、苟も一國の偉大さは物質的勢力そのものに有せず、そは偉大なる理想の熱烈なる追求そのものに有する、換言すれば雄々しき道義的建鬪の意志である、これ無き偉大な個人たると國家たるとを問はず單に後世の物笑ひとなるか或は淺薄なる後人の感性を樂ましむるに止まる、滿洲に於ける我邦の確保と邦人の奮鬪を感謝し堅實に一步一步靈性の杖をしつかと握り强く大地を踏みしめ高く望みを揭げ邦家の爲め永く久しく進まれん事を希願して筆を擱きたいと思ひます。

滿鮮旅行偶感

宮崎市（氏雄事）　兒　玉　半　峰

『百聞は一見に如かず、』と云ふ語は誰でも云ふ古い文言だが、今度の旅行に於いて一層痛切に此言の意義を感じた。

從來滿鐵の事業の廣汎なる事、大仕掛なることは、新聞其他に聞及んで居て、相當に其盛大を豫期しつゝ視察の興味を期待して居たのであつたが、實際親しく其地を踏み其各般の施設の成立せるもの、或は着々竣工の道程にあるもの等を見、其說明を聞くに及んでは內地に於いて貧弱な頭腦で豫期した所などは迚も〳〵及びも付くものでないと云ふことを悟つて實際面くらつた次第だ。

事業の手廣いことゝ偉大なることとは多少豫期して居たが、其れよりも一番强く私の豫備知識を裏切られた感あるものは其事業の着實なること、而して其根抵の深くして、基礎の堅確なること、總ての施設が恒久的にして確實に諸般の事業を最有利に遂行しつゝあることとである。

今少し具体的に一二の例を擧れば高價なる毛織物を製するに、其原料を採る獸類の性殖力弱き欠点あるを改善せんと研究の結果、他の性殖力强き併し乍ら原毛質の良質ならざるものとの混血兒を產出し再度此混血兒と良質の原種獸との混血兒を產出せしめたる者は、原種獸同樣の毛質良種にして且つ性殖力强き原料採取の所謂短を捨て、兩者の長所を併有したる改良種を得て多量に製品を出すの目的を達成して多國品たる高價の毛織物を壓倒するが如き、

又所謂有名なる撫順炭坑の露天掘に於いて炭層に至る迄の上層にある礦石より重油、其他高價なる種々の油脂類を製產し尋常一樣としては殆んど無價値に近き原料より漠大の遺利を得る事を研究し、精巧にして壯大なる機械を設備した

る規模宏大なる製造工場を建設しつゝあるが如き、

又目下露天掘の方法に依り採掘しつゝある地面は四五年前迄街衢整然たる市街なりし其の全部を破壞し、鐵道も停車場も市內外交通の電車も凡そ市街として設備完全なる街衢其儘を現在の場所に約貳哩程移動建設し、而して其移轉立退建設に要する總ての費用は露天掘の方法にて採掘する僅少日時間の出炭量の價額を以つて償却し得ると云ふ數字上の說明を聞くに至つて唯々呆然たらざるを得ない。

以上は僅に一二例に過ぎざるも是等の萬事、總て專門的に研鑽を重ねたる優秀なる學究專門家の智識の成果に依るものにして適確堅實にして少しの遺漏だになし。

今一つ彌實着堅確の遣り口を裏書するに逸す可らざる一事がある。それは生產品の價格の基礎と成るべき工費の低下を企畫せしことである。而してそれは極平凡なことだが一面立派な社會事業であり兼て滿鐵に取りては有益なる文字通りの一擧兩得の事である。其は苦力の收容養成である滿鐵では彼等に對する侮蔑的名稱を避け（是等些細の一事にも積極的な周到な注意が拂われて居るのを見る）改めて是を華工と稱して居る。華は中華民國の國名の略稱、工は職工又工夫を意味することは說明の要なきことゝ思ふ。此收容所が又彼等に滿足なる生活に安定せしむべく遺憾なき周到なる設備が整頓して居る。而して彼等より安價な生活費を徵して滿鐵自身としては收支立派に相償ひ、彼等華工としては生活の安定を得るのみならず心掛さへ宜ければ相當貯金も出來る樣になつて居る。滿鐵事業の大部分は是等華工の勞働に待ち而して其賃金は少くとも內地の賃金に比して半額以上にら騰ぬ、四方八方便益を得て結果は生產品の低廉供給となる誠に此上の事はあるまい。

以上の通り見るも聞くも唯是感歎の外はない。

滿洲の實益は滿鐵が確實に握りしめて居る。而して着々且孜々として彌が上にも堅實の地盤を築成擴張しつゝある。其手の延び方其足の擴がり方そして一握一歩に注意深く確實味を忘れぬ有樣、國家戰勝獲得の效果を最も有意義に收めて國益の發達に成功せしを見る時私は云ふ可らざる快感を覺ゆるのである。偉大なる戰勝の功は今更云ふ迄もなく當時陸海軍將士の血肉に換へたる賜であるが、其戰勝の獲得を斯くの如く充分の效果あらしめしは偏に滿鐵の力と云つて誰れも異議はあるまい。

而かも此事は史實の裏面に秘められ是迄世間に顯はれざりし一事として私が此旅行に赴く貳週間餘の前日に或る政治家から聞いた事であるが。

戰勝講和談判終了歐洲諸國の遼東還附と云ふ嫉妬的横鎗も終結を告げた、直後米國の一利權ブローカーに致され危くも此滿鐵の利權を失はんとせし時。我宮崎縣出身たる小村外相畢世の努力を以て閣僚、元老諸公を說きて、此權益の讓渡に反對し辛うじて是を取止めし事實を始めて知り得たるに想ひ合はする時、宮崎の一縣民としては一層感無量なるものがある。

斯く快感にひたる時斯感情の一角を卒然として突き來るものあり。其は近時屢々耳にする政黨屋の利權あさりである。此等の輩は先づ第一に內地外の新領土特に滿鐵等には勇敢に惡手を加へんとするが如し、戒心の上にも深く戒心せざるべからざる事ではないか。

既に從來も現今も其破綻を出して居る事實あるを思ふ時國家の爲め最大寒心事と思ふ。今後吾人は極力政黨の爪牙たる其利權屋にかき廻される事なき樣彼等をして一指をも染めしめぬ樣彼等から滿鐵を防禦せねばならぬと思ふ。

其他今回の旅行に鮮滿兩境に於いて面白き事、興味ある事、幾多なきにしもあらざりしもそは別に特記すべきなく私の多大の感を惹きしは上來記述の事のみ。

筆を擱くに當り有意義に此旅行を終りし事を感謝し團員主催側諸君と共に永く是を記念せんと欲す。

娛樂室の一隅にて

宮崎縣小林町　T. Y.

自分が年來期待していた所、鮮滿十日の旅は視察と言うには餘りに多忙たるもので今此の十日間を追想してみれば雜然たる印象は恰も七色の連續が白色、謂はゞ無色を現はす夫の樣に茫然殆んど空に等しいものがある。然し白色を分析して貴重な七色を得るやうに現在のこの空觀を分析すればやはり貴重な視察結果が自分の腦中大きな一廓を占めていることを感ずるのである。

地理學上より見たる鮮滿の地位、及び歷史上より見たる鮮滿における三千年間の推移は吾々が文學上に於いて畧々知れる所であつて入滿第一の印象は文學に通じて心裡に描いていた滿洲と畧々相似たものであつた。そして朝鮮に於いては慶州及び樂浪等の古蹟は實地に就いて見ることは出來なかつたが大邱に於いて僅の停車時間に見た新羅の遺物展及び平壤における樂浪の遺物等に就いては聞きしに勝る古代文化の發展狀態を想像し、牡丹台上台下、高麗の遺蹟に遊んで四虛亭最勝亭等の展望をほしいまゝにし、溶々たる大同江上輕舟を浮べて幾百年前における高麗人士の心理に想到する時、更に又旅順博物館における漢民族の深遠測り知られざる文化の遺物に接し、往古の朝鮮及び支那に對し限りなき欣慕の念止む能はざるものがあつた。

殊に旅順博物館藏品の價値は自分の如き凡眼にもまことに立去りがたく見ゑたものであつて、充分なる時日を以て精

細に觀察するならば東洋文化の粋として得難き珍品の多きを知るであらう。

然し之等方面のことは少なくとも自分に於いては今回の旅行の將來にあるのであつて自分の欲する所は鮮滿の地が現在如何なる經濟的發展を逐げているかを知るにあつた。

尤も產業方面に對する視察が主とは言ふものゝ、特にどの方面をと云ふ希望があつた譯ではなく、目をひく所悉く興味を感じたのであるが、朝鮮においては特に水利事業及び興南における發電計畫を興味を以て眺めた。

釜山を出てから沿線各地における旱害は頗る激甚を極めていたが、勿禁における水利事業地の實績を目前に見て朝鮮における水利事業の如何に必要なるかを如實に知つた。

故に朝鮮博覽會における自分の時間は始んど水利事業に關することに費してしまつたのであるが、事業が重要であるだけに規模も大きく成績も頗るいゝ統計が示されてあつた。

それから興南における發電及び工場計畫を見てはあの山中にあれ程の事業が遂行されるかと思つて近代的機械工業には相當に接觸している自分ではあるが今更に機械文明の偉大さに感じた次第であつた。

滿洲においては規模の大は先づ大連の築港事業に指を屈するが地勢上たとゑば京濱、阪神の諸港灣を下關に集めた場合に比較せらるべきもので、鐵道による他への交通線があるとは言へ、營口及び安東に貿易港としての價値が餘り認められないと言へば背景の大きさに比して寧ろ小さい程に思はれる。然し目下對岸に石炭專用の埠頭工事中であると云ふからその完成の曉は海陸の連絡は頗る圓滑となるであろう。

現在の繫船力約四十萬噸、荷役の華工約二萬人、あの千數百坪の大倉庫が數十棟ずらりと並んだ樣や、一山六十噸の穀物があの廣い露天積場を埋めている樣は流石に壯觀を極めて心强いものがある。

次には撫順、案內者の言う通り此處は明に滿鐵、否少しく誇大な言を借れば滿洲の心臟である。

直接關係員數三萬數千人、一日の採炭量二萬五千噸附屬事業も之に釣合つて大きい。凡そ滿鐵の諸事業は全部スケイルが大きい。內地などでは倉庫の中の模樣を見てから事業の手加減をするらしく見ゑるのに、滿鐵の方針は事業は必要以上位にしておいて入費はあとからいくらでも出すと云うやうな風に見ゑる。單に生產的事業ばかりでなしに病院のやうな建物にさゑも必要以上の巨資が投ぜられているのではないかと思はれた。かゝる大まからしさ—綽々たる餘裕振りを見せることの出來るのも結局撫順のたまものであらう。大連と撫順とは恐らく滿鐵の內容を代表する双壁と言うべきか、此の兩者を連絡する鐵道の重要性は言はずもがな、之等に附帶する諸事業が各々分擔する所あつて大滿鐵を形成しているのであらう。

滿鐵の規模はかく大きく、かく力强く、かく頼母しく見へる。が然乍自分の實に不可解とした所は日本人口の過小なることであつた。滿鐵が巨資を投じて宣傳之力めつゝあるけれども目下の在滿邦人は辛うじて二十萬內外ときく。收權以後既に二十五年、恐らく當時の日本の政治家は高遠な、日本の將來にとつて嬉しい希望を抱いたであらうが吾々が行つて見た滿洲は明に、決して日本人のものではない。無論滿洲の土地を吾々の所有にしたいと言うではないが、自分は今少し『日本』が滿鐵附屬地のみならず、南滿各地にしみこんでいることを豫期していたのにさはなくて足一歩附屬地外に出づれば、支那人の茫々然として捕束すべき所なきが如き中に脉々たる新生の底力を自分は見た。彼等の勢力が次第に邦人の事業を壓迫していると云う話もきいた。滿洲に關する悲觀論者の言必らずしも根據なきに非ず、樂觀論者の言亦必らずしも信をおきがたきを感じたのである。壓迫を感ずるのは無論夫れを感ずる者がよくない譯であるが、そう云う邦人が吾々の先輩が血とかゑた此の地に折角築いた生活の根據を抛棄すると云う話を聞くに至つては實に遺憾至極と言はねばならない。

かくして日本の人口問題に對する貢獻は犧牲に比しては餘りに僅少な現在を招來しているのであらうか。相手は一望

際涯なき廣原に生を享けて氣宇おのづから大なるべき滿洲人、且社會はあれども國家を必要とせざる程の偉大な民族力を有すと稱せらるゝ漢民族であるが、南滿各地の戰蹟を訪うて當時の將士の苦心を思う邦人は支人の壓迫位に押される筈はなかるべきである。生活程度を云爲するは當らず、駈引の巧不巧など亦終局の原因とするに足らない。要は滿蒙に對する一般邦人の理解乏しく、收權の意義を感ずること淺きに因しているのではあるまいか。

此の旅行中最も遺憾だつたのは滿蒙資源舘を僅か一時間足らずで辭去せねばならなかつたことである。今回のやうな旅行隊はあそこは少なくとも一日位は費やすべき所であらう。滿蒙資源舘は謂はゞ大滿蒙の縮圖であつて凡そ滿蒙に關する事項中調査して遂げられざるものはないであらう。吾々が僅か五十分を以て割愛の止むなかつたことは今は餘儀なしとするも今後の渡滿者は是非ゆつくり觀覽すべき所であらう。

旅行漫談

戸畑市　高田發音

◇汽車の中から。

禿山!!　禿山!!

豚臭い鮮地の人!!

ニコチンの臭のする鮮人!!　私の頭には、かうした言葉が浸み込んで居た。そして汽車の窓から、又汽車の中にかうした人間、自然を見せつけられて屹度厭な思をさせられるだらう事は旅行前からの可成り强い決心の一つだつた。然し

私達の汽車の窓から這入つて來る風は何の臭ももつて來ない。すが〳〵しい秋風がさら〳〵と素通りして行く。汽車は町を過ぎ野を越へ山を追つて進んでいく。けれど想像してゐた程の禿山は見當らなかつた。まあ禿山と無理に言へばそう見ゑるかも知れないが……この禿山に小さい松がひよろ〳〵してゐるのを見ると、政府の殖林の英心が伺はれて大變よろこばしい。

のつぽのポプラの林の中の藁屋の部落を見た時、私は直ぐ草の中に群がり出てゐる糞茸を思ひ起した。而し二度三度と見なれると、其の藁屋に艶が見ゐる。唐爪（?）を屋根一ぱいにはわせたところ等一種の風流さがあり、こつ〳〵した岩山を背景にした南畵の野趣が思ひ起されて大變面白い。

秋も早酣だ。黄金の波は此處も變りなうゆれてゐる。內地の今年の旱天の中に喘いでゐる稻田に比べると雨が少ない割合に相當の實のりを見せてゐる。白い服の人が三四人赤牛の親と子を追つてゆる〳〵と田圃道を通つてゐるのは、如何にも暢氣そうだ。自分の住ゐにはまだ可成りの遠さだらうに。私は小さい時こんな所を畵にした油繪を見てゐた。夕日がきら〳〵輝いて美しい陰影が稻田の上を流れて行く。

◇白いきもの

からだの割合にずつと大きい白い服、頭の大さとは不釣合な黑い冠、內地の風物を背景にして見た時、一種のいやみをさへ感じてゐたこの風彩が、この土地では又何といふいゝ調和を見せてゐる事だらう。私はこの調和がたまらなく好きだつた。そして或る種の親しみさへ感じさせられた。これは支那服に對してもそうした感じを持つたものだが……私の目が慣れたといふこともあるだらうが、悠長な大自然のふところの中にゆつたりと、從つてうすのろく育つたであらう鮮人の生活そのまゝが、この服裝と如何にもよく調和してゐるからではないだらうか、私達はこんな美しい調和の中にこそ上品さや親しさを見出すことが出來るやうである。かうした意味合から私達の日常生活のいろ〳〵に反省すべき

多くの事が含まれてあるやうに思へてならぬ。

◇雨が少ない

内地ではどんな溝川にも少しなりとも水が流れてゐないことはない。けれどもこの土地では可成り大きな川と思はれる川にも殆ど水を見ることが出來ない。川原の中に畑が出來てゐたり道が通つてゐたりするのを見ても昨今の乾きではないやうだ。雨が少ないからだらう。

旅順の戰跡を訪ふた時、奉天の街を通つた時私達は大變なほこりを浴びせられた。煙の様な砂ぼこり、否濛々たる砂煙、否々黄塵万丈とはよく支那人が言ひ表はした言葉だ。隨分大袈裟な誇張だとばかり思つてゐた事が事實そのまゝだといふ尊い經驗をして來た。ほんとうはこの言葉以上といつてもよい。これもやはり雨が少ない爲だと思はれる。

◇酒!!女!!

朝鮮では妓生さんが男の方に大分もてた様だ。おなほりになつた方もあらう。私にしても決して悪るい氣持はせぬ。歌詞の意味はわからぬにしても蕾の様な唇からのびやかに流れて來る美しいメロデキーは自ら陶醉の境に誘ふ藝術の力はどこまでも偉大なものだ。車中で時々聞き苦しい話が聞えて來る。多分妓生さんの思出話だらう。

月尾島の大廣間の浴衣がけの無禮講お酒の好きな方の前には二本三本と空瓶が並んで行く。いゝ氣持の人がそここゝに出て來て愉快そうな笑聲が起る。愈々メートルが上つて來ると裸踊が演じられ、どら聲が張上げられ、怒聲罵聲が多くなる。或は魂の存在さへ疑はしくなつた人もある。

酒!!女!! 大分昔考へた事だ。此度又久振に更に考へて見た。昔程極端な憎しみまでは起らぬにしても、人間の愉悅の理想だとはどうしても、思ふ事は出來ない。これは自分の生活環境がこんな事に超越してゐる關係からだらう。酒も女も愛すべく、又酒女を愛する人も亦可愛らしく思はれる。そして又この現在の人間社會には二つながらに相當に必要な

ものだとも考へられる。只併しこれは自覺の上に立つての事である。自覺して酒を吞み女を愛せよ。如何にも偉らそうにしてゐて酒に吞まれ女に弄ばれて平氣な人否喜んでゐる人を見、聞きすることがある。誠に苦笑せざるを得ない。

この尊敬する團体の中にこんな人がゐるといふのではないが、かうした生活に溺れてゐる或る特殊の社會の人を考へた時、そゞろに寒さを覺ゑる。

◇大石橋から

夜の滿洲は流石に寒い。靴下を通してしのび寄る冷氣にからだの奥底まで冷へ凍る様な心地がする。團体の親しさ賑やかさから一人離れて此處へ來て見ると、一人旅の心細さ、やるせなさが泌々と味はれて來る。特に見なれぬ外人の群の中にポツンと置かれた心細さ淋さは例へば狼の群の中の小羊の様に……私はこんな事がたまらなく厭だつた。

スチームで溫められた部屋の空氣が重なり合つて變な幻影がゆら〳〵ゆれる。改札口の夜氣にあたつてゐる内やつと列車が這入つて來た。大急ぎで乘り込んだら直ぐ目の前にカーキ色の軍服の人が二三人横になつてゐるのが見ゐたその刹那『まあよかつた』と一時に氣がゆるんでしまつた。私は此の時程軍人の有難味を衷心から感じたことはない。軍人といふよりその制服に對する有難味でありなつかしさであつた。若し如何に强い御國の兵隊でも支那服か或は普通の洋服を着てゐたら決して私に安心を與へてはゐなかつただらう。軍人がゐることで安心はしたものゝ、皆安らかな寢息を立てゝゐるのを聞くと又そろ〳〵恐怖が襲つて來る。とう〳〵私は朝の七時迄うつら〳〵しか出來なかつた。大連驛で團員の皆様に逢つた時は、母親の膝下に歸つた様なうれしさを覺ゐた。おかげで其の日一日は眠むくて仕方がなかつた。

◇滿洲卑見

滿洲から歸つて來た人の多くが、も一度大連で暮して見たいとか、旅順に行き度い等言つてゐるのを聞く。滿洲は相

當によい所に違ひないと想像はして見てゐるものゝ、やはり頭のどこかに馬賊の群がちらついたり、無頼漢がごろついたり、から〳〵乾き切つた北風の吹き荒む廣漠な無趣味な大平原が展開したりして、よい筈の滿洲が片端からくづされてしまつてゐた。

こんな想像は大連の大地を踏んで見てすつかりとれて仕舞つた。整然とした市街。綠の美しい街路樹、廣い通、のんびりした空氣、若し今この町での生活を薦められたら一も二もなく贊成するだらう。

奉天もよかつた。何しろ果しない大平原の中心都市だけに、意想外の大都會だ。只何となう空氣のひからびた様な氣のするのは、海に遠い都としては仕方もない事であろう。城内と城外の氣分がすつかり異つてゐる。大連旅順、營口等と比べて此處は大分支那人の威力が強そうに思へた。城内では一種の壓迫さへ感じさせられる。

私は先づ何よりも滿鐵の勢力範圍の廣いこと、事業の大規模なこと、しかもそれが周到な計畫の下に年々大發展を見せてゐることに驚いた。大連の港を見た時、我が國にもかうした立派な港があるかと身の輕くなる程うれしかつた。これは專心國家の爲を念ずる滿鐵の誠意のあらはれであると信ずる、我々を歡迎してくれる社員の一言一行皆赤心のほとばしつてゐないものはなく、又各地で聞いた社員の説明の眞劍さには自然と瞼の熱くなるのを感じた。

この大平原は限り知らぬ大豆、高粱の生産があり、撫順炭坑は漠大の埋藏炭を有し、理想的な大連港を控へて、鬼に金棒とでも言ひ度いところだ。

かく無限の富、廣き土地、種々の仕事等は幾萬かの內地人の來滿するのを待つてゐる。國家百年の計を憂ふる人は宜しく一日も早くこの廣々とした天地に思ふ存分の發展を願ふがよい。

◇團体生活と反省

終りに望んでこの團体が極めて自然的に美しい團結を見せて、一人の落伍者もなく又見苦しい爭鬪も起らずに、大團

圓を告げたことを衷心からよろこんで感謝する。これは全く主催者の極めて行屆いた用意と世話係の懇切な御配慮の賜だと思ふ。しかしこゝに靜かに、この我々の團体生活を更に深く反省して見る。

ともすると人間は勝手な心が出て一個人の場合は忍び得る事柄でも、團体の場合は直ぐ不平を言ひ度くなる。甚だしい物ずきになると事々に批判を加へて惡い様に言ふことを喜ぶ、これは團体生活に慣れないせゐもあるが、責任を全部世話係にかぶせて仕舞ふからだ。ほんとうにまかせ切りにするのなら、決して不平は起る筈はない、まかせ切りも仕得ないし、責任は負はないし、實に困つた心理狀態だ。

團員は世話係の心になり、世話係は又團員の心になる時、淸らかな空氣が生まれ、美しい團結が出來て來る。地主と小作、資本主と勞働者、社長と社員、校長と職員、等々皆これ日常の社會生活も同じことだと思ふ。

私達は充分に考慮せられた團体組織を作つて頂きながら、それをよく運用しなかつた事を遺憾に思ふ。團員はも少し自分の方から規則を要求しなければならなかつた。そうすることによつて班長の存在も一層有意義になるこれ等の正しい要求によつて表はれた規則は合理的である。そして服從に何等の苦痛が起らぬ筈だと信ずる。これは私の理想で或は不可能な事かも知れぬ。朝鮮の總督府の見學の時、鮮人團体と比較してその不規律さをつく〴〵恥かしく思ひ、各地での乘物の小ぜり合等を目擊し又自分が知らぬ間にその渦中にまき込まれてゐることを感じた時そゞろにうら悲しくなつた。老人でも女でも正直者が取り殘されて、要領のよいエゴイストが勝を占める。これが現在の日本人の生活の縮圖であり又一大欠点である。理想生活をする私等は今少し覺醒しなければならないではないだらうか。

◇　◇　◇

鮮滿の旅を終へて

宇部市　岩本　清

可成り長途の旅行に二百名の團員一同が人格的にすぐられた有志ばかりであり、主催者側が鮮鐵滿鐵を脊景にした旅行界の元締鮮滿案內所であつて、充分な車室、各地の發着、旅舘の割當て、視察地の手配等、凡ゆる配備の完全だつたことは、最も安樂に愉快に平和に旅行を終始するを得た素因であつたことを第一番に特筆せねばならぬ。

而して視察の範圍は甚だ廣く學術實業觀勝精神の諸方面に涉り、あらゆる職業階級を網羅したる團員一同の頭腦を練磨開發したる事蓋し大なるものがある。

彼の撫順視察に際しては露天掘工事規模の壯大さは今更記さずもがな、石炭採掘に伴ふて除去すべき上層盤を轉化して工業上國防上必要なる重油を精製するオイルセール工場の如き、悪質炭を轉化して瓦斯電氣となすモンド瓦斯工場の如きを見ては科學的の覺醒をうながし、滿鐵沿線の活況大連油房滿蒙資源舘大連埠頭の盛況を一瞥するに及んでは、大和男子の血は企業的高潮の体內に漲るを禁じ得ない。

大連碧山莊は滿鐵埠頭の力役に從事する華工の內万餘り下層階級を一定の地域に收容し、勞役、炊事、衞生、慰安、特設市場等あらゆる保護指導に完全な設備をした理想的合宿所である。生產文化の內面にかゝる會社施設が行はれて始めて事業の完璧が得られることゝ思ふ。（註、收容華工の多くは支那山東地方の窑居野棲の民その他風來人の集團で大部分教程なく思想なく財產なく實に人畜何れに屬せんやの輩で內地で稱ぶ下層民とは更にそのレベルを異にするものである。

絕對愛の表現とも云ふべき同善堂が奉天にあることは支那の誇である。門內には不具者、啞者、走女、老衰者、捨兒、

迷兒、行路病人、行きつまり者等あらゆる不幸に泣くものを收容しこれを哺育し養育し教育し職を與へ、配遇迄定めてやるためには事務室、講堂、食堂、教室、哺育室、醫務室、工作室さては各種織物工場大規模の合宿所等無數の堂宇設備を整へ、誠に愛の樂園生の大海である。清は滅びても、奉天城が落ちても、爲善不倦の偏額は永久に四百餘州の此天に輝くだらう碧山莊と同善堂とを滿洲の野に見たことは思ひ儲けぬ好土產でなければならぬ。

旅行中最も强く我等の國家的感念の緊張を促し精神的に强烈なる感動を與へたものは、旅順視察の一日だつた。東鷄冠山の砲臺戰利品記念舘、白玉山の表忠塔、納骨詞山々に見ゆる戰蹟記念碑一つとして忠烈無比の我將士苦戰物語り種ならざるはない。殊に爾靈山と記念碑の前に立ちては誰か數萬の兵士を犧牲にして占領した乃木將軍の決斷力をたゝへ又その心中を察しては涙なくして仰がれようか。蓋し同高地は旅順口灣を一眺の內に見下し、これが落城に最も重要地点なることは、軍略に疎い我等にでも容易にうなづくことが出來る。旅順一日の先導說明者は活潑にして軍隊式、而も或はエピソートを入れ或は訓戒味を交へて、最も委しく最も雄辯に戰蹟の說明をした、旅順の案內者として最も適當なタイプの人であつたことがうれしい。旅順の一日は本旅行の骨子に位するものだ。汽車、汽船、馬車、電車視察見學參拜見物と引つきりなしに續いたせゝらしい土塵の旅の間に、暫しの間乍我等の心を悠然たらしめ忽然たらしめ清淨の域に息はしめた所は、仁川月尾島、平壤牡丹臺大連星ケ浦を屈指せねばなるまい。陸から見ても島から見ても涼しい感じの月尾島、潮湯を浴みて後の一盃は永却の思出だ。いかにも明るいモダンな洋々たる景色の星が浦の風光に比べては牡丹臺は陰氣な押迫つた感じがせんでもないが、この正反對の景が牡丹臺の生命で、箕子陵並に數多の古びた亭宇が綠の間を彩つて誠に落付いた純然たる朝鮮の風景を表現してゐる。乙蜜臺より伏瞰した浮碧樓恰も大同の流に浮き出でゝその名に背かず實に風景中の隨一といへよう。月尾島、牡丹臺、星ケ浦何れも特殊な型と氣分とを以て現れる勝景に接し乍ら素養のない自分は詩も歌も句も文章もない事の恨めしさよ。

旅行の初めに見た京城朝鮮博覽會は立派な鮮滿の縮圖といへよう。豫想外に大規模の會場はとても一日の日程で見ることは出來なかつたが既に爰で豊富な鮮滿のあらゆる人地文の豫備智識を得ることが出來たから實地の視察にのぞんでは用意周到、視察摘確、印象深刻、であり決局最も徹底した鮮滿旅行を了へることができた所以である。

乙密臺下に舟を浮べて右手に連る牡丹臺の美景を眺めつゝ流れを下る、河岸に衣洗ふ數多の鮮婦が白影を水に投ずるも朝鮮情緒の最たるものか、美婦を求めて河岸に舟を寄するも又旅の興といへよう。大同門に上陸して妓生學校の見物も話のたねか、こゝまで日程に入れた主催側は立派な苦勞人だ。

既知の豫想に違はぬ仁川閘門式船渠と鴨綠江の鐵橋は餘り新しい興味も引かなかつたが通橋稅關檢査は旅の興を殺ぐこと夥しい。

朝鮮と支那と境の鴨綠江
渡る鐵橋はよけれ共
トランク出せトランプ出せシガーないか稅關檢査のあほらしや

氣持のよい安東驛助役の先導で製材工場、鐵橋、鎭江山公園の見物を終つた一行は愈々最後の列車にのりこんだ。さらば鴨綠江よ、さらば支那よ!!平壤は栗が名產だ、大邱は林檎の產地だ、思ひ思ひに土產物を整へて幸福に醉つた人等をのせた列車はまつしぐらに南鮮の暗を釜山に走つてゐる。

◇　◇　◇

東鷄冠山北堡壘に立ちて

福岡縣椎田町　詩　津　子

今し思へば、夢の樣な十二日間平凡な事のみに馴れ切つた頭には、餘にも强い、刺戟劑であつた。珍らしいのは、分り切つた事である。すべてが初めてだから……珍らしきが故に、面白い、といふにはあらで、其の珍らしさを全く除外して、今度程愉快と、有意義の融合されたる旅行において、其の中の一部分を取り出し、文字に表す事の、いかに困難なるかを、今度初めて經驗させられた。

餘りにも多すぎるが故に――量においても質においても、――旅中のどの一日、否、どの一時間を取り出して見るも、詩であり、歌であるものを。

つくづく、文操のなきを悲しむ、

さはさりながら、去ぬる十二日間の、繪卷物を紐解し時、まづさきに腦細胞を刺戟する物は、何と言つても、旅順視察の一日である。餘りにも大きな敎訓であり、哀詩である。旅順陷落を、有頂天になる前に、それに拂はれたる、犧牲のいかに多かつたかを、思ふは、吾人の義務にあらずや?

幾多の名歌、名文には接して居るが、今此地に立ち、一言も漏さぬ山々の、聲なき昔物語の前には、幾何の價値さへみとめ得ぬ、とさへ思いぬ。

靜かに往事を思へば自分も其のまゝ戰場の人となる心す。

幾千人かの生血を吸い、斷末魔の聲に包まれたであろふ、此の山。

彌猛心を、おさへつゝ、足音忍ばせた決死の斥候を、圍つたであろふ、あの森。

女郎蜘蛛の粘糸の如き、鐵條網。
轟く砲音、潑剌として耳を劈く機關銃。
報國の一念に固つた突貫の聲、主なき軍馬の嘶き。

眼を閉ぢて、靜かに回顧すれば、夜の玄海上にて共に故鄕の燈を眺めし、二百人の友も無く、過ぎにし行程も、進むべき豫定もなく、

唯乱軍中を徘徊い歩く我が魂あるのみにして、我が身さへ忘れはてぬ。

砲聲止むかとみれば、南滿の夜は更けて、あたりは寂として聲なし。戰い疲れしは、彼我の强物のみにあらず。心なき草木も、眼を閉ぢ、耳を塞ぎて過ぎし一日を回想せん。

滾々として流れる血潮に、我と我が身は洗はれ、帝國萬歲を叫んだ紅唇は早や色褪せ、瞋恚の焰に燃ゐし二つの眼は再び開かず。
滿足なりし五体は無慚にも、もぎとられて、樹間に横はりたる姿の、いかに悽愴を極めし事よ。

天も泣け、地も泣け。

月あらば曇れかし、月なくば星、落ちよ。

英靈の前には心なき草木も回向するに。まして吾人においておや。

弱き人の子の至情にや。『君死に給ふ事なかれ』と讀みし歌人ありとか。
しかしながら御身等の荒野に流しゝ血潮のいかに淸く、御身等の一片の肉塊のいかに、貴ふかりし事よ。肉彈に次ぐに肉彈を持つてした御身等の、いかに雄々しかりし事よ。今此地に集どへる、二百の友の淚こそ、御身等に捧ぐる法水なれ。密かに漏るゝ忍音こそ、感謝と感激の發吐なれ。

御身等の玉と散り給ふてより早や幾星霜、されど天地の續くかぎり、大和魂のあるかぎり御身等に捧ぐる、熱淚の止ゆる事やあらん。

往事渺茫として、夢に似たりとか。
眞、九夏の天も暑を忘れて、御國に盡しゝ御身等、ものゝふの苦痛を思へば、黃埃の煙を上げて走る馬車にも、安き心もて乘り得ぬ。其の昔、御身等が登りし一歩には、全生命が賭けられしならんこの山、この道。
今は步を防ぐ何物もない。砲聲もなく、銃火の洗禮もない。
轉、今昔の感にたへず。

思へば此地に、安閑と立つのさゑ、そらおそろし。我が同胞の血と肉にて購い得たる山上に立てば、汚れし心も淨化され、眠れる心もよびさまされん。混沌たる思想界に喘ぎ、よからぬ外來思想にとらはれし人あらば、一度此地を訪れ、此山野に抱かれずや。宛然として目覺むならん。

此如に立ち、遠く思を運ぶ時、しばし此地に止りて、心行くまで戰蹟の巡禮をもなさばやと思いぬ。
されど時刻も迫れば、今は懷しの御身等と、訣別の止むなきにいたる。我等二百の友は、今こそ美しき心もて、元の道へと引きかへさん。訪れし時と、道も、馬車も、乘る人も同じなれど內に宿れる魂には雲泥の差あらん。
あゝ。旅順の山野にて護國の鬼となりし、鄕等よ。赤き夕日さす滿洲の野にて靜かにねむり給へ。
隈なく晴れし月は、御身等の伏床を照さん。肅々として見舞ふ秋雨は、御身等の墳墓を淸めん。

されば。なつかしの同胞よ。
御身等の冥福を祈つゝ、我馬車を急がせん。

（四、十、十五、）

感じた惡口

WS生

御禮は團長が言つたし良い事は誰かに讓つて惡口の二三を書いて見よー朝鮮は込み合ひますからとの前口上で千も合點、格別博覽會場地等は又一層の事とは萬々承知だが先づ汽車の乘降に後から案內附添人が來る始末に彼方此方でマゴマゴする此マゴマゴが急ぎもせぬ旅で僅か三分や五分、ソンナ筈は無かりソーなものだがソコが人情だテ？？？？？彼れが先方に通じた團体票でもあつたらば………と。徽章はあつたが揉み合ふ內に落ちた者も多數で係員から『落ちぬ樣に注意しろ』とカスは喰つたが取柄位で殊に京城地方では客の九割以上が夫々徽章佩用に及ぶ御連中で何等の標識にもあり得ない寧ろ『徽章の無い者が此團体』と言つた方が通りが良かつたかも知れぬテ

京城の宿の入口に『女中入用』との貼紙は手不足との下駄を先づ預けられたが何十年目かに小學時代の修學旅行をサマザマに味せられたのも又格別と澁い顔して喜んで置こー然かし團員分宿で一樣でも無かつたろーし中にはキーサンに走り『二ツの淋しさを一ツの樂しき』に出立を忘れかけた者もあつたろーから此處には略して………。

仁川のドツクも驚く程でも無く平壤の戰場も昔話の如く只アノ穢い家に純白な着物のコントラストの不思儀と。北する程心淋しゐが京城附近に至る鐵道沿線の殖林が大分草を覆ふた事位の外格段の印象も無く滿洲に入つたが滿洲では打つて變つた待遇振り。

安東に入つて安東を出る迄全く至れり盡せりでソレコソ一寸惡口の種も見付からぬ、殊に大連の宿如きは單獨旅行の樣に上々待遇。處が物は多く買つてはならぬ、最後の安東での稅關、是れが此旅行の最高の不愉快を買つた。所持品中の高率品に課稅するのは先づ御勝手として其課稅が何に基準するのか聞けば『認定』と言ふ其認定の立脚が、數量か、容

量か、金額か、人柄か、風采か、服裝か、對應振りに依るか見當が付かぬ、二十錢のロシヤ飴と百圓のヒスイと何方が高いと聞いてやり度い氣持がした。人手が足りぬなら增せばよかろー時間が不足なら長くしたらよかろーものを、官公吏と言へば巡査と村役場員より存ぜぬ一行を滿洲ゴロや密輸常習犯者等と同遇せし觀ありしは不愉快の最なるものだ。ソレハ此方の勝手として當初は稅金徵收書を發行してたが、終ひには其紙も盡きたとて簡單にポケツトに入れつゝあつたが地獄ポケツトではあるまいナ。

お上へ納まる稅金なれば未だアキラメも付くが………。濱口サンから五分が一割じや無く十割減捧喰つても未だ結構と言ふ始末でも若しありとせば………。

滿鐵はデツカイ、大連は奇麗撫順は大きい滿洲は廣いと一目見らるが或る一面を十年二十年の昔と較べて余程狹くなつて來たと感じた、殊に朝鮮然りで何處も同じ秋の夕暮か………。誰もが口にする所謂『行き詰り』の感多分………彼の廣い山野をロシヤ飴をヒスイに代へるが如き工夫も無いものかナー

朝鮮も滿洲も何方もお江戸があると見へて江戸つ子を使ふ彼れが『オマヘン』語に代る時で無いと眞の實入りは豫期出來得まいテ殊に江戸ツ子調子では支那商人との太刀打や如何に………

支那人で思ひ出したが彼の支那人ドツコイ中華人の忍苦努力は恐るべきで彼の上『國』を知つたら始末が惡かろー、マー精々內輪ケンカに精出して敎育も當分御延期『國』てふ觀念もお忘れに………。書こーと思つても種が無いのはサテワ案內所サンが痒い處を御承知じやつたナー

◇ ◇ ◇

安東驛の稅關檢査

福岡縣行橋町　泉　武　二

安東での視察は國境てう点に於ても特に感興の深いものだ。然して此の半日の旅心を突如破るものは稅關の檢査である。

滿洲の天地に生產されてある品々は旅行者の單なる趣味とか嗜好とかもあるが又一面は土產として多くの知人へ贈りたい。換言すれば滿鮮の內地へ對する宣傳と紹介であらねばならぬ。特に大連、奉天で期待してた品のみならず、限りなく湧いてくる購買慾はつきないけれども携帶の規定量と禁制品の掟等のため出來るだけ遠慮してゐてもいつの間にかトランクは蓋もならぬやうに滿腹してゐる。

それを職務とか責任とかで稅關吏に隅迄ホジリ出すやうに一物も餘さずに調べられては旅情を殺ぎ煩雜なる事甚だし。殊に發車後迄も同車し居て探偵のやうな態度を見せつけられては愈よ叫はぬ。宜敷く今回の行の如き普通個人の旅行と異なり相當意義ある團体であるから吾等の團体を今少し紳士的に遇して載きたかつた。止むを得ざるとは云へ餘りに深刻では反つて此の情を哀れむとでも云ひたいものもあつた。

滿洲の煙草！　內地で果物か野菜を賣り步るくやうに店舗は言ふも更なり路傍にでも無免許？至る所で賣られて內地よりの渡來者には殊に異樣に感じられる賣り捌き方であるそして　此の賣り値に至つては　多く買ふ時は　値切れば安くまける。この所愛煙家には天下萬歲である。

買ふは買ふは旺んに買ふ。葉卷、兩切が規定量一ぱい、此の上慾張るものは制限も何もあつたものではなくトランクにポケツトに潛入させる。知るも知らざるも煙草を　喫しないやうな人は　物色されて一人當りの　所持量を胡麻化してゐ

る。それでも過剩の分なぞが多くて、喫ふは一同盛んに喫ふ。その煙は、まさか汽車火事だと迄は他所目に見へはしなかつただらうが。紫煙、濁煙濛々。車內は丁度煙突の中のやうである。煙草を用ゐない人や御婦人には重ねて迷惑千萬である。乘り込んで來る稅關吏――もしこれが準備中でなくて檢査中であつたら――ば狸か狐のやうに煙攻めの一手に泣かされるだらうに。

何事の間違か吾等の班長さんは檢査上の疑義でか『一寸來られたし』で詰所まで稅關吏に同行を求められたのも檢査中の頓だ一挿話だつた。

次に一つ、主催側のＩ氏が求めた支那服を着用に及んでるのは天晴れ鄉に入つては鄉に從へでか、それとも策略あつての事で檢査劇の餘興の一つと見たは僻目か。

さらけ出された品物と、ゴタゴタで車中はしばしば汽車博覽會のやうだ。目を光らす檢査員はさしづめ顧客で五六人、出品者は其數十倍とはさても皮肉な汽車博覽會よ。

檢査するもされるもこれ等しく人である。言ひにくい事等言ひ會ふて混乱と雜沓との裡に兎に角うるさくて七面倒な稅關檢査がどうやらすめば汽車は驛を出た。

大風一過、凉しい顏して渡る鴨綠江の大鐵橋上、窓外に眺むるロマンチツクな國境の景色に今更ら口すさぶ鴨綠江節の一つ

　朝鮮と支那と境の鴨綠江…………

◇　◇　◇

鮮滿視察感

門司市　宇野甚五郎

私は歳七十を越ゆるが、身體は至極達者で元氣此度下關鮮滿案內所主催の鮮滿視察團に加はり些の故障もなく無事に歸宅した、其旅行中見たり聞いたり、した事柄に付き私の感じた点も尠くない、中で是非人さんに、感を頒たねばならぬと、思ふ事を少し記して、未だ鮮滿の土地を踏まぬ方々に御示しをして、置きたい。

下關から關釜連絡船で釜山につき、鮮鐵京釜線の列車の窓から作物を眺めた、金泉方面までは旱の害があつたが、それより先は大した事もないと見た。

◈ 米作と肥料について

田の畦や小道と云はず原といはず、雜草がよく刈り取つてあるのが目についた、是れは稻作の肥料に使つたものではなかろうか。とすれば其苦勞は內地の農家に較べて氣の毒に思はれた。何分稻の出來生へから見ると肥料の足らぬ爲め十分な收穫がない樣に感じた、是れから先官も民も共に力を協せて、米の收穫を增して日本人の食糧に安心を與へて欲しい氣がした。

◈ 京城に入り朝鮮神宮に詣る

京城は全々內地の大都會に居るも違はぬ心持がした人口三十餘萬人、內八萬人が內地人と云ふ今少し內地の人が行つて居るのが、よくはないかと思はれた、市中の小山の上に御祀りしてある朝鮮神宮に參拜した時は、伊勢の大廟と、明治神宮に詣つたと同じ感に打たれた、是れは日本人は、たれでも同じ事であろう、あらねばならぬ筈であると思ふ。

平壤は實に要害大切な地で古來大戰の跡が偲ばれた。

◈ 鴨綠江の大鐵橋を視る

新義洲より向は安東縣、鴨綠江に架つた大鐵橋は汽車も通れば、外に車道人道が別々にある船の出入は開閉橋がある、長さ九丁の鐵橋仕掛も大きい、試みに聞けば工費總額一千萬圓に近いと云ふから想像も出來得るであろう人の智と力の働きとは云へ文化の進步も驚くべきものがある、大体に朝鮮は見るもの大陸的であつて、內地のものには珍らしい、然し日本國民は全体にしつかりせねばならぬ。猫の額の樣な所で行詰つた、仕事に、コセ〳〵して居る時ではない事を感じた。

◈ 滿洲に入る

奉天は清朝の都地であるから、見るもの皆支那一流の奇拔なものがある、然し左まで感ずる程のこともなかつたが我同胞の大に活躍してをることは心强く思つた。

◈ 撫順炭坑を視て

この炭坑の有樣は我國民に殘らず一應見せてやりたい氣がした。殊に說明者は力の入つた言葉で談された、それを聞くと全馬力を以て掘つても向う七十ケ年間には掘り盡すことの出來ぬ程澤山な石炭がある。現在朝鮮滿洲の鐵道は素より船舶工塲等總ての需要を充して尙餘りがあると云ふ實に我國の寶庫である。世界中の人が此の寶庫には涎を流しては支那人の尻を突き居る狀態であるから何時何人が云ひ掛りを付けるか分らぬと思はねばならぬ。內地の人には滿洲と云へば、馬捨て塲の樣に思つて居る方も尠くないひ赤い夕日の歌位で濟してをるが、自分共は多くの虎の目が光つてをる第一線に働いてをる國民全体に大に目を醒して、一朝事あるときは最後の手段に訴へるとも、此の富源は堅く握りしめて離してはならぬ。折角視察下された方々は此事を以て內地の人への大切な御土產として頂きたひとの意味で詳細に語られた、それを耳にしたときは身の毛の立つ思がした如何にも共通りである。其大規模と云ひ本視察中殊に感動を與へられ

た事を殊筆してをく。

◈大連も旅順もたいしたもの

大きな大連の港から吐出す莫大な豆粕は肥料より外に使ひ道のないと思うのは智恵が足らぬ、食料品としても効力の多いことを知らねばならぬ。旅順には露國が金と力を入れた事は大したもので、此堅牢廣大な要塞を打砕いた我軍隊の血戰の跡は聞くにまさる感慨無量であつた。因に此處は常に砂塵のたつこと甚しく物騒千萬な土地である。

◈日本の鐵道と支那の鐵道

滿洲で支那經營の鐵道を見た、線路も粗末で汽關車、電車、貨車何れも古く破れたものも多い、日本經營に比して見るに忍びられぬ感があつた。旅行中何を見ても聞いても我等日本人は上に世界無比の御皇室を頂きたる幸福は云ふに語なく誠に難有きものであることを鮮滿の土地を踏んで一層感じを深くしたことを殊に述べてをく。

この外にも澤山書くこともあるが、餘り長くなると肝心な要点が分らなくなる恐れがあるから是れで筆を擱く。

終りに鮮滿案内所は實に有益な事業でありながら知らぬ人が多い事を遺憾とす、何卒國家社會の爲め將來益々發展を祈る。

殊に今回視察團の爲めに痒い所に手のとゞく懇切なる御取扱に對しては滿腔の感謝を表す、團員一同の同感は申迄もなし。

◈　◈　◈

團体旅行より歸りて

八幡市　樂水

鮮滿視察團といへば所謂資本家、事業家、さては議員、委員などといへる嚴しき方々の團体旅行でもあるかのやうに思はれますが、過般下關鮮滿案内所の主催にて組織せられたる團体員は、各方面の有志の方々の集りで、其の內男子約百七十人、婦人約三十人、其の年齡は十六七歲の少女より六七十歲の翁媼をも交へ、其の服裝はと見れば婦人は勿論男子の方々にも和服下駄穿きが少くなかつたやうで、丁度一大家族團体の京見物にでも出懸けたやうでありました。而かもそれで虎伏す鷄林八道から馬賊橫行するてふ滿洲を、何の苦もなく、一同和氣靄々談笑の間に大体の視察を遂げ得たといふことは、誠に有り難き聖代太平の御蔭であることは申すまでもありませんが、彼の鮮滿の山野到る所に建てられてある忠魂碑―幾千幾萬の我國同胞戰死者を祭れる―を仰ぎ見ては、心から感謝の涙に咽びました。そして我等此度旅行をして何等か意義あるものとしなければ戰死者諸君に對して濟まぬような氣がしたのであります。多數團体員の方々の內には定めて視察の結果、或は言葉に、或は農工業に就きて、何事かを研究せられ計畫せらるゝ方もありませうが、私は將來日本人が彼の地方に發展する基礎觀念を作る爲めとして、中等學校程度の學生の多數をして是非とも一度は彼の地方に修學旅行をさせたいものと思ひました。特に旅順戰跡の如き其の現地に就きての說明を聞かしむることは、思想善導上にも稗益する所少なくあるまいと思ひました。又團体員の內に幾人かの少女の方々が居られましたが、私は其の團体旅行に參加したる本人は勿論、參加せしめたる父兄母姉の心懸けと勇氣に感心いたしました―嫁入先きが鮮滿地方と聞きて一も二もなく斷る父母もあるのに―願くば嫁入仕度の着物の一二枚を節約しても、是非學生時代に彼の地方に旅行せしめ他日鮮滿地方から縁談のありたるときは喜び勇んで之に應ずる丈の覺悟がほしきものであります、茲に此度の

團体旅行に就き滿鐵會社其の他關係部員が、特別の待遇と便宜を與へられたることを深謝すると同時に將來男女學生の彼の地方の修學旅行に就きて、從來よりも一層の便宜を與へられんことを希望いたします。

滿鮮視察途上即吟

唐高麗の開けるさまを見るにつけ君が稜威をあふぐけふかな
野に山に建てる石碑(いしぶみ)仰ぎ見て涙にむせぶ戰の跡
戰迹徂來粟滿肌山川風物感無涯
四頭二十餘年夢見盡忠魂記念碑

感想

下關市　淺海こと

『一生の中一度滿鮮の旅をして見たい』それは私の豫ねての願ひで御座いました。然し、その機會を得るに甚だ困難で御座いました。ところが、今度貴所の御催しでその機會を與へて下さいまして、心ゆくばかりに、滿鮮の旅を味せて頂いた事は、非常に心嬉れしく存じてゐます。今度の旅行で私に最も强い印象を殘してゐるのは、お世話下すつた方々の懇切そうして、行き屆いた御斡旋に依つて愉快な旅をつゞけた事であります。私も只今まで、二三の團体旅行を致しましたが、今度の樣に氣持ちの好い旅を致した事は御座いせんでした、恰度一家擧つて、和氣靄々の裡に、のんびりとした旅行を致した樣に思はれます、私は、この點について、最も感激してゐます。巡遊した所は、何處も彼處も興味を惹かなかつた所は無く、異國特有の香りは私の見聞を非常に廣めてくれました。殊に平壤牡丹臺に於ける眺望、洋々として流れる大同江、廣濶とした大陸的の平野、この雄宕なる景色は、到底、筆舌には盡されません。それから私の心を最も感傷的にならしめたのは、旅順の戰跡で御座います、御國の爲に、尊い犧牲になられた幾多の生靈が地下に瞑目してゐる所、其處に佇んでは淚なしでは居られませんでした。

以上、お粗末ですが感想の一端で御座います。終りに團体に參加された皆々樣の御健康を切にお祈り致します。(完)

隨筆

八幡市　富田政一

京城の旅舘で新知の人との間に話の花が咲いた。
『あなたはまだ十代ですね。』
『そんなに若く見えますか』と彼は內心びつくりして反問した。
『さうだね。まあ十八位かな。坊ちやんらしい顏だ』と忌憚ないあけすけの話。
彼はあまり子供扱ひにされるのに稍〻不滿だつたが遠慮の無い明るい、さつぱりした相手の氣象が氣に入つた。
それにしても自分はそんなに子供らしく見ゐるのかなあと彼は不思議に思つた。
人生の行路を長く歩んだ多くの經驗を積んだ人の眼にさう〳〵間違ひがあらうとも思はれない。

彼の年齢は實は二十三才だつた。彼の事業に對する强い責任感が彼を夢見るやうな十代の少年時代から一足飛びに三十代に追ひやつてしまつた。彼の口は常にしまり顏付は重々しく緊張してゐた。それだから彼と交際する程の人は皆彼を實際よりも多く見た。

或る快活な彼の友人は『君はもう三十代の人の考へさうな事を考へてゐる』と言つて笑つた、この言をきいた彼は內心非常に淋しかつた、空想的な夢見るやうな少年時代から直に現實的な三十代の人になつて人生の最も樂しかるべき情熱の奔騰する青春時代はないのだらうか。ローマンチツクな感じは味へないだらうか。と彼はさびしく思つた。

彼は時に寂寥を感じた、彼は憂鬱だつた。それがどうだ下關から京城に來る僅か二日間全然變つたのだ、彼の顏面を引緊めてゐた筋肉の一筋〳〵は春のやはらかな光に堅い花の蕾がほころびるやうにゆるんで來たのだ。彼の顏は少年の様にあどけなかつた。

彼はふと鏡を見て『成程さうだなあ』と思つた。彼はしみ〴〵この時旅行の眞髓に觸れた様な氣がした、親を放れ兄弟を放れ、仕事を放れ、あらゆる係累わづらひから解放されて大自然の中に躍り込んで行くこれが旅だ。

旅は解放だ。自由を求める人間性の奔騰だ。故に愉快なのだ、と思つた。

彼は旅に出てから不思議やローマンチストになつた。氣のつまるやうな世間づきあひのうちに隠れてしまつてゐたローマンチツクな感じが胸の底から芽をふき出した。日々に變る眼前の風物を送り迎へて、彼は全く幸福だつた。

◇食道園にて

食道園の待合室に居ること、約三十分周圍遽にさゞめくかと思ふ內にふと振り返つて見て、あつと驚いた。これは美しい。これは素晴しい。これが妓生だなと直ぐと覺つた。路上の朝鮮婦人のみを見馴れた眼には意外に光つて美しく見ゐた。

白羽二重の裾に薄紅の上衣滴る如き黑髪を朝鮮髷にして赤き手がらに翡翠と白金の釵。すべて清楚の二字につきる美しさ。

食事半にして妓生鼓を打つて舞ふ、
四鼓の舞、僧衣の舞、劍舞等々、
內地にて味ふ能はざる獨特の情趣あり。
舞了つて、名物の『筏流し』を歌ふ、哀音切に胸臆に迫る。

追　記

朝鮮料理は最初非常な食慾をそゝつたが正直な所全く口に合はなかつた。淡白好みの自分の趣向が朝鮮料理に好意を持たせなかつたのだらう。

（昭和四年十月十日夕）

鮮滿を見て

小倉市　久光鶴子

總て物事の大小にかゝはらず自分の望み通りに出來る思ひのまゝになると云ふ事は殆んど難しい世の中に偶然の機會が惠まれてはかないものとあきらめて居た希望を容易に遂げ得た幸運に喜ぶ人間も一人や二人あるのが面白い。赤い夕陽の滿洲、溫突燃く朝鮮、地理に歴史に教室で先生の口を通じてわづかな知識を與へられたに過ぎない此等の土地に淡い憧れはあつたにせよ見物にゆく等と大それた野心は私自身少しも持つては居なかつた。突然父から連れてゆかうかとの言

葉をられ夢ではないかと思つた全く意外であつただけに喜びも亦格別だつた。無力ながらも出來るだけ多く朝鮮を知らう滿洲から得なければならない、感謝の念はこうした覺悟に變つて溢れるばかりの期待に胸を躍らせながら鮮滿地かけ方への大旅行のスタートを切つたのは二十四日の午後九時半、星も稀な暗い靜かな晩であつた。

往時は彼我の嚴然たる國境であつた玄海灘も鳥通はぬとまで歌はれた荒海も私等の眠りを少しも騷す事なく、呆氣ない程の凪、文明の御代に生れた有難さに、樂々と身を横ゑたまゝ早海峽を一跨何のさわりもなくさわやかな朝の釜山に上陸する事が出來た、褐色の醜い地肌をむき出しの禿山、棧橋に集ふ白衣の鮮人の群、朝鮮に來たてふ感が痛切に起る、廣くて美しい滿鐵の二等車で十日間にわたる長い汽車旅は いよ〱此所から始まる、乘心地はすばらしい、發着のあざやかさも亦氣持がよかつた、汽車の窓越に展開されてゆく朝鮮の天地は好奇心も交つて總てが興味深くながめられた、遙かに望む山々のなだらかな起伏、涯しなくひろがつて居る青々とした稲田意外によく開拓されてゐる事に全く驚かされた、雜然と並ぶ朝鮮民家、のつぺりと葺かれた草屋根は今にも地にとゞくかと見ゑ唐瓜がころがり眞赤な胡椒が澤山干してあつた、綠に包まれた畔道に白衣の裾をひるがへしつゝ長い煙管をすばり〱とくゆらして悠長な歩みを運ぶ鮮人の姿、田畑に立つて働く事があるのかその氣色さへも見ゑぬ農夫達は地面に腰を下し悠々閑と汽車の通過を眺めて居た、彼等の怠惰が國を滅した一遠因をなしたのではないかと無心に此等を見過す事は出來なかつた。

京城、平壤で名高い名所舊蹟を隅なく尋ねる、京城博覽會は流石總督府の主催だけにその內容外觀共に充實したものであつた、內鮮融和の一助として朝鮮紹介に力を盡してあるのでその特色は遺憾なく發揮されて居る、統計に模型に製品に朝鮮の內情を種々の姿で示され豫想外の發展には驚かずに居られなかつた、こゝまで開發した當時者の苦心と努力は如何ばかりであつたらう、總督府の立派さは廣く世に知られて居る所堂々とした外、外觀壯麗を極めた內部特に大理石の大廣間には只感嘆の聲を發するのみだつた、朝鮮神宮より見下した京城市街、はるかにかすむ漢江の岸までのびたその

繁榮ぶりは朝鮮の價値を立派に裏書してゐるものではなからうか。小暗いまでに鬱蒼と茂つた昌慶苑の秘苑を一巡して數々の樓閣の柱に殘る彩色に壁間の精巧な彫刻に昔の榮華の俤をしのびながら荒れた軒端のかたむきに蓮池の姿に淋しい凋落の影の漂つてゐる事を感じ、暗い氣持になつた、有名な仁川のドツクを見渡し、月尾島の潮湯に旅の疲れを流し、食道園の朝鮮料理美しい妓生の雅な舞の手振りに氣分を和げられた事も旅の一興だつた、平壤の牡丹乙臺密臺の頂上に立つて四方の雄大な景色をながめ漫々と碧水をたゝゑた大同江を屋形船に乘つて下つた爽快さは今だにはつきりと頭に殘る、威勢よい砧の音を響かせながら洗濯に餘念もない女の姿を所々に配した、兩岸の景色は朝鮮風俗の一端を如實に描き、一時間の大同江下りで我等は朝鮮情緒に充分ひたる事が出來た。

日本語で教育されてゐる鮮人の小學生の多くを見、力强い同胞の芽ぐみつゝあるのを喜び土に汚れた下層民の子供のいたましさを悲しむ、被征服者のみじめさを涙ぐましいまでに感じた、惠まれぬ同胞も多い我々はもつと進んで暖い手をのばすべきではなからうか、深い理解と眞の親和、內地の人總てにこれを望む心が切に起つた、馬賊活躍の舞臺と聞く滿蒙の大天地にいよ〱乘り出して先づ島國の祖國の窮屈さを痛感する、見渡す限り一面の高粱畑、一抹の荒凉さを漂す廣漠たる大平原に秋色は深い。

大連、旅順、奉天と經廻つてそれ〱異つた持味を見せて滿洲の眞價を物語る此等の都會に我等は一体何を感じたであらう。

アカシヤの町大連、綠樹の美と、道路の美に惠まれたその市街は殖民都市として進取的淸新さに溌溂としてゐる、大廣場を中心として蛛蜘網狀に街路を放射した特相は近代的文化都市の匂を高め高壯な煉瓦造りの建築の立並ぶ市街は異國情緒を感じさせるに充分であつた。

滿蒙の大玄關その消長はこの地に於ける我が經濟的活動のバロメーターであるといふ大連港の壯觀はとても筆や言葉に

は盡せない、世界一と誇る宏大な船客待合所を始め大規模な陸上の諸設備に先づ膽をうばはれ、眼を轉じて海面を眺むれば長く突出した三條の岸壁には巨船が幾つも横着けになつて居る、大連港の呑吐する貨物の膨大な數は耳にはいるのみで淺薄な私の頭では到底はつきりと理解する事は出來なかつた。生氣の溢れためまぐるしいまでの活動狀態を眺めて只呆然とし、東洋一の偉大さをじく〳〵讃嘆した。それ〴〵特異な大連の地方色を表す油房、碧山莊華工收容所を見物し苦力の作業振りを、その生活狀態を詳に觀察して好奇の眼をみはり強い興味を覺ゐた、繪の樣な美しい星ヶ浦でゆるやかな弧を描く海邊に波に洗はれて丸く白く光つた小石を漁つて遊んだ事も大連でのなつかしい思ひ出の一つである、西崗子の露天市場ジャンク泊る露西亞波止場で特異な支那情趣に觸れ、奥町浪速通りの夜の漫歩に、支那情緒も充分味つた、支那料理のおいしさも亦印象深い思ひ出の一つか、滿鐵の勢力の下に增々發展しつゝある大連、その將來に我々は多大の期待を抱く。

永遠の靈場であるべき旅順巡りの一日は生涯忘れる事の出來ない深い〳〵感銘を私の心に刻みつけた、朗らかな秋光の下に平和な姿を橫ふ市街を眼前にして、かつての日、腥風吹き荒び一大修羅場を現出した當時を回想すれば實に感慨無量であつた、忠勇な赤子の肉彈を以て占領した東鷄冠山北堡壘、二〇三高地の山頂に立つて、壯烈悲慘を極めた實況を說明されて感激の淚を流さぬ者があらうか、泣かずして旅順の山を踏み難しこぼるゝ砂もむせぶ聲する眞に我が同胞の碧血死屍に蔽はれた山々一雜草、一石塊すらも土足にかけるをはゞかられた、彼我戰役者の英靈に心から冥福を祈つて滿洲旅行の意義の半を達した心地がした。

撫順の露天掘は大規模な採掘狀況豐富な石炭量を見て大連埠頭と共に日本人の成す大事業の世界に誇るべき一つであると感じた。

昔からの都であつた奉天はさすがにどつしりとした莊重さが感じられる城内の支那町を通つてその繁榮ぶりは我々日本旅行者にとつてある壓迫を感じるのをどうする事も出來なかつた。吉順絲房の偉觀、同善堂の權威ある社會事業、北陵の壯麗さ、いづれも忘れ難い奉天の印象である。

名高い鴨綠江の開閉式の大鐵橋を見て多年の望を達したのを最後に無事に有益な愉快な大旅行を終へる事が出來た。

多大の犧牲を拂つて獲得したこの地における權利を遂行すべく奮闘努力してゐる邦人の活動は實に淚ぐましい、無限の大寶庫を藏す滿蒙の天地はより偉大なものに開發されるべく有爲な靑年の手を求めてゐるのではあるまいか、幾多の尊い暗示、これ等は私の長い一生にきつと或る形を以て表はれて來るにちがいない。

頭に浮ぶまゝを拙い筆に綴つて！

感想

下關市　伊達みつ

私は昭和四年九月廿四日下關鮮滿案内所の視察團に參りまして御親切に見物をさせていたゞきました、私がもし男で御座いますれば、資源の多い滿蒙の處で大いにはたらいて見たいと思ひました、內地の人はどし〳〵滿蒙に行かれる事をおすゝめ致します。

鮮滿所々

東京市　栗林貞一

旅行も可成り高速度だつた。印象記も勢ひ高速度たらざるを得ない。

○沿線風物

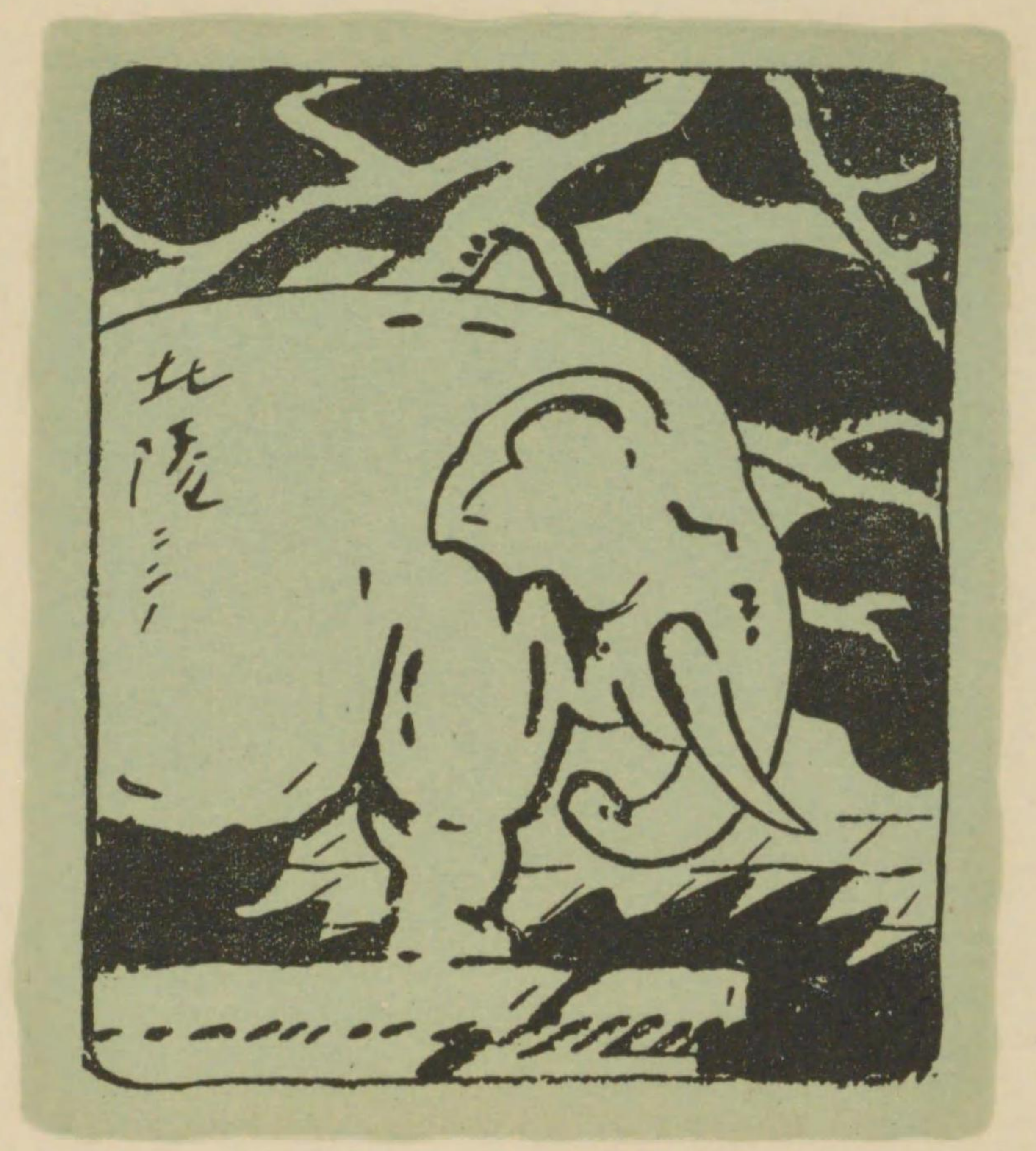
汽車が釜山を出て、龜浦、勿禁、三浪津と北上するに從つて、私達は『いよ〳〵朝鮮に來た』といふ感を深くした。洋々たる洛東江の流れ、堆肥の上に簇生したきのこやうな貧弱極まる朝鮮農民の家屋、その家屋に不似合な清楚な姿をして悠々働いてゐる朝鮮人、禿山、ポプラの並木等々。何れも半島特有の風物たらざるはない。私達は、車窓に流れ來り流れ去るこれらの景觀に好奇の眼をかがやかしながら、時の移るのを忘れてゐた。

藁屋根に『カラチ』ぬつくり唸らせて
へちまならして長い煙管ふかしてる
ソバの花綿の花分けて新羅の野を走る
川白うなりポプラ並木の秋かぜ

○秋風嶺

文祿の役に、黑田。小早川などの猛將が奮戰したといふ秋風嶺は、南北の分水嶺となつてゐる高地で、今はその名の小驛が設けられてゐる。貧しい朝鮮家屋が七八戶、軒にコスモスが咲き亂れて、子供が莕りに自轉車の稽古をしてゐた。

旅窓の古蹟に秋かぜ淋しや



紀行篇

○京　　城

京城では齊藤總督兒玉政務總監以下多くの人に會つた外、多くの事物を見聞した。が、最も强く私の心に殘つてゐるのは、昌慶秘苑を案內してくれたあの老鮮人である。かつては花の如く榮ゐた君王の庭園も、亭樓も、今はたゞ面影を止めるのみとなつてゐる。その苑庭にたど〳〵しい日本言葉で語り說く老鮮人の姿を、私は哀愁なしに見る事が出來なかつた。

○仁　　川

仁川月尾島のよかつた事は云ふまでもない。然し流石大規模の潮湯ホテルも、二百の人が一時に『飯だ、飯だ』と騷ぎ立てたには、少なからず面喰つたらしい。溫順しく待つてゐてはなか〳〵食料品が配給されない。そこで已がじゝ獲得に出かける。あの大廣間の中で、四十五十面の親爺共が、お櫃を抱へたり、土瓶を提げたりして走り廻つた有樣は、此旅行中唯一の珍な光景だつたらう。

○妓　　生

平壤の妓生學校も珍らしいものの一つであつた。こゝで私達は妓生の未成品＝も可怪しいが＝を見、京城の食道園や演藝館で完成品を見たのであるが、この結果かつての私の妓生觀は、根本から覆へつて了つた。私は妓生の將來に多くの期待を持つやうになつた。その指導訓育宜しきを得たなれば、こゝ五年、十年の後には、彼女等の間から素晴らしい女優、音樂家などの藝術家を出すであらう事を私は固く信じてゐる。

○平　　壤

船を流せば秋がすむ樓臺
彈痕を宿して此松の緣こまやか

大同江に添ふた丘陵の一帶乙密臺、萬壽山、牡丹臺。そこに點在する浮碧樓、七星門、玄武門、箕子廟などは、觀るに佳く、聞くに多くの語草をもつてゐる。

そのあたりを見物し了つた一行が、短舟十餘隻に分乘、秋風に送られながら、右手は乱岩屹立する奇勝、左手は見渡す限り打開けたる沃野を望みながら、悠々江を流しつゝ晝餐を喫した、あの愉快な一時は、永く私達の樂しい想出となる事だらう。

○大連

大連の三日間は、此旅行のクライマックスであつた。少くとも私にはさうだつた。

この明るい海岸街は大廣場を中心として街路が放射狀に通じ、それが悉くアスハルトによつて鋪裝され、その兩側に手入れの屆いたアカシヤの並樹が、何處までも續いてゐる。『街衢整然』とは全くこれを云ふのだらう。市街の外形美―これが先づエトランゼエに何よりも快い印象を與へる。

更に私を喜ばせたのは、街上に彷徨するマチョウ（辻馬車）である。『マチョウ！』と手をあげて高く呼べば、支那人の馭者は、鞭を打ち鳴らし〳〵、シャン〳〵と鈴音輕く駈寄つて來る、ヒラリと乘る。やがて駈出す馬の蹄鐵の鋪道にふれる輕快なひゞきは眠りを誘ふばかり。並樹の葉影を縫ふて街から街へ、何時までも駈けらしてゐたい誘惑を感じた事であつた。

だが西崗子の泥棒市場、小崗子の支那遊廓、阿片窟、ダルニイ市時代の面影を殘してゐるロシヤ街、堅城の如く聳え立つ滿鐵病院　星ヶ浦、老虎灘の風光なども、私をして大連好きたらしめた主要な役目を勤めてゐる。

○支那人

大連で私を強く動かしたものは、滿洲に於ける支那人勞働者卽ち苦力の存在である。彼等はよく雜草に譬へられる。

最少限度の養分を攝つて、最大限度の生活力を發揮する。踏まれ躪られながらも、その壓力が少しでも緩むと、隙に乘じて根強くはびこつて行く。彼等の生活程度は低い。然し彼等の生命は、大地の中にしつかと根を据ゑてゐる。小利巧で、兎もすれば地に足のつかない日本人と、鈍重で常に損な役廻りばかりをやつてゐる、彼等支那人と何れが最後の滿洲の支配權を握る事になるであらうか？…そんな事を獨り考へながら、私は福昌華工會社の苦力合宿所の中を歩いてゐたのであつた。

○旅順

旅順の戰蹟見物では、初めの中は案内子の訓話的高壓的な言辭や態度が、私の反感をそゝつて　純直な回顧の情を、妨げられ勝ちだつた。だがこれもだん〳〵に慣れ、遂には案内子の巧辯に誘はれて、あやふく淚が出さうになつた事もあつた。眼を閉ぢると、晴れたる秋空の下、背を並べた山々の彼方、海紺青に光る旅順の大景觀が、今尙あり〳〵と眼底に浮び出る。

草の實熟れたる崩れ堡壘や
あかしやの蔭支那人に物を賣らせ

○奉天

吉順絲房の屋上に立つて、奉天舊城内を眺めた私達は、同じ滿洲の都市、同じ滿鐵の附屬地とは云ひながら、大連と奉天とがその外觀においても、構成要素においても全然異つてゐるのを知つた。城内の一角にある宮殿は　淸の太祖皇帝以來の塵埃を被つて、殼の如く寂かに蹲踞つてゐる。然し又一方城壁の彼方張作霖が造つたといふ兵工廠の巨大な建物の集團からは、黑煙天に冲して日々絶間なく最新の兵器が製作されてゐるのだ。前者は靜々寂寞、後者は生々躍動。かく相異れる雜多の分子を包擁融合して、此地方における物資の大集散地たる奉天は人口百萬の大都市に步一步あゆみ

を進めてゐるのである。

○北　陵

文皇帝の帝陵なる北陵の結構なることは云ふまでもない。埃の中を潜つて行つた丈の甲斐はあつた。然し實際を云ふと、あの寢陵の周圍の壁上を歩いた時ばかりは、心なか〳〵にたのしまなかつた。國亡びて帝陵荒る。異國人のわれ〳〵と雖も、陵墓の奥深くまで恣に足踏入れ如何にして平然たるを得るものぞ。

秋草刈れり、陵廓のかげななめ

黄瓦松風に光れるを見つ

石像もの云はず國荒れし

記す事は盡きない。旅行の三分の一時間を占めたであらう汽車中の生活、食堂車通ひもなつかしいものゝ一つだ。停車時間を利用してのあはただしい市街見物、旨くて廉い林檎、栗、梨。煙草好きの私達を喜ばしたアブドラ、キリアジ、ウエストミンスターのかほり、何れも忘れ得ぬ想出となつてゐる。

最後に此長い旅行に、潤ひと柔か味を添へ全行程を極めて愉快なものにして下さつた婦人の會員達に感謝と敬意を表して、此筆を措く

—四、一〇、二六—

◇　◇　◇

アカシヤの旅

山口縣防府町　河野山査子

私達は下關鮮滿案内所主催の旅行團中へ双手を擧げて第一番に參加したのである幸に私が期待より以上の歡待を受け豫想以上の見學をなし得た事を謹んで主催者へ御禮を申しあげて置かればならぬ

臨時船景福丸の甲板から見る門司、馬關の數多い燈火は鮮かに美しく、空には二十日過ぎの月が低く落ちて居る。私達の團体に送別の言葉を述べられる大阪朝日新聞社員のメガホンや、婦人團員諸姉のため棧橋からなげられるテープなど大した旅では無い乍ら心は感傷的になる。出船合圖の銅鑼が鳴る頃は船と陸で君ヶ代の合唱が始まり萬歳の聲に靜々と船は動き出した、波に尾を曳く五彩のテープ、互に打振るハンカチーフ、朝日新聞社の提灯など消ゆる迄を私は甲板に立つて居る、舷側の波が夜の眼にも白く一脈の痕を殘して行き他の船の燈が水に落ちて搖れる有様などに旅情は脉々として胸を衝いて來る、支那や朝鮮の景色や風俗を想像し乍ら夜風冷ゆる甲板から船室へ戻る、二等船室は團員の縣別に區劃され三等船室は私達の娯樂室にと提供され碁盤などが配置されてある、舵機の波を切る音やエンヂンの回轉する音は船に慣れない私に容易に熟睡の機會を與へない、時折やゝ強い掀翻を感じたそれは玄海沖であつただらうと推量した。

假臥の夢切れ〳〵や夜半の秋

朝鮮が見へると云ふ人の聲に起きて甲板に出れば、曉の風が冷たく朝凪の海上遥かに山影が見へる、釜山近くでは鮮女が乘つた漁舟が私達の船の横波を受けて強く掀翻して居る。

朝鮮の山見て漕ぐや秋の海

朝寒の釣舟に居る女かな

釜山棧橋には朝鮮式の色彩で塗られた廣告塔や大將軍の柱掛が朝鮮博覧會のために立てられてある、其所こゝに白い衣を着た人達が踞んで居る。

汽車は洛東江の大きな流れにそうてひた走りに走る、折々畑に居る島人の白衣の姿も働きが鈍い、薪や野菜を脊負つた男や大甕を頭上にのせた女などがポプラの道を行くのが見へる、榮螺殼を伏せた樣な藁屋根に溫突がつき立つて見へる、大きな川を除いては外は皆洲ばかりの川で稻や黍を積んだ牛車を曳ひて鮮人が砂の上に轍跡を深く殘して行く、僅かの流れがあれば女等が洗濯物を石の上に乘せて砧打ちに餘念ない樣子である. 白い翅を持つた鳥が飛んで居る畑の中には墓地がある墓地と云へど只土を圓く盛つたのみで表面には草が青くのびて居る。

ところ〴〵土饅頭や蕎麥の花

京城に鎭座ます朝鮮神宮の數百の石段には白衣の參詣人が連續として居る、之は明治大帝の御高德を慕い奉る異國の民の集團である。

長煙管捨てゝ秋風に畏みぬ

昌慶苑

喜雨亭の扁額古りぬ冬隣

平壤附近は田畑益々廣ろやかになり、黃州の林檎園には眞紅の實が枝もたはゝに實つて居る。

廣々と林檎畑や秋の風

乙密臺の四虛亭に立つて牡丹臺と共に遠き文祿の役に明軍の擬兵を看破した小西行長や日清の役に玄武門を破つた勇壯なる原田重吉氏の功蹟を賞へながら柱に殘る數多の彈痕に戰爭の烈しかりし事を推察し當時を思ひ忍ぶのである。

戰場を語れアカシアの露の下

大同江畔白楊の下に繫いである屋形舟十餘隻に分乘した團員は、船頭の朝鮮人が打ふる水竿一竿に命を托し靜かに岸をはなれて行き、松や雜木の綠に交る對岸の紅葉や牡丹臺の奇岩に立てる古風な數個の樓門を眺め乍ら配給の辨當に冷酒を酌みつゝ川波に搖れて下る樣さながら一幅の畫中にある思ひであつた。

遊船の並ぶや大同江の秋

妓生

四皷舞に秋の雛が並びけり

滿洲の朝霧か又は沙塵か濁つた中から太陽は出る、內地の樣な澄んだ空氣の中で或は波靜かな內海から又は高い山の上からの日の出とは比較は出來ぬ。

朝霧や遼陽塔の見ゆる窓

汽車は機關車につけた鐘をカラン〳〵と大きく叩き乍ら大連驛へ着いた。

ロシヤ馬車や長い柄の人力車を握つてぞろ〳〵と支那人が客の前へ四方から寄つて來る大連は支那の大連であると直感する程附近は皆支那人である、タールマカダム道路は砂塵をおさへて居て、街路樹のアカシアは綠も濃い、埠頭の屋上から見た大連港の餘り其規模の大きさに驚く、豆粕や大豆や油や石炭を積む大倉庫の八十餘棟や、廣い野積場所等內地では想像も出來ない、ある支那の油房では薄暗い無氣味な塲氣の中で丸裸の支那苦力が働いて居る. 大豆を其籠に入れて搾器へ運んで居る、附近は大豆のむせた臭氣と運轉する機械の音とで長居は出來ない。

華工收容所の碧山莊では所長から華工の無學の事、自分の生年月日を知らぬもの侚甚だしいのは自分の名義まで解らないのが大部分で、力は馬鹿力と云ふ喩の通り七八十貫匁を脊負ふと聞く。

アカシアの碧山莊や秋の蠅

食へば足る男なりけり草相撲

秋草に寢り轉げる苦力達

滿鐵本社の招待で大連滯在の一夜監部通りの泰華樓で支那料理の馳走を受けた、私達は休憩室で煙草の煙りを吹き乍ら西瓜の種を喰ふて一行の到着を待合して居る、料理は一テーブル十名で圓く食卓に向ひ合ふ、朝鮮料理は京城で鐵道局の招待を受けたが、其折りは長テーブルなりし爲めに好みの料理に立ち歩かねばならなかつたが、此處では落ついて食事が出來るのが幸である、數十の料理の半ばで、支那の藝者が來た、一巡各テーブルに酌をしたあとで師匠の胡弓と笛とにつれて謠ふ歌曲は、高く低く餘音を曳いて感傷的なリズムでつた、醉顔のほてりと油を熱湯で絞つた手拭で拭きとつて、カーテンを越して窓の夜風を深く靜かに吸つた。

支那料理數を盡して夜の長き

ロシヤ馬車に乘つて旅順の街路の黄ろい沙塵のあがる中を山合ひの谷にそふて、迂回し乍ら長い〱間を東鷄冠山北堡壘へ上る、松や栗などが茂つて居る破れた堡壘や崩れた砲臺は日露戰役の記念である。

幾度か血汐に染みぬ秋の草

二〇三高地へと長い急坂を喘ぎ乍ら登つた、旅順の市街は目の下に見わて風光絕佳、かつて閉塞隊の話に殘る廣瀨中佐の戰死した旅順灣口には靜かに平和な汐か流れて居る。

白玉山

秋天へ表忠塔のつん立てり

博物館

秋の日やミイラ並べる硝子箱

撫順

秋晴や何處まで續く露天堀

奉天に着いたのは夕日で滿洲の曠野がうすぐろく汚れて居る頃であつた、なんと寂しい町だろう煉瓦造の家に住んで居る日本商店の灯は闇い、今迄見て來た大連と比較して揮はないこと夥しい、又店舖の商品も仕入が薄い樣である、電車通りの十字街にはさきほど馬賊が近い町に出現したとかで、其爲め武裝した警官がピストルを固く握りしめて通行の支那人を誰何して居る、城内の支那街を通る支那人の店舖の盛んなことは到底日本人とは比べられない、此所のある小學校の校舍前を私の馬車は通る、塀によじ上り垣にのぞく兒童は口々に馬鹿野郞などと云ひながら馬車に唾をはきかける、支那人の卵ながら日本人に對する反抗的氣分を發揮して居る、最近では日本商人は何れも城外に追ひだされてゐるとの事である、城内に於ける日本人の肩身の狹いことに反し、支那人のスタイルは馬鹿に大きく大國民的の尊大振りである、時々支那人と日本人の衝突が起るとのことである、今迄支那人の前で威張つた本國人としては無理からぬと思ふ、北陵に來れば大きな樹木が茂つて居て城内の雜踏もよそに閑靜である、滿洲に樹木は育たないと思つて居た心は全く裏切られて内地同樣巨木もある、廣々とした荒野は自然のふところに抱かれ乍ら耕作に來る人等を待つて居る、そこには米も出來野菜や水や木も石炭も何一つ不足は無い、春は花も咲き、鳥も啼くと聞けば、滿洲開拓は我國家のため吾等が子孫のため考慮せねばなるまい、歸りには安東で鴨綠江の鐵橋の開閉を馬車から下りて見た、鎭江山公園にはダリヤが美しく咲いて居て滿洲の單調の景色に飽けた眼を喜ばしめる、安東劇場では名物筏節踊を日本藝者達が舞ふて見せ滿洲最後の旅情をなぐさめ私達の印象を深からしめたのである。

鴨綠江

秋風をあやつれる帆の動きかな
秋の河隔てゝ支那の税關署
滿洲の風の中なる野菊かな

鮮滿一瞥

佐賀市　柴田圭一

鮮滿の地は内地と違ひ見る物聞く物皆珍らしき物のみであつた、先づ足一歩朝鮮に上陸するとヨク書にある様な白衣有髯の鮮人男は荷物も背なに女は頭上にのせて悠然と逍遙するを見受く、夫より車窓に半島の秋色を賞てつゝ京城に向ふ。其名に床しき秋風嶺附近一面にコスモス咲き乱れ其美云わん方なし、然れど山低く樹木少く一般的に土地瘦せ農作物の發育良からず、民家の甚だ矮小なる竹の柱に茅の屋根寢ながら月星眺むとは此んな家のことだいと誰やらが云ふ。往昔文化を誇りし朝鮮も國亡びて山家寒しの感あり、總じて鮮民は服裝の關係からか動作不活潑にして能率擧がらざるが如し、京城は流石に李朝の皇居人口三十萬ありと、驛前に南大門のイルミネーション美しく市街頗る賑ひ諸建物宏大殊に總督府廳舍の美麗宏壯なる建築は東洋一と聞く、閑雅幽邃なる昌慶苑、山紫水明なる秘園等見る物多く、博覽會の規模の大なる演藝舘のパノラマ式の朝鮮十景は、電氣作用にて眼醒むるばかり、目先新らしき内地藝者の手踊や妓生の舞などなか〳〵精練され、仁川にては東洋一のドツク月尾島にて潮湯あがりのビールの味は今に忘れられない、唄に

潮湯あがりの欄干に

心も輕き夏衣
磯吹く風になぶられて
ちよつとからんだ袖と袖
あれ月が出た島の名も
月尾島とは、、、、

情緒たつぷり忙しいなかに充分旅情を慰むるに足る。平壤は牡丹臺日清戰爭の玄武門興つきざりし大同江の舟下り、さては妓生學校妓生の舞や長皷を叩いての鴨綠江節など一行の賞賛を博し皆な〳〵喜ぶ事〳〵。

全國的の集團二百名、多くは未知の者なれば初めの内こそ遠慮もすれ、一日二日と汽車の進むにつけ早や十年の舊友となり、お互に冗談始まりユーモアを飛ばし、殊更我四班は元氣潑溂として中にも佐賀の大庭、山崎（演藝部長）、福岡の廣石土方大分の永井君など、盛に奇抜な談話を連發し、笑聲わき眞に和氣靄然たるものがあつた。お隣の婦人班は美人揃いにて鶴原班長の溫順、伊東夫人の淸楚なる、榎本姉妹の無邪氣花田さんの愛嬌ある、分けて一團のスター高田孃の洋裝は、スツキリと似合い萬綠叢中紅一点として一行の眼を樂ましめ、常に淸新の氣をわかし疲勞を快復せしむるものがあつた。

國境は夜中に越へ、汽車は一路滿洲に入る、沿道一圓を望めば茫漠涯しもない、千里の平野は山なし河なし高粱は巳に刈られ、極めて稀に散在する民家の屋根の上には、黃ろい玉蜀黍を乾してある、人口甚だ稀薄なれば內地にありて徒に不景氣を話さんより、又はアメリカやブラジル等にやれトラホームだの十二指腸虫だのと排斥されるより、近い滿蒙に來たりて合理的に大農を營んでは如何なものであろふ。

大連では市區の整然建築物の宏大が先づ眼につく、歩道に殖た綠の街路樹は一種の快感を與ゆ、上下水道も完備さ

れ、誠に近代的衛生大都市と云ふ可く、資源館にて滿蒙の寶庫を一瞥し、年額六億圓を吞吐する埠頭に至れば設備の豪壯なる繋船する岸壁の全長一萬四千尺、更に明年は五千尺を完成し二萬噸の巨船も樂に横付け、此處に働く支那苦力（華工）一日八千人とは驚くではないか、油房にて製油を實見し華工が素裸にて局部を露出して作業するには一寸異様に感ず、市内の殷賑は云ふ迄もなく、各所を見物し自動車を郊外坦々たる道路を經て星が浦迄ドライヴせしは爽快極まりなかりし。

旅順にて東鷄冠山や二〇三高地に、一々現場を指呼しての説明はさながら實戰を見るが如く、何時しか身は砲煙彈雨に包まれ屍山血河を生じ、如何に要塞戰の慘憺たるかを今更ながら感嘆久ふし、死屍累々たる當時を思い邦家を今日の安泰におきし忠烈なる軍人の尊靈に對し奉り一行悉く涙なき者なし。

滿鐵御招待の泰華樓に於ける支那料理は、誠に美味なりし。此處にて支那藝妓の歌を聞く、大連旅館遼東ホテルの親切叮寧なりしは嬉しかつた之は特記して置く、

撫順炭坑の大露天掘、一日の採炭高二百五十噸に及び今後尚百年間の炭層あり、此處に一日八百人分の仕事をなすと云ふ電機シァベルには誰もが驚いた、之を見て産業の經濟化や働力の機械化を痛感さす、石炭の外撫順の石には重油を含有し、此埋藏量約五十億噸大工場巳に完製し、近く事業も開始され年額製油六七萬噸の見込なりと、滿鐵會社が運輸の外に石炭に工業に如何に活動しつゝあるか知る可きである。

此處に使用する華工約四万五千、支拂工賃年八百萬圓に達すると、一日一人僅か五十錢餘、内食費十錢位、玄米パンに極めて粗末なる副食物に甘んじ、何れも体格偉大にして力なか〳〵强く、能く働き思想上にも惡化の模樣なしと、華工收容所を見しに、娯樂に衛生に能く行届いた設備であつた。私は彼等の玄米パンを試食せしに、割合に甘く之なら内地人の常食として決して惡くはないと思ふ。近頃人口食糧問題の喧しい我國は各人各戸に煮炊するを廢して主食品たる米

飯丈けでも玄米パンの如きを一個所に製造配附する樣に改良する必要ありはせないか、保健衛生上から云つても。

奉天も大連に劣らず建築物の宏壯、コンクリート式の從往大道路には、人車馬の往來頗る繁く、日露支の大商店軒を並べ近代的文明都市たり、先づ日露役の忠靈塔に詣でしに、此の前を通る日本の小學生は皆脫帽最敬禮をなす事で之れは私共の最も感に打たれた事であつた。市街地、城内、視る可きもの多く、北陵は靜寂なる別天地にして鬱蒼たる松樹の間には山門樓屋悉く黄瓦にして、壁には種々の大彫刻あり、前には道の兩側に巨大なる石像の馬象など並び古雅の風致あり、宛然藝術の殿堂に入りしが如し。私共の最も印象深かりしは同善堂と云ふ慈善事業所にして乞食や孤兒の收容は申す迄もなく、捨兒を受取る穴や、姙婦の分娩時に來る室を設け此等は皆電氣仕掛にて知り、一々住所姓名も聞かず一切極秘の内に安全に分娩させると云ふ如何にも徹底的の社會事業にして、其處い等のヒチ面倒な手續や、或は孤兒養老を看板にする慈善事業家はチト見習ふてはドーか。

安東縣で製材や彼の有名な鐵橋の開閉を見る、あの水滿々たる鴨綠江が十一月末頃より翌年三月迄氷結して、人車馬の往來するとは一寸想像の外である。劇場にて晝食の間に本場藝者の手踊り筏節を視せて貰ひしは亦一興であつた。最も不快なりしは安東に於ける稅關檢査の嚴かつた事である、然し之は本旅行が最も愉快であつた事によりて帳濟にする。

私たちは通り一邊ではあるが兎も角鮮滿を視たそして如何なる感が起るか、至る處我國民が優越の地位にありて活躍せるを目撃して非常に愉快に耐ゐない、然し之れこそ我先人が血を流し骨を埋め多大の犠牲を拂つて獲得した當然の權利であらねばならぬ。朝鮮の博覽會も盛大である、之れ治鮮二十年努力の 功績を語るものでなくして何んであろふ、大滿鐵は普通一般の營利會社でなく、實に滿洲文化と經濟的開發を第一とし、我民族進出のリーダーたるを以て使命とし大に活動しつゝある事は、今滿洲を映た者の何人も首肯する處である、滿洲に行もよかろふ、然れども無暴な輕擧は

止めよ、能く滿蒙が理解して然る後自己發展の進路を開拓す可きである、今や國難來を稱へらる時我國民一致團結大努力を要する秋であると思ふ、

書けば數限りもないが紙面の都合もあり之にて止める最後に私は本旅行位私一生涯面白かつた事はない、印象も深かつた、收獲も亦大きかつた、滿鐵會社の特別なる御歡待と、主催者の極めて綿密にして、用意周到なる御世話は感激の外はない、汽車中日に數度の注意的時報や、自動車旅舘等至れり盡せりの御心配には、何とも御禮の申上げ樣もない、只衷心より厚く御禮を申上ます、只我四班は勇氣横溢の結果、或は時に御難題を申上げ我まゝ勝手の振舞もありたれど、溫厚なる團長は御叱りもなく、却て能く親切に御示導下されしは私の深く感謝する處であります。尙行程を共にせし二百團員諸君の御健康を祈り再び金剛山觀光等再會の機あらん事を切望致します。

鮮滿視察記

札幌市　塚原東次郎

過般鮮滿案內所、朝鮮總督府及滿鐵共催の鮮滿視察團に應募して九月廿四日下關に着いて見ると、本道よりの應募者は、當市から、星澤、佐川、片桐の三君と小生の四名だけであつたので、何となく淋しい感じがしたが、主催者側では、二百名の團員中、遠來の客として特に優遇して吳れたので愉快な旅行を續けることが出來たのは、誠に感謝に堪へない次第である。偖て、下關から景福丸に乘船したのは九月廿四日の午後であるが此の船は三千六百餘噸、視察團の爲めに臨時就航せしめたもので、他の乘客は一人もなかつた、船員の話に依れば、釜山迄の短航海に五百圓の石炭を煙にするさうである。廿五日午前釜山上陸、釜山神社その他の名所を見物してその日の夕方車中の人となつた。一二等寢臺車のみを連結した臨時列車で、此のやうな点にも團体旅行の特典が認められる譯けで、皆大喜びである。京城の二日間は自由行動とあつて、折柄開催中の朝鮮博覽會見物に出掛けた。會塲は、元宮城であるが、その規模の廣大なる、誠に驚嘆の外はない。經費豫算二百萬圓も不足して更に追加したと云ふ。鮮人は勿論內地人、滿洲人、觀覽に殺倒し、會期半ばにして既に豫想の入塲人員を突破したと云ふ盛況である。北海道別館は、三浦吉四郎氏主任となり全員努力、相當の成績を擧げてゐる樣である。思ひもかけず、旅宿に舊友稻村柴軒氏（同地三等郵便局長）の來訪をうけたのは誠に嬉しかつた。その夜、京城第一と稱する、旗亭南山莊に案內せられたが、こゝは市街を離るゝ十數町、山中の別世界である。こゝで酒盃を交しつゝ妓生の話を聞く。同氏の語るところに依れば斯うである。妓生とは內地の藝者と云ふところであるがその權式に至つては大いに趣きを異にしてゐる。妓生になるには、平壤の妓生養成の學校に這入らねばならぬ、然し朝鮮全道の夥しい入學志願中年々僅か五十名より採用しないと云ふから、妓生となる又難しと云ふべきである。この學校も、一年生、二年生、三年生と學級があつて、こゝで歌舞、音曲はもとより書畫に至る迄一と通りの敎を受ける譯であるが、かくして一人前の妓生となつた者は、客に聘せられ、一種の職業婦人として相當の働らきを示してゐる。而して客の不純な要求に對しては、千金を積むとも應じないと云ふことであるが、その內容に至つては保証の限りでない。總督府、大學其他各官衙、いづれも非常に立派な建築である。元李王殿下の昌慶莊へも案內せられたが古色蒼然たる感じである。鮮滿共に相當の市街は皆立派なアスファルト道路で、建物も鮮人街、支那人街を除く外は、立派な煉瓦造りであるから內地人は、皆驚きの目を以つて見るのである。併し鮮滿では、內地に比し、煉瓦造りが木造に比し割安に建築出來るらしい、廿七日夜京城に別れを告げて仁川、平壤に向ふ、平壤は人も知る豐太閤の朝鮮征伐、日淸戰爭の古戰塲。感慨が深い。平壤から例の鴨綠江節で名高い鴨綠江、安東、及び奉天を經て大連に入る。大連は日露戰爭當時、のダルニ

ーで、現今は人口、八萬餘、支那人其他三萬五千を擁し、東洋第一の良港である。この市で目につく事は、街路樹が實によく、手入れされて居る事であらう。そして見事なアスファルト道路の清爽さは、一度この市を訪れた者に好感を與へずには置ない。町の名は、日露戰爭當時の名將、大山、乃木、東郷等の名を冠してゐる。繁華な街は浪速町、伊勢町大山通り等に指を屈する。それから最も異様に感じたのは、支那人街俗に小盜市場と云つて盜難品の市場があり甚だ賑盛を極めてゐることである。總じて支那人は、誠に勤勉であり、商店にあつても、主人は使用人の中に立混じつて懸命に働き、その生活程度も低いから、取扱ふ商品も日本商人よりは安價に賣る事が出來る爲め、邦人さへも支那商店より購賣すると云ふ有様である。從つて日本の小賣商人は、彼等に對抗出來ないやうに思はれる。殊に滿鐵の配給所では、六十萬圓の資金で、內地の大問屋からの大量仕入れ、安價配給を實行してゐるので、當地の百貨店などでも、あまり振はない様子である。尙又、滿鐵では、六百萬圓を投じて百貨店に對抗する連鎖店二百戶を建設する豫定であると云ふ。此の大連鎖店出現の曉には、市中一般の小賣商人の受くる打擊や蓋し尠なからざるものがあらう。大連の視察も終り旅順についたのは、卅日の朝で、案內者が日露戰爭當時の實況を委しく物語るを聞いて、一同は涙を催すのであつた。殊に、小生にとつて、此地は想ひ出多い所である。それは日清日露の、兩度の戰役に出征し、旅順攻擊の際は、後方部隊にあつて此の難攻不落の堅城を仰ぎつゝ、附近の山野を馳驅したのであつた、日露の役より既に二十五星霜。二〇三高地に登つて見渡せば、昔ながらの山と水。往年の悪戰苦闘を想起して、轉た感慨無量である。次に有名な撫順炭坑を視察した。礦區面積千八百二十萬坪。東西四里南北一里。埋藏炭量拾億噸とある。重油其他の副產物を出す。油母頁石五十億噸を包藏する廣大なる炭坑の設備には、唯驚嘆する外はない。そして、此地の坑夫の賃銀の安い事は北海道のそれとは全く比較にならない、坑內從事の坑夫、即ち滿洲で云ふ華工の平均日給が、支那銀七十錢、有名な露天堀華工で五十錢位。それで滿足して一生懸命に働いてゐる、生活費の安いのにも驚かされる、會社の賄の費用が一日十一二

錢ですむと云ふ。此樣な譯で設備の完全と勞銀の低廉とに依つて、生產費の極度の遞減を結果してゐるから、縱礦で一噸の實費が三圓五拾錢、露天掘が一圓五拾錢と云ふ安値である。奉天の北陵は、日露の役に、我第七師團苦戰の跡である。日本市街の忠靈塔に禮拜。納骨二二三號及二二四號が第七師團戰死者の遺骨である。今は亡き往年の戰友を想ひつゝ、しばし默禱を續けてこゝを辭した。十月四日早朝、安東に着いたがこゝでも目に見ゆるものみな珍らしく、百聞一見に如かずとは、よく言つたものと、つくぐ感じた次第である。偖て、滿洲を旅してどこでも著しく目についたことは、戰爭當時と變らないのは、農民の生活狀態、變つたのは市街の著しい發達。農家で盛んに果樹の栽培をやつてゐることも、一寸目につく變りやうである。また、當時の禿山は、見渡す限り綠滴る松林となつてゐたのには尠なからず驚かされた。馬賊の盛んに出沒してゐたあの當時にあつては、山野に樹木の多い事は、展望を防げて、彼等の襲來を容易ならしむる爲め植林しなかつたものらしい。何は兎もあれ、滿洲將來の發展は、素ばらしきものであらう。鑛產物に農產物に底知れぬ富源を藏する此地に逐次大資本が投下せられ、產業の合理化が完全に行はるゝの日には、將して如何なる地となるであらう。恐らく大工業地として、燦爛たる黃金時代を現出するの日も遠き將來でない樣に思はれる。（完）

鮮滿所感

下關市　河村廣三

鮮滿から歸つて鮮滿を振り返つて見る。所感を一ツ二ツ順序も不同に竝べさせて戴かう。

朝鮮始政二十周年記念博覽會場は型のやう一巡見物、京城の夜景を遊覽、仁川平壤を經て朝鮮の持つ風土に親しみ、

日支國境を劃する鴨綠江にのぞむ。その大觀、長江の雄大なる眺望、はじめて實景に接するとき、先づ驚異の眼を見張つた。利根や隅田川で舟漕ぐ人に見せてやりたい程だつた。

滿洲の中心は奉天、大連はまた滿洲の關門であらう、これ滿鐵の經營、その港その規模の大なる事は横濱神戸を一ツに合せたより大設備だと見る結構壯麗である。

奉天の花街、桂花書館、と謂へば本屋のやうだが、實は女郎屋であり藝妓屋である。內地の三味線太鼓それに雜談の接待ばかりではなく、所望にまかせ、よく繪も描けば詩も作るといつた風である。また驚嘆するのは、この地の同善堂である。これは社會慈善機關の大なるもので、孤兒院であり、保育場であり、安全地帶である。この門內に歩を入るれば、この所官憲法律もなく、逃走の藝妓の避難所だ。一度不義の姙婦この門をたゝけば、覆面の上安產をなさしめ、その恥を隱してやる。この地名物の捨兒の集容所でもある。この經營維持費は、土地富豪の支那人の貸地料より出づると聞く。兎に角他國に見られぬもの丶一ツ。

撫順の大炭坑、竪坑約三千尺、第三紀層でその色は漆黑だ。所によれば表土さへとれば四百尺の炭層が、すぐ露れて來ると云ふ。それを地を掘るやうに掘下げて行く、その露天掘にして豐富なる事無盡藏であらう。炭は灰分極めて少なくクリンカーを化することが少ないので、世界的だそうだ。滿鐵の寶庫、私はこれを我が國の寶庫と云ひ得よう。

大連でも旅順でも、街路肅然、鋪裝工事の完備はどうだ。この大連旅順間をドライブして見たが、七分通り入れたグラスの水が車內でこぼれないと云うわけ。下關に住する自分には、市內の殺人的道路？に比して甚だ羨やましく思へてならなかつた。

此處はお國を何百里、離れて遠き滿洲の涯知らずの原野、其處に旅順の戰蹟地を見舞うの時うたゝ往時を追憶いたし、たゞわけもなく頭の垂るゝのみ。日常乃木將軍の崇拜深き自分には格別と萬感交々、落涙は乾燥した滿洲の天地、

幾多勇士の靈、永久に眠むれるであらう、この滿洲の野に數行するのであつた。

アカシヤの並木にもれる月、馬車腕車、そして街道のわきに、何等の野心も邪念も無く睡眠する山東苦力、彼等は、廣大な國土に生れた癖に、實以て狹い場所に寢る。日本人は狹い土地に生れた癖に、ゆつくりした處でなくては寢られないやうだ。

支那人の車夫所謂　クーリー階級が從事して居る車は粗末な物だ。只乘心地本意に出來て居る。然るに日本の人力車夫はたゞ体裁ばかり作つて、實用に遠くなつた、私も大連あたりで、この人力車即ち低床車に乘つて賃銀の非常に低廉に驚き、この車の御厄介になつて、その便利を稱へたものである。スピード交通機關を要求する現代とは云へ、人力車の見切やうが早過ぎる。自動車は三人以上を運ぶには適當だが、一人を運ぶ機關としては贅澤すぎる。乘合に、圓タクに全部の人が全部自動車を使用することになると、往來はテンデ動けない、一人用短距離の乘物としては、人力車位の容積が最も適當だと思ふ。早く支那のそれの如く改良し簡素な車にして、曳き手は最下級の若き勞働者をして從事せしむれば、と云ふ感を深くしたので、餘談のやうだが附記する。

支那人は、ノンビリして居て、こせつかない、汚いけれど自由人であり勤勉である。生活力の根强さには驚く。每年山東地方から滿洲へ移住し或は出稼ぎするもの、その數は、百萬を越へるとか聞く。彼等の半數は薄い布團を背負ひ、餅子（ピンツ）をかじりながら徒歩で北行すると云ふ。聞けよ、同胞よ、內地は狹く、人口はあまりに過剩だ。行けよ、この鮮滿の國土へ、日支親善、內鮮人融和、それには、どうしても移住すべきだ。內地人が廣漠な鮮滿の沃土に、各地に、もつと〳〵漲ぎることでなくては。內地重箱の中にのみ蠢動しなくとも、時の政府の方針が、どうあらうとも、人と人、彼我お互ひ同士が堅き握手のもとに親交通商するにあれば、產業立國此處にあり。

天惠の鮮滿には豐かに開拓の餘地は多々ありと信ずる。しかしてこそ、國威啓發はあるものではなからうか。

見聞を博め、遠大な氣宇を養ひ得て、案内所員石田氏の充分な御配慮を感謝しつゝ、十二日振りに、セ、こましい内地に、下關埠頭に着いた時でも嬉しかつた。鮮滿案内所員、朝日新聞社員、家族等多數の出迎を受け、萬歳の聲は夜の港を壓し、一同船で安着を祝つたシャンペンのおかげで、汽笛の關門兩市に融けて行くそれのやう、頭がボーとして、凱旋將軍であるかの如く吾ながら思はれしは愚か。

◈　◈　◈

以上の愚短と來ては『鮮滿行進曲』にも、なるまい、節もなく、文句も拙い。どうぞ讀書諸兄よ、歌詞は訂（ハカ）り作曲もよろしく。

（完）

―昭和四年十月―

鮮滿の旅（日記の中から）

鹿兒島縣加治木町　新名仲次

九月廿四日――下關鮮滿案内所主催の鮮滿視察旅行團に加はる可く午前十一時十分鹿兒島驛發の急行に乘る、車中知人もなくて淋しい、午後八時門司着九時下關から臨時船景福丸に乘船一行に加はる。

九時半愈々出帆、海は又ない凪だ、關門の火が次第に小さくなり、港の山の端に八月廿日餘り二日の月が明るくかゝつてゐる、船は進む、月は愈明るい右舷に本州の影が薄く薄く遠ざかり行く、

三千六百餘噸の船に團員二百名は存分に散らばつて陣取つてゐる、娛樂室、談話室に當てられた三等船室が賑やかに更

くる。眠れぬまゝに、獨り上甲板に登り博多驛で買つた『萬代』の殘り少なきを酌む、玄海を照す月影の中、タオル一枚に座を構へて手さぐりに酌む一盃も又旅なれやだ。

船の夜はいよ〳〵更くる、大、小の鼾もエンヂンの音に消され船は皇國日本の進展に大なる歷史を飾る日本の海の波に賴もしいウネリを起して釜山へ釜山へと進む。

秋風や旅人めきて車窓による
關門の灯影の涯や月の船
朝鮮の灯慕ひ行くや月の船

九月廿五日――午前六時船は靜かな航行を釜山へ進める、東方の雲を色どつて紅い陽が昇る、釜山港の曉方の灯が明滅して後二時間で愈々朝鮮の土を踏むのだ。八時半釜山棧橋に降り直ちに徒步龍頭山に向ふ、こゝは二百四十年の昔對州の王宗氏が金刀比羅宮を祀つた龍頭神社のある州の公園地である神社は內地人が朝鮮に奉祀した最初のものとして名高い、

釜山の街は餘りに內地式に整つて朝鮮に來た感じがしない、只白衣と長煙管の勞働者が驛に街路に呑氣に集ひ合つて居るのが――如何にもと云ふ氣を起さする、九時五十五分釜山を發つて京城への汽車に乘る、

車窓の眺望は一轉する、赤土の山、干からびた水田、點在する民屋、屋上に乾した唐辛子、磧に遊ぶ鮮童、牛を放つて悠々と煙草をふかしてゐる白衣の男、セッカチに働く必要のない程惠まれた生活をしてゐる彼等なのかしら。

沙上、龜、勿禁の各驛洛東江沿岸を走る列車が北進するに從つて水田も想像以上の廣さと出來ばへを見せてゐる、鎌入れは鄉里邊と大した違いはないだらう、煙草は未た立つてゐる、ソバは花盛りだ綿の花がトボシク咲いてゐる、大邱驛停車廿五分を利して街に出る、京城以南の大商業地丈に整つた街である、驛頭に集る大方の鮮人客は博覽會への乘客

らしい。

汽車は北進する、車窓の眺めはいづれも大同小異だ、この線は征露戰にそなへて工を急いだ爲距離に重きを置き都邑を縫つて居ないため變化の少ない線であるとか、南北の分水嶺、秋風嶺驛は海拔四〇〇呎の個所驛ホームに吉野櫻の數本が病葉（ワクラバ）を殘して植へられてゐる、大田もいゝ街らしい、驛前に居る荷物運搬の鮮童遂にカメラを向けると大人の一人が何やらシヤベツて解散さする、大田の鐵道管内で博覽會開場以來日收三萬餘圓を增してゐると、こゝから乘つた某の話、總督府が鮮博に依つて六十萬圓とかの收益をあげる計畫とか聞けば定めしと想わるゝ。

列車は進む、團員のなじみは重なる、日清の役に戰死した、松崎大尉の忠魂碑が建つ安渡川は成歡驛を出てすぐである、夜に入つて碑を眺見し得ない、雨は降つてゐる、久し振りの雨—實に久し振りの雨—が—旅人には有難くない、あゝ明日の行動が氣使はるゝ。

京城——列車は午後十時十分京城驛に着く、夜の驛頭、博覽會氣分をそゝる街の灯は一段と明るく流石に朝鮮の首都である、十時四十分旅館に入る。

秋埃あびて鮮人長煙管

鮮童うつす誑り振りや旅の秋

◇ ◇ ◇

偶感

山口縣防府町　橫田榮忠

今回初めて大團体に參加して朝鮮滿洲方面を視察旅行中熟々國家の御高恩を感ず。

大君の國そさかゆく滿洲の山も廣野もとしにひらけて

しろしめ國はいよ〳〵廣こりてこま滿洲になひく日の旗

下關鮮滿視察案內所の御主催に係る二百名の大團体が九月二十四日より十月五日迄十二日間の旅程を滿足に終了を告げたるは全く誠意ある主催者の取扱の賜ものと深く感謝致します茲に聊か所感の一端をものして御挨拶にかへます。

まろらかに旅を了へしも大團体催（マトカ）し主のたまものにこそ

滿鮮のもてなしふりの老の身にしみしみあつき惠みをそ思ふ

すゝみゆくみよそ尊き老らゝの身にあまりぬる滿鮮の旅

九月二十五日釜山より京城へ向け長距離を汽車進行中秋の候左右の山々を列車の窓より見渡し。

あしひきの山また山のはてまてももみししにけりあさやかの旅

うすからぬくたらの山の紅葉はのからくれなゐの色そまはゆき

九月二十六日朝鮮の舊城內の實景視察を遂げし折。

眼のあたり古城（フルキ）の蹟を見渡せは知らぬ昔のしのはれにける

同日博覽會見物せし折。

ひろらかにとり列へたる產物（ウブモノ）は民の功のたまものにこそ

同日朝鮮總督府内を拜見す。

おこそかに内外とゝのふ總督府御國乃稜威そ建物にみる

同二十七日仁川の月尾島の絕佳なる景色並に佳美なる潮湯の大規模にして設備完全なるを見入浴して。

月尾島佳美の潮湯にゆあみして旅のつかれも忘られにけり

廣間より沖の海原なかめつゝあるしまうけ乃味甘くして

同二十八日平壤の牡丹臺及び其附近日淸戰爭の當時吾陸軍が如何に惡戰苦戰せしかその事蹟を見て。

牡丹臺のほりて見れは平壤の苦戰のあとのしのはれにける

同二十九日安東より大連に向け汽車出發して長距離を通行中左右の窓より大陸の廣野を見且つ朝日の昇る樣を拜す。

大陸とかねてきけともあまりにも廣野のはらにあきれはてける

天の戶をいつる朝日のかゞやきてみねも廣野ももみしはのいろ

同二十九日東洋一の滿蒙の玄關たる大連にて有名なる大廣場中央公園忠靈塔を參拜をす。

建物も園生も道もひろ〳〵と往來のしけきこの廣場かな

國のためたてし功のあらはれて世に忠靈とあかめられつゝ

同日大連の埠頭より朝日の登る大海原をながめ。

日の本のすかたなりけり青海原（アヲナ）よもをてらしてのほる朝日は

同日宏大無比東洋一を誇る大連埠頭の完全無欿なる諸設備を見並に巧妙なる棧橋の設備ありて如何なる大船も橫着けにして大荷物及び旅客等自由自在に乘降が出來るのに驚き入る。

異國にほこるにたれり其まうけあゝと云ふより言の葉もなし

黑船を橫つけにして棧橋のやすき乘場におとろかれける

同三十日旅順の難攻不落と叫んだ實戰の形蹟を見る。

そのかみの難攻不落の旅順港遊ひところと今はなりけり

つはもの〻夢のなこりの偲はれてあかつき寒き二〇三高地

もの〻ふの功をしのふ旅順港さひしくはなし千々の櫻木

旅順の山今もちしほの雨やふる表忠塔あたりもみち色こき

十月二日撫順炭礦の無盡藏とも稱すべき寳の大山並に露天掘採炭と電動の活躍せる採砂機及び第三工塲等を視察するに想像も出來ぬ迚も人間の智惠や打算では出來得ぬ。

いつよか財はつひにつくるとも撫順の炭ははてしなからむ

世の中に寳のしなはおほけれと撫順の炭にまされるそなき

かきりなき撫順のすみの露天掘機械にまかせほりいてにけり

同三日奉天城内を視察す。

奉天のたゝかいのあとしのふかなのこる城壁まのあたりみて

同日同善堂の慈善事業を經營せるは眞に獨身者にして生活の道なきもの卽ち病人老人父なし子拾子父母あれども眞實貧困にして我子を養育する事の出來ぬ子等を入れて病人へは看護を附け幼兒には乳母を附けて丁重に養育し生長に從ひ學問藝術等を敎育して相當の人格を造り易く獨立の出來得る眞實美しき事業を施し居れるを視る。

うつくしやなけのふかき同善堂救はるひとのこゝろおもへは

うるはしき人のなさけのこのわさや世のかゞみともなるへかりける

詩歌 俳句篇

同日名高き鴨綠江の實況並に大鐵橋を見る。

　鴨綠江なかるゝまゝのいかたしもさすかに棹は放たさりけり

　大江をみつにまかせていかたしは水棹もとらす下ちゆくみゆ

　國のさかひ世にも名たかき眞鐵橋(まかねはし)かけしてきはにおとろかれゐる

同五日午後十時一行二百名無事圓滿に下關へ着陸して、主催者も團員と共に長い旅程を終へ大愉快大安心の容姿を見る。

　二百名ふしに旅路を終へにけり主萬歲客萬歲

短歌

鮮滿遊行

鹿兒島市　安田尚義

九月二十四日夜玄海を渡る

西東つどひきたりて隔てなし玄海の夜の秋をほめつつ
わが船は秋の海原あかあかと窓ごとに灯をかがやかしゆく
玄海の秋夜しづけしひんがしに二十日ばかりの月ぞのぼれる

二十五日朝釜山に着く

秋の島外海岸による浪のこの朝なぎてあそべるらしき

棧橋所見

鞭あげて子の尻を打つ聲あらしあな人ごころすさべるらしも

龍頭山神社

松風のひびきを今に四百年神しづまりてますぞ尊き
古の倭冦のともが祭りにしみ神は今にいつき次ぎつつ

同日午前釜山を發し即夜京城着

大邱廉賣市場

道せまく並べし野菜果物の放てる冷ひは身にこころよき

秋　風　嶺

見るかぎりただ禿山や秋風のさびしき峰を今日越ゆるなり

二十六七日兩日京城市中を見る

朝　鮮　神　宮

ここにして國を鎭めの神垣やあな松風のさやけき音す

朝露に心もぬれてのぼりゆく宮のみ坂の紅萩の花

昌　德　宮　秘　苑

昌德宮李王が苑(その)のしづかさは旅の心の塵をきよむる

この苑の林の奥に宮どころありとは聞けど松風の音

赤松の松葉こぼるる道にしてすずしくおつる水の音あり

尾をたてて苑の芝生にいでてあそぶ栗鼠の身かろし露すずしきに

梢には栗鼠が居るらし音たてて栗の實ひとつこぼれ來にけり

パ　コ　ダ　公　園

清正が持ちかへるとておろしける塔の頭を來て見たりけり

食　堂　園

喉ぼそに韓(から)の妓生が安來節うたふを聞けば旅あはれなり

二十七日午後仁川見學

閘　門　式　船　渠

せきためて潮ゆたかなる港内に泊てゐる船の晝の鐘なる

閘門の鐵扉をひらくモーターのうなりは地(つち)をひびかしてゐる

月　尾　島　潮　湯

月尾島潮湯の窓に月さしぬビールの泡のふきこぼれつつ

月尾島潮湯にともる灯火は家路のごとし戀ひつつぞゆく

二十七日京城發、二十八日朝平壤着

玄　武　門

松風の上に聳ゆて乙密臺いらかの反りの秋しづかなる

蟬取り袋すてゆきし子の影もなし松風の音ふきすみにけり

幼くて聞きしいさをの玄武門登りふみつつ去りがてぬなり

箕　子　廟

御廟門いでてきたれば松風のただ吹きすめる音ばかりなり

大同江を下る

舟くだす大同江やうち晴れて秋日しづかにさす水の色

秋ロの匽月島の柳かげ鳴く音さやけき鳥は何鳥

練光亭は行長講和のところ

行長が心つかれをやすむると倚りにけむかもこの太柱

妓生學校參觀

どやどやと入りてゆけるに騖ける韓（から）の乙女はにくからなくに

同日午後いよいよ滿洲に向ふ

新　義　洲

暮れて來て川風さむし鴨綠江（ありなれ）の向うに支那の灯が吹かれゐる

二十九日、大連着、三十日旅順を見る

途　　上

戰跡碑たてる禿山小松山みな秋風のなかに寂しき

旅　順　着

七十臺馬車をつらねて秋風の旅順の朝をゆくはたのしき

北鷄冠山北堡壘

爆破せし堡壘の壁のひび割れに眞晝こほろぎなきゐたりけり

坑道の尖端ほりし兵五人あはれに死にし物語りかな

秋風や鷄冠山の北堡壘いでて衣をなく髑髏もあらん

爾　靈　山

ここにして握れる土に白きもの骨のかけらと思ひさびしむ

喜びて死につかしめし大なる力をぞ思ふ土にすはりて

そのきはに母をよびける子もあらんみ國のために死にし人はや

二十年の月日をここになまこ山松くろぐろと生ひしげりたる

白　玉　山　下

閉塞隊の骨をうづめしあとどころ木の葉ふきまく風暮るるなり

十月一日大連市内を見る

油　房　見　學

素裸の太き五体に湯氣の凝り雫となりて滴りおつる

目を伏せて女はゆけり苦力らの油にぬれて光れる裸身

壓搾機しまる工場の晝しづかこほろきの聲一つひびける

星　が　浦

星が浦秋なぐ汐のいろ青し旅順通ひか沖をゆく船

旅われの憂ひも消ゆや星が浦ホテルの磯に淸くよる浪

アスファルト敷きつめにける大街道ドライブするは誰が家の子ぞ

阿　片　窟

たちこむる煙の中にけものとも魚とも蒼き人の寢ねざま

阿片窟の奥ふかき露路入りゆきて練瓦の冷ねは身にうそ寒き

出でて來て明るき日ざし人間の世に歸りしと思ひ息づく

同日夜大連を發し、翌二日朝撫順着

盜み來し物をひろげて大びらに賑ひてゐる小盜兒（せうとる）市場

露天掘

露天堀あらはに秋の日もしめやよごれて人のトロツコを押す

電氣シャベル岩を咬みきる不氣味さにわれは友らに追ひつきにけり

爆藥のひびきすさまじみるみるに大炭塊を吹き飛ばしたり

二日奉天泊り、三日見學

北陵

北陵の森のふかきに鳴く鳥のたまさか落葉ふみこぼしつつ

みささきの土墳のうへに道つけてこの國人らのぼりし跡あり

張學良氏別荘北陵に續く松林の中にあり

鐵條網張りめぐらして籠り住む人の朝夜の安しと云はじ

同善學堂

左寶貴がかたみと殘る奉天の同善學堂來て見たりけり

捨て子門つくづく見たり道にむきて子が入るほどの丸き穴ひとつ

てなし子産みに來りて寂しからむからんとした内部(うち)のしづかさ

吉順絲房

屋上の眺めはひろしみんなみに張作霖が石館見ゆ

楊宇廷が家はあれぞといふに見ぬうべ相對す張と楊が家

百貨店吉順絲房やすければ支那の土産を人買ひにけり

奉天城

大きこの城のやぐらを構へにし愛親覺羅(あいしんぎよろ)氏早く亡びぬ

三日夜奉天を去り歸途に着き四日朝午前安東を見る

鴨緑江(ありなれ)の流れの岸のしげり草蓼は早くも色に出にけり

鎭江山

この山はおく露霜の早からむ蔦のもみぢの深める見れば

風きよく塵もとどめぬこの園の秋とりどりの花のみごとさ

回轉橋

なみなみと光りながるゝ秋の川回轉橋はひらかんとしつ

秋風の中

下關市 伊東園

出立

東より西よりこゝに相つどひ旅人二百今宵船出す

萬歳の聲に送られすべり出し昌慶丸に喜び滿つる

海洋

蒸し暑き夜をふなばたにイめば秋月清く波にたゞよふ
明けやらぬ玄海灘の靜けさよ東の空はほの白みつゝ

釜山着

船は今釜山港に入りにけり輝く旭にむかへられつゝ

京釜沿線

道のべのわら家の屋根に作られしバカチ眞青に實のりよきかな

京城夜景

見渡せば只灯の都赤々と光まばゆく道を照らせる

京城所感

此村ゆかしこの里ゆ上り來し白衣の人に都は埋む
二十年始政のあとをほこりかに總督府廳おごそかに立つ
七とせの昔の姿なかりけり高麗の都は新(にひ)よそほひして
變らぬと南大門のいたかつら幾度立ちて我が仰ぎ見し

平壤

山かけも空もうつりて眞青なる大同江の流はるけし
折々は櫂のしづくを身に浴びつうき世をよその船遊びかな
賤が干す白衣も天の羽衣か大同門外みどりこき丘

國境

まなかひに白衣の人の影消へてあいの衣の目にしるき里

鴨綠江

鴨綠江いかだ流しもみやびたり河のあなたは夕やけのして

安奉線

秋なかば高粱のかげまばらにて只廣々し滿洲の里

旅順

田舍道ほこりあびつゝたどり來し鷄冠山に秋の風ふく
幾萬の尊きいけにへ捧げてし昔偲びて涙手むけぬ
澄み渡る淺黄の水の旅順港いくさの神の沈みしはいづこ
耳にのみきゝし旅順を今日訪ひて何かは知らず心のしまる
乘る馬車の馬の鈴おと高なれどふと胸に湧く異郷の想

大連所感

紅に綠に大厦立ち並ぶ榮華の都大連の街
出つ入りつ待船あまた城と浮く大連埠頭榮に榮ゆる
果しなく續く大路のアカシヤ路すべるが如く自動車走る
星ヶ浦七つの星の海に落ち島になりしてふ物語りきく
旅の身は人の情けの身にどしむ昔の友にむかへられつゝ

撫順

百とせを堀り暮らすとも盡きぬてふ惠みの土地よ石炭の街

奉天同善堂

幸うすき身とも知らすて幼子等大き惠みの手に育くまる

北陵

其かみの榮華は空し北陵に夏草しげり秋の虫なく

歸途

遼東の山河よさらば旅まくら汽車は我がゆめのせて東に

手をとりつ肩をたゝきつ諸共に別れを惜しむ旅のおはり日

雜詠十首

門司市　堀野登女

崖高き昌德宮の蔦紅葉綿を添へて初秋のころ

大同江にて

小春日にさゞめきあひて衣洗ふ白き姿の水にうつれる

秋晴れて大同江の遊船に友を呼びつゝ下りけるかも

汽車中にて

わらぶきの屋根にほされし唐がらし月照りそひてうるはしきかも

コスモスの咲きつる道に夕ばゆる影をうつして白衣行きかふ

大連にて

アカシヤの靜けき街をする〳〵と夕陽をあびて支那馬車の行く

星ケ浦にて

秋空に黃赤みどりとり〳〵に屋根のそびへて海近きかな

旅順にて

ますらをに供へんとして道邊の野菊手折ればこほろぎの鳴く

北陵にて

秋風の何かさびしき陵に來て昔榮ゐし頃をしのびぬ

鴨綠江畔

船歌を今一聲と待ちゐれば朝霧の中に見ゐずなりけり

日記の中より

宮崎縣小林町　T. Y.

別れおしむ五色のテープゆるやかにとつ國にたつ心地こそすれ

音にきく玄海洋は夢なれや旭照りそふ鮮山を見る
見はるかすポプラばかりのうちつゞくあの中程に赤屋根のあらば
藁屋根の一團総る村外れ何處も同じ子供寺の秋
鐵輪の音に草刈る若者の顔は此方に魂は空に
刈あとに餌をあさりつゝ打群れて豚の世界はかく長閑けかり
つわものが勳は高し白玉の峯にそびゐつ空をおほへつ
破れはてし山の姿や秋ふかみ堡壘のかげに草の枯れゆく
年毎に咲きや出づらむ草花の手向心を床しとやみん
双龍旗東の果に夢なれや殘壘破壁今聲もなし
幾山河訪ねわたれば岩に土にそゞろ昔の思はるゝかな
涯もなく擴がりわたる此の平野養なう民のかぎりなかなむ
白塔にかゝる斜陽のみまほしく想めぐらす三千年の前
荒れ果てしこの奥津城にさまよへば榮枯はかなき王者哀しも

◇

◇

◇

鮮滿雜詠

八幡市　和田藤太

船中にて

行く船のへさきに立てばほのかにも月に眠れる六連島みゆ
吹く風も涼しき洋の月を見て進む船路のおもしろきかな
秋風にたもとふかせて涼しくも月すむ洋を進みゆくかな

秘園にて

きばみたる園の木のまを縫ひ行けば芝生のあたり栗のこぼるゝ

車中にて

白さぎのむるゝと見ればこま人の流れにそひてきぬ洗ふなり
木の子にも似たる草やの村見ゐて白きぬつけし人の行きかふ

月尾島の墟湯

から國の島の墟湯に身のつかれ流して後の酒ぞうれしき
月尾島ゆあみのちにしむ酒は藥の上のくすりなりけり

大連埠頭にて

内外の船のかゝりてたぐひなきはとばときくが嬉しかりけり
百千船かゝる港に日の本の國の光りの見へてうれしき

旅順戰跡にて

くつのまゝ蹈むもかしこし丈夫が血汐にそめしあとゝ思へは

北陵にて

かへりみる民もなくして北支那のみさゝぎいたくあれはてにけり

同　壇登寶鼎達則重懲の碑を見て

達則重懲のいしぶみ草にうもれけり

大同江にて

たゝかひのさまをしのびて秋さむき大同江を下りゆくかな

鴨綠江にて

月日經て流す筏に植うる粟の青みてありときくが珍らし

鮮滿案内所歡待を喜びて

みちびきの人の手厚きもてなしに旅てふ事も忘れはてけり

旅順戰蹟にて

福岡縣椎田町　詩津子

馬車を走らせつゝ

あくがれの國ぞ夕日の赤しとや幼き頃の歌口ずさむ。

リンゴ園を見て

其昔し我がますらうをのながしたる血潮の色よつぶらリンゴよ

君見ずや鬼ひしぐらしますらをの荒野に立てる其のまぼろしを

說明をききつゝ

我が立てるみ山の歷史を聞きおれば空おそろしさに眼閉ぢたり

—四、十、十五—

雜詠

福岡市　一學生

大連の酒場の事など聞きおれば今宵そぞろに旅心湧く

あてどなく旅立ち行きし無謀さも憶い出ずればなつかしきかな

◇　◇　◇

雜詠

熊本縣高瀨町　瀨口五四郎

朝鮮を訪ねて

移植へて鷄の林に櫻咲く旭に匂ふ今日の嬉しさ

旅順の戰蹟を弔ふて

男子たちの眠れる跡に人知れず心手向けて袖濡らすかも

奉天同善堂に感じて

唐土の情の庭に咲く花は人の心の鑑にぞある

船中の離杯を詠みて

名にしおう鳥も通はぬ海原に別を措む秋の夜の月

偶想

鹿兒島市　中田文七

來て見れは聞しに勝る都會かな來賴母しき滿洲なるらむ

歌屑

石田芳雄

今春四月新羅の舊都を訪ふ

慶州佛國寺にて

佛國寺石のふるびしきざはしに櫻の枝は伸びて咲きほこる

苔青き梵鐘閣の圓瓦春日あまねく四十雀が啼いて

仝七月金剛山に遊ぶ

內金剛雜詠

樅の木の茂りはふかしあまぎりの湧きたちのぼる天の岩峯(イワホ)へ

たちのぼる雨ぎりは濃ゆくあつまりて岩峯をめぐりうごきをれるも

長安寺いくもゝとせの染みこめて屋根は反りたり岩峯の下に

長安寺水晶門の圓柱傾き朽ちて木の香がにほひ來

芍藥の花が咲きゐる正陽寺六角堂の前にたゝづむ

岩の秀(ホ)に鳴りつゝくだくる瀨の水はあまぎりの中にうちおどりつゝ

うちおどりながるゝ白き川水は木々のみどり葉ふるはしにつゝ

岩角をつかみて立てる木橋のうへ鳴淵　の水おどる見ゆ

萬瀑洞草鞋ふみしめおづおづとすゝむ足音に逃げゆく青蛙

しばらくはおやみとなりし雨空に望軍臺の岩峯うかび來

夕げむりほそほそのぼる摩訶衍寺木魚の音を聽きつゝ近づく

北鮮十首

鮮人のわかものたちのうたふ唄汽車のひびきの中にこもりて

唄うたふわかもの五人乘せてゐて咸北の野をはしる汽車かも

雨ぎりはすめらみくにの兵隊の舍（ネヤ）をつゝめり羅南の町に

いにしへの加藤肥州が蹄のあとはるばる訪ひぬ會寧の山を

會寧の驛前の飲食店（ミセ）に雨さけてうどんの箸をとりにけり吾は

圖們江のにごりは深したうたうとながるゝ上に筏が見ゆ來

筏夫はわざのやすみに焚火して煙草吸ひをり雨ふる中に

圖們江むかつ山山は支那領の間島といへり雨ぐも垂れて

摩天嶺の隧道はながし闇にゐて時計見をれば四分かゝりき

雨ぐもは濃ゆく垂れこめ生氣嶺の驛は小高き山にありけり

◈　◈　◈

俳句

高粱

山口縣花崗村　上原良太郎

秋の旅幸開けゆく出船哉

秋の宵一團欒や月尾島

筏士よ國境の秋深みけり

高粱を牛の挽きゐる曠野かな

高粱に秋深き色動きけり

國訛とりぐ秋を語りけり

支那料理に異國の秋を語る哉

旅順にて

秋風に埃の町を急ぎけり

心なう吹く秋風や爾靈山

懷舊や秋晴れて澄む爾靈山

奉天にて

もの凄き噂に秋の夜は更けて

果遠く山平かや秋の風

鮮滿吟

龜　齡

牡丹臺

秋廣し見渡す限り古戰場

滿洲の平野

大陽の梁すり出て梁に入る

旅順

腫き軍語りやそゝろ寒

滿洲の山野

一眸や秋の夕やけ紅の山

大連泰華樓

途々の秋も忘れぬ支那料理

奉天北陵

行く秋や古びた支那の偲るゝ

牡丹臺

山口縣防府町　神田一扇

平壤牡丹臺

あら鷹乃功やのこる玄武門

今は只軍勝栗はなし哉

旅順

長き夜の軍かたりや爾靈山

滿洲源野

高粱や首より高き秋の風

撫順炭

話より廣し彌深し撫順炭

雜吟

廣島市　椋本完一

男でも涙こばれし鷄冠山

滿洲の野山に光る表忠塔

満電の雨語の出來る車掌かな
捧打ちを川毎に見る洗女かな
夢に見る妓生の優恣かな

慶州と金剛山（古き句帖より）

石田芳雄

□慶州にて

佛國寺ホテルの夜

朝鮮の山が焼けとる硝子戸に
黄いろいランプの座敷にすはる

石窟庵登攀

春曉の山路をのぼる四人は默つて

石佛

名工の鑿跡のさび石はつめたく

佛國寺

紫霞門の反りかへつた屋根が囀つとる
囀りを聽いてゐる多寶塔のぬくみ
鮮人の子の尻出して陽いつぱいの庭

大雄殿

大雄殿は古りさびてまつかぜの音
鼻かけた柱の龍に春日がさして
仄明りの佛体に近づく私

古噴群

松が匂つてゐる古墳の中の松
古墳の上の夏草乱雜にゆれ

武烈玉陵

說明者は石龜の首を撫でたまつかぜの音

五陵

ゆるやかに松の影ゆれてをる五陵へあゆむ

半月城址

城址いちめんの麥熟れて

□金剛山にて

內金剛へ

斷髪嶺は白ばねの霧が湧いてゐる

明鏡臺

あをぞらの巖のとがりの冷めたい眼

表訓寺

木片と石の瓦の僧房です

長安寺ホテル

夜だちとなつた籐椅子のしめり
異國の人は蓄音機をかけてゐるよだち
枕にひゞくせゝらぎの音寢臺に寢て

溫井嶺越

郭公の啼くこゑのほかは瀑の音

外金剛萬物相

岩にあたる杖の音のみひゞく空
岩峯のゆらげるおもひ雲を見てをれば

神溪寺

沙羅の樹かげが黒い雨足なげ出す

◇

◇

◇

詩其他

滿鮮旅行即興詩

山口縣柳井町　高田美次

海の上は文身(いれずみ)の美しさを胎んで膨れ、素裸になつて夜は出帆する　(關釜連絡船にて)

×

まだ何にも見ゑない。しかし、甘いやうな酸つぱいやうな、始めて味ふメロンのうれしさが込上つて來た。　(關釜連絡船にて)

×

白衣の人々があちらを向いて歩いて行く。その後から　蝕ばまれて 太陽は薄濁の 空を追はれて行く。噓しながら、しながら。　(京釜線車中にて)

×

雨にうたれて夜の水族館に白衣の魚群はゝ泳ぐ、跳ねる。　(京城にて)

×

月下に白亜館を見るより白い妓生。これはよく馴された羊です。繃帶のやうに親切に、暖かく接待し呉れる羊です。行儀が少し悪いけれど。　(京城、明月館にて)

×

僕の焦点は彼女の美しき耳にあつた。それはよい然し、俄然僕は彼女達の存在の中に、昨日の悲哀（かなしみ）と、更生さるべき明日への嬉喜（よろこび）を見出す努力に沒頭し始めた。（京城、明月館にて）

×

門、　臺、　樓、　廟、　塔。
塔、　廟、　樓、　臺、　門。

往古の彼等を天才と呼ぶのは間違いである。彼等は單に自然と共に耽美主義者であつたに過ぎない。（平壤にて）

×

『山の手』に限らず『下町』と云はず、西も東も、南も北も、ネクタイ屋の前に立つた氣持です。（大連にて）

×

膨大な．然し軟らかい薄霞色の腰卷を三枚列べて、あげ芋が行儀よく附添つて。（大連埠頭俯眼）

×

潮に濡れた砂丘を、吹き上げられた風の中で仲よく四人の若い女が歩いて行きます。太陽の心が歪んだわけではない。支那には有り勝ちな風景です。

あの豪奢な建物は有名な支那亡命家の別莊です。（星ヶ浦にて）

×

夜の鰭をびらびらに燃して露西亞の女が、突然胸の前で跳ね上ると．英國の水兵さん、あはてゝ．あひるの足どりでついて行くのです。無論饐れた僕の心は釣り上げられたが………。

鼻もちならぬ異臭が、僕を釘付けにしてゐたので駄目です。（大連ヴィクトリア、ダンスホールにて）

×

僕は錯覺ではないかと思つた。黔血んだ頭蓋骨が喇叭を吹いて歩いて來るのです。けれど案内者は僕に話した。滿洲は風が強いからね、と。（爾靈山にて）

×

僕の感情が栓を抜かれたまゝになつたのも無理ないことです。山上の地中では、負ひ投げられた力士のやうに、コンクリートの兵舍がもがいてゐるのです。（東鷄冠山にて）

×

平氣で、自由に、胡麻油と大蒜（にんにく）の中で、鋼鐵製の足と手が、錐のやうに僕の心臟を弄んだ。（撫順華工收容所にて）

×

地表を眞紅に彩つてゐるはまあかざと××霖の鐵道と如何なる關係があるか。

僕の疲れた思念は決算もせずに、赫い太陽が無妥協にも奪つていつて了つた。

巳に、全てのぬけ殼は日沒へ案内されてはゐたが。（奉天にて）

×

無果花色の夜が擴つてゐた。平康里の女は、特に艶樂書館では、日本人的なのが多かつた。彼女達は、たゞ生きるために要るだけの土地の上で、青い動悸の打つ思想を刻み込んでゐる。氣まぐれにパイプで吸飲するのでなくて思想をぶち碎くためだそうな。（奉天にて）

×

僕は斷然寒氣を感じやうとあせつた。

心臟を落そうとたくらむだ故ではない。偶然にも此處があまりに疲勞した判斷力の到達した逃匿所だつたわけでもない。已に歡喜と措別とに沒頭さへしてゐたのです。（奉天にて）

大同江其他

山口縣彦島町　中田茂雄

一、大同江

◈大同江寫す姿は牡丹臺

◈流る水は變らねど昔を語る大同江

二、旅順

旅順尋ねて來て見れば　昔を忍ぶ山や海
此の天地を震せた　煙火もなほ燃る樣
今も先輩が叫號するかの樣　幾萬の精靈おはすらん
清く澄んで空高く　浪無く靜な旅順港
山の下の支那の家　點々に赤く實のなつた
可愛く繁つたリンゴの木　ありし日の俤今何處
高く建つた煉瓦家に　風に飜く御國の御旗

三、偶感

おー!!滿蒙の曠野　赤い日の入る此の地
何んたる廣い處だらう　何んたる詩的な處だらう

無限無盡の寶の地

我等若人の血はほとばしる　我等の兄弟も働いて居る
資源豊な寶の地　狹い日本に住あいた
進め／＼赤い日の入る　豊源滿蒙の地

愚想

若松市　小田祐三郎

茲が亞細亞の大陸か　廣漠偉茫の大廣地
見渡す限りの平原野　山野の變化に乏敷も
之が大陸現象哉　世界の寶庫の大半は
亞細亞の地点に抱容す　最早醒めよ支那の國
東洋平和の共爲に　同胞日本と提携し
亞細亞人種と合同し　日支は共同合併し
天資の富貴を開發し　殖産興業開拓し

日誌及雑篇

多くの人數を督勵し　低き人歩を使役して
社會の福利を增進し　亞細亞の豐富の源泉を
早く開けよ世の爲に　文化の民へ導けよ
文化の民へ導けよ

鴨綠江節

亞細亞洲―富源地点の其開作は東洋强國アノ日の本の
すめら御國のものゝふの奮起とマタ指導を待つばかり
朝鮮と―支那の滿洲のアノ開發は同じ亞細亞に秀でたる
神の御末の日の本の男子マタ義俠に待つ計り
朝鮮や―滿洲蒙古のアノ開拓は東洋一なる我國が
上下一致で協力し移住もマタ促進するがよい

視察團日誌

石田芳雄

■九月二十四日

愈出發の日が來た、今春來の準備殊に最近二ヶ月間の努力の收獲が今日刈られるのだ、愉快なこと、嬉しいこと、心臟が躍動する、午後から續々と來著される團員諸氏の顏を見るたびに込みあげてくる喜びに眠つとして居れない昂奮を感じる。

北、北海道から南、臺灣に至る男性一七一名、女性二八名合計一九九名より成る素晴しいメンバーで午後九時、關釜連絡臨時就航船景福丸に乘込んだ、見送りの團員家族、大阪朝日新聞門司支局員、案内所員の怒濤のやうな歡呼を浴びて九時半目出度解纜する。

行く手は遠い、一路無事平安を祈る見送人の顏を遠ざけつゝ一大浮城は黑い潮の上に乘り出でた。

十時、十二時未だ寢ない團員諸氏の面上、好奇に輝く眼と一沫の不安の色が見逃せない。

海上平穩、月明に輝く玄海の色は物悽い程蒼白だ。

■九月二十五日

早くから起き出でた團員諸氏は、秋の朝陽を浴びて皆甲板に集ひ朝鮮近海の風光に眺め入つてゐる、味噌汁の甘ひ朝食を喫して仕度を濟ますと、船は辷るやうに釜山港に入つて行つた、棧橋にわざ／＼京城から出迎へに來て吳れた鐵道局の富永君のにこやかな顏、大和田副參事を初め釜山運事の諸君の顏を見出だしてホツとする。

朝日新聞通信部が旭日の旗をかざして出迎へてゐるのは感謝に堪へない。

上陸すると直ぐ一行は富永君等の東道で龍頭山に向つた、其間に自分は釜山驛の諸君と協力して列車の準備にかゝる龍山鐵道病院の看護婦高橋綾子、中村綾子さんが救護班として同乘して呉れる。

軈て午前九時五十五分、一行を乘せた二等專用列車はガタンと一搖れ搖れて朝鮮縱斷の壯途に着いた、皆元氣旺盛、晴れ〴〵とした色が面上に流れて居るのが嬉しい、列車は暫く洛東江の沿岸をひた走りに走つて午後一時近く南鮮第二の都會大邱に着く、二十數分の停車時間を利用して、ハイヤーを飛ばして市中を瞥見する人、驛前の通を散策する人、名物の林檎を買ふ人、短時間ではあつたが極めて有効に使はれた。

大邱を出て吉賀團長を初め班長を各班に紹介して廻る、團長さんは溫厚な方、そして仲々演說がうまいので人氣が好い。

列車は間も無く秋風嶺の嶮を越へ、太田を過ぎて夜十時過、チラつく漢江の灯影を眺めながら第二日の行程を無事京城驛へ到着した。

驛のプラツトには各旅館が旗をかざして出迎へに來て居る、一行は近代的建築を誇る大ホームを流れるやうに出て終つた、後には富永君と旅客專務の岩出君が一行手荷物の旅館引渡しに忙しい、殿を務めて漸く驛前廣場に出ると、秋雨がしと〳〵とアスハルトの道路を敲いてゐる、南大門のイルミネーションが暗い空間に鮮かな線を畫いて鼻先に躍つてゐる、ホツとした救はれ心で本部旅館大東館に入つた、二階の座敷に座ると間も無く電話だ、『僕の荷物が無い』續いて二人、頭をグワンとやられた氣持である、手荷物の心配と明日の天氣を氣使ひながら漸く就寢、午前二時。

九月二十六日

午前五時、鞳々と大地を叩く雨の音に跳ね起きた、さあ事だ、仄暗い空を見上げたが一寸止みそうもない、天を怨んで見ても始まらない、……二百本の傘、出發時間の延長、團員諸氏の顏、……斯うしたものが頭の中を走馬燈のやうに走る。

電話を京城驛內輸送係にかけて瀧谷君を呼び出して貰ふ、午前七時、相談の結果不取敢出發時間を三十分延して模樣を見る事にした、富永君は其事を各旅館に通知する、電話が輻輳してゐて中々通じない、其內九時になつた、雨は小降りになつた、九時半、自動車が來ない、苛らつ心を鷄林自動車會社へ飛ばす、歸る自動車を片つ端から旅館へ廻して漸く集合場所の總督府正門前に行く、時に十時、雨と電話の行違ひで九時から雨に濡れながら來着されて居た一部團員諸氏に眞に申譯が無い、恐縮する。

十時過皆勢揃ひして光化門から博覽會場に入り直に自由行動に移つた、此頃から雨漸く霽れあがる、ほんとに怨めしい雨だ、

會場の規模は素晴らしい、どの館も好い出來榮だ、休憩所になつてゐる慶會樓は流石に斷然群を抜いてゐる、吾社の滿蒙館も非常な出來榮だ、一行皆二階で接待を受け滿足する。

後四時半總督府正門前に皆集合して工費七百萬圓東洋一を誇る廳舍を見物する、終つて本日は散會

夜にかけて紛失した三箇の手荷物を探すべく各旅館を訪問したが判らない。

自動車會社の主人を宿に呼んで富永君と三人、深更迄明日の打合せをする。

九月二十七日

天氣快晴、今日は午前京城市內見物、午後仁川見物だ、

午前七時朝鮮神宮石段下にハイヤーを飛ばすと、富永君と鷄林の主人が既に來て居る、待つ間も無く、トツプを切つて團長一行の天眞樓組が來る、それから續々八時前に全部の勢揃ひが濟んで神宮に參拜する、境內から大京城の瞰瞰はいつもながらに爽快である。

終つて自動車を連ねて昌慶園に行く、九時を過ぎたら拜觀が出來ないので直ちに昌德宮秘苑に向ふ、幽邃な樹立ちのあちこちに彩色の古びた閑雅な樓亭が隱見して如何にも靜かだ、閑古鳥でも啼きそうである、說明者の聲が神寂びた庭に能く透る、秘苑を一通り見終つて昌慶園に出で動植物園、博物館等で一時間半ばかり費す。

十一時出發、パコダ公園を一瞥して京城一流の朝鮮料理店食道園に入る。

茲では一行の爲め特に鐵道局の馳走になる午餐と妓生の舞がある

テーブルに盛られた朝鮮料理の數々に一行は皆眼を剝いた、然し其特有の冷味と脂氣と香氣に思ふやうに箸が運ばないのは殘念だ、其中に神仙爐のみは良く賣れる、軈て舞臺に妓生が現れる、一同は箸を投げ捨てゝ眼を吸ひ寄せられた、椅子を離れる人、椅子に立上る人、蓋し、妓生に對する憧憬は老若男女皆一樣であらう。

四皷舞、劍舞、僧舞……孰れも非常な喝采を博した、それから鴨綠江節、國境節、安來節、妓生は調字に乘つて流暢な日本歌を長皷を面白く敲きながら歌ふ、團員は熱狂する、鹿兒島の老團員某氏は小生の手を固く握つて『有難う、有難う、お蔭で長生をします』と非常に愉快そうであつた。

歌が終ると妓生を眼がけてサインを求める人が殺到する、妓生は馴れた手付で署名する

食道園から自動車で驛へ、其處には仁川行專用列車が待つてゐる、後二時發、三時上仁川着、朝日新聞通信部、協贊會、驛長諸氏に圍まれて一行は長蛇の列を作つて仁川市街を徒步見物しながら東洋一の閘門式船渠に至る、折柄幸運にも一隻の汽船が入港するに會し、一行は其實際運用を見學し得る處多大であつた。

それから自動車を連ねて月尾島に到る、月尾島の四面は海、風光又絕佳、啻に仁川の公園地である計りで無く實に朝鮮半島の樂天地である、一同潮湯浴場の大廣間に陣取り、滾々と吹き出る潮湯の大浴槽に旅塵を流し、縹渺たる海波を眺めながら盃を傾ける、此情景は定めし團員諸氏の滿足を購ふた事であらう。

後七時五十分仁川驛發再び京城に歸着、出發北行迄の時餘は夜景觀賞、買物等に費された、小生は滯在中の諸勘定を濟まし驛に行けば、紛失手荷物の內一箇が偶然發見され喜ぶ、此日特に遺憾なのは第一班團員中野宣次氏が下關出發前より痼疾の胃痙攣發作があつたのを努めて參加强行せられた爲め遂に當地で倒れられ離團の止むなきに至つた事である、同氏の悲壯なる御決心を思ひ、速に快癒せられん事を祈願して十一時十五分出發

■ 九月二十八日

車中朝食を濟ますと間も無く平壤驛着、プラツトには例の如く朝日新聞關係者、田中運輸事務所長初め運事の諸君荒井驛長等の出迎へを受け、直に驛前から電車二臺を借切つて出發する、東道役は森井營業主任其他、大神宮で電車を捨て、徒步で箕子廟を經て乙密臺に登る、先づ風光の美に一同讃嘆、脚下を流るゝ溶々たる大同江、相對峙する牡丹臺、玄武門、浮碧樓、お牧の茶屋、凡て畵中の物である、茲で說明者某君より詳細を極めた日淸激戰談を聽き皆滿足す、臺を降つて浮碧樓下で一同紀念撮影をし、十一時十二隻の屋形舟に乘り込んで、辨當をパクつきながら畫中の大同江上を流す、兩岸の風色、山上に點在する閑雅な亭、正に詩である、此印象は團員諸氏の永く忘れ得られぬ處であらう、此間約一時間、正午過練光亭下に上陸、プログラム外ではあるが一行の爲め妓生學校を見物することにした、團員諸氏の喜びは又想像以上である、學校には百名近くの氣麗な妓生の卵が修學中、約二十分間階上階下は一行の占領する處となつた。

商品陳列館に行く、茲では協贊會の馳走になる妓生の舞を階上で參觀し聊か妓生に飽滿す、これで平壤視察は大滿足裡に無事終了し列車に乘込む。

後二時半出發、窓外に展開する北鮮の秋色を眺めながら早くも新義州着、『橋を渡れば支那の國』である鴨綠江の鐵橋を薄暮渡る、流石に國境氣分が濃厚に湧く、次は安東驛、稅關があり、列車の乘換がある、一行皆緊張す。

安東驛には本社營業課の宮內君、西旅客專務が待つてゐる、ホツと救はれた氣持になる、此處で富永。岩出兩君と別れる、稅關、乘換共頗る簡單に順調に終り、團員諸氏は滿鐵破格の待遇による二名分座席を得て初めて暢んびりとして心豊かだ。時に寒冷急に加はつて、列車にはヒーターを通す，『流石滿洲だ』と時ならぬ氣候の變化に愕く人も尠くなかつた。

八時出發、安奉線をまつしぐらに大連へ

■ 九月二十九日

鞍山附近で皆起床、朝陽麗かな窓外の景色の一變に一驚の態、漠々たる赭土の曠野、其處には到る處高梁が刈られてゐる、鷹揚な大陸土民の風俗はせゝこましい日本人にとつて殊に感興の深いものがあらう。

昨夜來車中時々『時報』を發行する、これが又素晴らしく人氣が好い。

後一時五十分、滿蒙大陸の玄關口大連驛着、本社鐵道部から貝塚旅客主任初め營業課の諸君と各旅館主の出迎へを受け、團員諸氏は皆肅然と旅館へ引揚げる、今日は自由行動だ。

貝塚さん曰く『全く粒の揃つた良い團体だ、滿洲で始めてだ』と、小生尻が擽ばゆいのと鼻先がピクつくのと正比例す、皆で本部の東旅館へ入りビューローの案內人を加へて大連、旅順行程の打合せをする。

■ 九月三十日

今日は旅順視察だ、大連驛に皆集合し午前七時五十分發列車に乘込む、一同元氣旺盛、歡談湧くが如し、九時旅順驛着、九里驛長初め井上、大栗兩助役斡旋大いに努む、戰蹟案內者の大坪君を先頭に、蜿蜒七十臺の支那馬車を連ねて東鷄冠山北堡壘向ふ、黃塵万丈頗る壯觀だ。

北堡壘は堡壘中設備の完備を以て鳴り又慘狀尤も顯著である。秋風肅條たる中に、聲を勵まして、當時の慘憺たる實戰の狀態を詳さに語る大坪君の熱辯は、一同の肺肝を衝いて深刻な感激を與へ歔欷の聲が處々に起る。

玆で紀念撮影をして山を降り、戰利品紀念館を參觀白玉山上に向ふ、雄大な表忠塔下に立てば、閉塞隊の悲話で有名な旅順港口、二〇三高地、水師營、各砲台、堡壘、皆四顧の間に在り、納骨祠に參拜して三々伍々山上に散らばつて晝食辨當を開く、休憩時間に高さ二百十八尺の表忠塔に登る人も尠くない、中には塔上萬歲を絕叫する一團もあつた、后一時四十分山上を出發して新市街を橫斷、關東廳、關東軍司令部を瞥見して二〇三高地に向ふ、滿洲時有の黃塵濛々と立ちあがり、皆眞つ白になる、二〇三高地の頂上では大坪君の熱辯に依り當時激戰の狀が彷彿とする。

歸途、博物館を參觀、其藏品の考古學上、美術學上頗る價値高きを讚嘆せぬものはなかつた。

后四時半旅順發列車で深刻であつた今日半日を感謝しながら皆歸連の途に着く、一部團員はハイヤーで旅大道路をドライブする。

夜、同宿の團員を案內して山縣通りのカフエ、ボンベイに行きカウカサスの女ダンスを見、小崗子にあくどひ支那の校書を素見し、阿片を吸ふ。

■ 十月一日

一行を甲乙の兩班に分け大連市中視察、午前八時旅館を自動車で出發、大連埠頭、油坊、華工收容所（碧山莊）、滿蒙資源館を見る、埠頭では東洋一を誇る船客待合所の屋上で、詳細を極めた紺野君の說明の下に雄大な大連灣及埠頭設備を見、皆三嘆す、油坊では豆粕製造の實際見學と共に全裸体の作業苦力に吃驚の態、福昌華工收容所の碧山莊では、安部氏の明快な說明を聽き支那勞働者を遇する社會的施設の完備に一同深く感銘を與へられた、夫れから市街眼拔の大廣場、大山通、浪速町の盛觀に打たれながらロシヤ町の滿蒙資源館に到る、玆は大滿蒙產業の縮圖、凡有物產が展開されてあり充分な視察には數日を要す、皆非常な興味を以て約四十分間に視察し、郊外の遊園地星ケ浦に向ふ、途中山上の遊

覽道路を通り、グレート大連市を膷瞰して近代都市の美觀に打たれない者はなかつた、星ケ浦迄マカダム式道路の坦々たる起伏、其ドライブの快感は又諸氏の忘れ難いものであらう、ヤマトホテルに入り漂渺たる海洋を見ながら洋食の午餐を喫す、食后庭園の芝生で紀念撮影をし約一時間を低徊逍遙、暢んびりとなる、后一時三十分出發再びドライブの快味を喫して旅館に歸る、夕景迄自由時間

筆者想ふに團員諸氏は異國情緒を大連に於て滿喫せられた事であらう、アカシヤの街路樹、辻馬車、ロシヤ町波止場、碧山荘、小崗子露天市場、支那の校書、阿片窟、等々、后六時から鐵道部長招待の支那料理が泰華樓で開催、定刻には團員諸氏全部出席、二十數箇の大卓子を圍んで西瓜の種、南瓜の種を嚙ぢる人、紫烟を吹かす人、雜談をする人で仲々賑かだ、軈て運ばれる支那皿の數々、中味の料理は片つ端から始末されて行く、老酒 黄酒の舌ざはりと氷糖を入れた其甘味に好奇の眼が輝く、斷髪モダンな校書が來る、其淸楚な姿態に皆眼を瞠る、校書は愛嬌を振りまきながら卓子から卓子に白魚の様な指を伸ばして酌をして廻る、市川鐵道部次長の歡迎の挨拶と吉賀團長の答辭が終つて、疳高い胡弓の音が鳴り出す、校書が頭の天つ邊から出る様な聲で歌ひ出す、一同すつかり支那情緒に滿悅して陶然となる、斯くして大連出發の日の夜は更けて九時近く散會、小生は貝塚さんと浪速町の灯影を踏んで宿に歸り、諸勘定を濟まして驛に行く、專用列車の窓に見へる團員諸氏の顏は皆殘りの夢が惜しそうである、斯くして貝塚さんやビューロー諸君其他に見送られて后十時半大連驛を出發北行す。

■十月二日

午前六時頃、當所第二回視察團一行の專用列車と湯崗子、千山間で行違ひとなるので、特に大連、奉天兩鐵道事務所長の命令を以て兩列車共除行し相互敬意の交換をすることに前夜決定、此旨團員諸氏に通じて置いたので皆早朝起床、湯崗子を過ぎて間も無く機關車が長緩汽笛を吹鳴し出した、さあ列車が見へたのだ、皆窓から首を出す、吾列車は速度

を急に落す、行違ひ様一齊に割れるやうな聲で歡呼を浴びせ交した、時ならぬ歡聲は朝露の煌く曠野に響き渡つて嘸土民達を愕かした事だろう。

遼陽驛著、十分間の停車時間を利用して驛から五、六丁の白塔迄洋車を飛ばした好事家も有つた、遼陽を出ると燦々たる朝陽の中に有名な白塔と遼陽城壁が光つて見へる、間も無く水の少い太子河の鐵橋を渡る。

午前九時五十五分撫順驛著、大尾驛長、ビューロー支部員に迎へられて高等女學校講堂に到る、茲で炭礦職員波越氏から滿鐵經營の撫順炭礦概要を聽取、終つて東洋一の大炭礦の事業視察に出掛ける、炭礦事務所前から專用電車二臺に分乘、甲乙兩班に分れ各反對順路から大山坑、露天堀、油頁岩製油工場を視察、其間千金小學校で晝食辨當を採る。

大山坑は堅坑中の最大なるもの、運炭車の縱横に疾走する危險な中を濛々たる炭塵を被つて無事視察、世界的な露天掘の雄大な規模には只管驚嘆せぬものは無い、油頁岩は久敷問題となつて居ただけ一同の興味を索くに充分で有つた、其製油工場の宏莊な設備には皆一驚した、波越、渡邊兩氏の懇切な說明の下に、最新科學を應用せる此世界的大炭礦を視察した團員諸氏は、見聞上の非常な收獲を喜びながら后三時半撫順發、五時、東三省の主權地遼寧省城の在る奉天に着いた。

驛には各旅館が出迎へ、皆夫れ〳〵落着く。

夜、同宿の團員神田、皿田氏等に誘はれて奉天一流の料理店艷樂書館に行く、茲は日本人禁制の處、入れ替り立ち替り訪れる校書の美容艷姿は流石大奉天なればこそである、明日の打合せの爲め早々失禮する、今宵附屬地内に强盜騷ぎが有つた爲め、團員中城内に向つた一團は、突如自働車を遮ぎる數名の巡警に、左右から鼻先に拳銃を擬せられ膽を潰した由、旅情掬すべし。

■十月三日

今日は奉天視察、旅館別に甲乙兩班に分れ各反對順路に依り視察、兩班を合して馬車百數臺、正に偉觀である、東道役は奉天鐵事の松澤君並奉天驛員。

午前八時旅館別出發、附屬地內の奉天神社に參拜、滿鐵經營の南滿洲醫科大學を瞥見　奉天大會戰戰沒者の忠靈塔に敬意を表して愈々奉天城內に向ふ、大西邊門を通過城內に入り同善堂を參觀、茲は支那人事業中稀に見る慈善事業で有つて、其內容及設備を見聞し皆深い感銘を得る、吉順絲房は城內第一の百貨店で有る、團員で買物する人も尠くない、絲房の屋上に登れば奉天城內は一望の下にあり、前の東三省保安總司令、現東北政府首席張學良の邸宅が巍然と万瓦を壓して聳へて居る、若年の彼は茲から號令して居るのだ、其他曾ての宮殿、城內を圍む城壁、城門等々

小西邊門を出て北陵に向ふ、其沿道は少し大袈裟だが正に黃塵三尺の堆積である、馬車の轍に捲き揚げられる濛々たる土埃は息も詰まる位、此間約一里、一同眞白になつて兵古垂れ氣味、然し北陵近くなつて漸く道が良くなり碧い秋空の彼方遙に喇嘛塔が光つて見へる。

北陵は清の大宗文皇帝の寢陵、其結構の壯大美麗なるは云ふ迄も無い、黃瓦赤壁の樓閣が松樹の間に隱見し、石造の獅子、象、馬、駱駝、皆數百年の寂びを見せて居る、茲で紀念撮影をし総つて松籟の音を聽きながら晝食辨當を開く。

夕景旅館に歸り、浴後の晩餐に舌皷を打つ。

夜、勘定を濟まして驛に到る、一人の故障者も無く十時出發、安東へ

■十月四日

午前五時十分安東驛著、早朝の冷氣の中早くも起き出た團員諸氏は、別の線路に在る食堂車で朝食を濟し各プラットを散策逍遙する、斯くして七時二十分馬車に分乘して出發、視察箇所は無限公司製材工場、鴨綠江鐵橋　市街、鎭江山公園等。

製材工場では、解裝された流筏の一本一本が須臾にして大小各種の板に變化する機械力と設備を視察、鐵橋は餘りに有名である、大江に架せられた東洋一の鐵橋『十字に開けば眞帆片帆ヨー』の鴨綠江節で顯著な、其十字に開く開閉狀態を江岸に佇んで皆眺望する、夫れから馬車で埃を揚げながら安東目拔の市街を通過鎭江山公園に到る、公園は市街北背の山腹に在り、立つて望めば全市街は脚下に、鴨綠江の長流を隔てゝ新義州市街は間近に眺め得られ景色に富む、展望數時『支那と境の鴨綠江』の國境氣分が嘸諸氏の胸に湧き來つた事であらう、公園を降つて十時安東劇場に入る、茲では滿洲の最後を印象する爲、晝食辨當を食べながら安東藝妓の本場鴨綠江節と踊を觀賞する、然しながら折角の此歌と踊も期待程の出來榮を示さなかつた事は遺憾であつた。

十一時過驛に歸着再び朝鮮線編成列車に乘る、少し窮屈だが致方が無い、發車迄に嚴重な稅關の檢査を受ける、朝鮮鐵道局から富永君と岩出旅客專務、龍山鐵道病院から中村靜枝、山崎八重子兩看護婦が出迎へに來て居る茲で本社の宮內君、西旅客專務と袂別する、數日間の兩君の努力と心勞は眞に感謝に堪へ無い、后一時三十分安東驛發、之れで視察地全部終つた譯、鴨綠江の鐵橋を轟々と渡る『さらば滿洲よ』だ、

長途旅行の疲勞と視察終了の安意とからか團員諸氏意氣揚らず、皆混々と眠りに就かる、夕景平壤着、皆甘栗を買つて嚙じりながら一路釜山へ

■十月五日

秋風嶺附近からすが〳〵しい朝陽に照らされて食堂車は滿員である

大邱では停車時間に皆驛附近を濶歩する、もう三時間餘りで此朝鮮にも『サヨナラ』だ、團員諸氏は名殘惜しそうに南鮮の風光に見入る。

正午釜山驛着直に關釜專用連絡船昌慶丸に移乘、茲で朝鮮內御世話になつた富永、岩田兩君、中村、山崎兩女史と袂

別する、殊に終始非常に心勞を懸けた富永君に對し感謝に堪えぬ、后一時前記諸君と二人の列車給仕君大和田副參事初め釜山運事諸君其他の見送りを受けて船は棧橋を離れる愈々半島大陸にもをさらばだ、二人の給仕君が健氣に何時迄もハンカチーフを振つて名殘を惜んでゐるのを見て、團員諸氏は思はず『サョナラー』を喚呼して淡い離愁の場面を現出したのも旅の終りらしいエピソードだつた、赭い半島の山々は次第に遠ざかる、諸氏は皆あちらに一團、こちらに一團デッキに屯して、旅を終る安意さになごんでゐる、然し皆一樣に十二日間の知己と別れの近づく哀愁の淋しい色が面上に漂つてゐるのは見逃がせない。

斯くして凪ぎ込んでゐる白日の朝鮮海峽を船は進んで行く、夜となつた、最后の晩餐后、團員諸氏の希望に依り三等船室の廣間で一行の解散會を行ふ、出席者約一六〇名、酒、麥酒、サイダーに簡單な料理で開宴、先ず吉賀團長の挨拶がある、續いて團中の最高齡者七十八歲の中田文七翁の矍鑠たる音頭で、團員諸氏並下關鮮滿案內所の萬歲を三唱し、愉快に談笑して閉宴する。

團員諸氏の列車乘車關係を考慮して船側の好意に依り運航時間を約三十分短縮した爲め、九時早くも關門海峽に入る、兩岸にチラック本土と九州の灯火の美觀に打たれながら下關棧橋を見ると、其處には團員家族、朝日新聞社員、伊東主任初め案內所員其他が黑い大集團を作つて一行を迎へてゐる、船が岸壁に着く間もなく吉賀團長が欄干によじ上つて一場の挨拶を絕叫すると、努濤の樣な萬歲の聲が天地を震撼する、朝日新聞社の旭日旗が其中を亂舞する、實に涙ぐましい感激の中に團員諸氏は下船、玆に目出度本團は使命を果して大成功裡に解散した。

編輯後記

果して編輯するだけの原稿が蒐まるかどうか、大きな不安であつたが、締切日に迫つてこの杞憂は消し飛んで了つた、來るは、來るは、宛ら名篇玉稿の洪水である

德永、廣石、兒玉氏等の鋭い感察、栗林氏のフレッシュな紀行文、河野氏の豐かな俳味、柴田氏の諧謔、安田氏の深く魂を堀りさげた短歌等孰れも得難い珍品、わけて高田女史の快文は男子をして瞠若たらしめるもの

殊に編者の有難く感ずるのは中土居氏の表紙とカツトと裝幀に就ての御配慮である、氏は洋畫の造詣が深い、お蔭で斯くの如き商賣雜誌をも凌駕する立派なものとなつた、これは編者自慢の一つ、記して以て感謝の意を表す

この樣な譯で當初計畫の七十頁編輯は超過に超過して遂に百三十頁と云ふ厚さになつて、經費豫算に不足を來し大面喰ひ、しかし、この心配は喜びの深さで帳消しにして尚餘りがある、時恰も緊縮風の吹き荒ぶ師走に面し、吾々の心は兎もすると萎縮し勝ちであるが、吾々は記憶の新しい此愉快な旅行を思ひ出して、晴々とした新春を迎へやうではありませんか、團員諸氏よ、吾々の意のある處を察しられて永く座右に備へるの榮を給へ、吾々の滿足はそれで盡きる、終りに玉稿を賜つた諸氏に感謝の意を表し同時に團員諸氏の御勇健を祈つて擱筆する

（石田生）

59
13

團員名簿

團員府縣及職業竝年齡別表

府縣別員數

府縣	員數
福岡縣	六二
山口縣	六一
宮崎線	一六
鹿兒島縣	一六
高知縣	一五
佐賀縣	一〇
熊本縣	六
大分縣	四
北海道	四
廣島縣	二
長崎縣	一
東京府	一
臺灣	一
計	一一九

職業別

職業	員數
商業	七三
會社員	二三
釀造業	一四
農業	一三
實業	一一
醫師	八
貸地貸家業	七
教育家	五
官吏	四
新聞記者	二
學生	二
宗教家	一
辯護士	一
軍人	一
其他	三四
計	一九九

年齡別

年齡	男	女
十歲臺		二
二十歲臺	二〇	五
三十歲臺	四〇	五
四十歲臺	四八	八
五十歲臺	四三	五
六十歲臺	一五	三
七十歲臺	五	
計	一七一	二八
計	一九九	

團員名簿

（順序不同）

團長竝各班々長

	御住所		御職業	芳名	御年齢
團長	山口縣	下關市王司町四一二	辯護士	吉賀徳太郎	五〇
第一班々長	〃	〃 西細江町六〇	運送業	品川榮次郎	五七
第二班々長	福岡縣	門司市清見町二二六三	東神倉庫門司支店長	辻太一	四五
第三班々長	〃	〃 本町二丁目一六	藥種商	鶴原綾	四三
第四班々長	佐賀縣	佐賀市材木町六三	醫師	柴田圭一	四八
第五班々長	鹿兒島縣	鹿兒島市上園町三一	教諭	安田尚義	四六

第一班（四六名）

御住所		御職業	芳名	御年齢
山口縣	下關市竹崎町二八二	貸家業	辻野米藏	五二
〃	〃 本町二丁目二六四	商業	河村廣三	五二
〃	〃 王司町四一二	辯護士	吉賀徳太郎	五〇

山口縣	下關市東南部町	荒物商	林一太郎	五二
〃	〃西細江町六〇	運送業	品川榮次郎	五七
〃	〃 〃		品川セツ	五二
〃	〃上田中町	貸家業	中土居權太郎	四一
〃	〃東南部町棧橋通リ	水産業	余山米藏	五一
〃	〃 〃		余山タネ	四五
〃	〃西細江町三六	時計商	清水武二	四一
〃	〃本町三丁目五〇一	銀行員	重倉彌三郎	三七
〃	〃武久町	運送業	大野市松	五四
〃	〃新町一丁目		横田シゲ子	四六
〃	〃唐戸町一ノ四		德光千代子	一九
〃	山口市西白石三五四	縣農會技師	井上虎太郎	五七
〃	〃向山		中村啓三	三三
〃	宇部市字山門	農業	村田信夫	三八
〃	〃西區本町三丁目	商業	岩本清	三八

〃	豊浦郡彥島町江之浦區一一一三	會社員	中田茂雄	二六
〃	〃 〃	商業	冲畑績	二三
〃	〃 〃	日用品商	河野清一	四七
〃	〃 〃	會社員	植田松藏	五四
〃	〃西市町	酒造業	中野宣治	四〇
〃	〃小月村杉迫	海員	草刈清藏	五三
〃	吉敷郡嘉川村字岡屋	村會議員	有田太郎吉	五二
〃	佐波郡牟禮村四八三	雜貨商	吉武亦助	五八
〃	〃防府町	呉服商	白石民之助	四六
〃	〃 大字宮市	會社員	河野一男	三八
〃	〃	酒造業	神田要	三八
〃	〃防府町	商業	高橋多助	五二
〃	〃 大字宮市	化粧品商	久保稔	四二
〃	〃	砂糖乾物卸商	吉田光藏	五一
〃	〃	藥種商	横田榮忠	六六

〃	〃 旭町	會社員	田中久一	四一
〃	〃 大字宮市	酒造業	守田德太郎	四六
〃	〃 中關町一四四〇	〃	加藤淳介	三一
〃	〃	製塩業	武居正亮	三七
〃	〃 華城村字關	酒造業	田村新作	四四
〃	都濃郡下松町日立製作所內	會社員	金子清	三〇
〃	〃 鹿野村	商業	石田友藏	三六
〃	〃 富田町二九九	藥劑師	石田正一	三八
〃	〃 德山町	時計職	田中進	二七
〃	〃 花岡村	農業	上原良太郎	二八
〃	〃 福川町	酒造業	松田德三	四三
〃	〃	製塩業	原田熊十郎	六三
〃	玖珂郡神代村字大畠	酒造業	脇助次郎	四一

第二班（四八名）

山口縣	大島郡久賀町四一六八	酒造業	升井淑太郎	三二
〃	美彌郡大嶺村大字大嶺東分		篠田フジ	六〇
〃	〃		篠田時世	三四
〃	玖珂郡柳井町字柳井津四一五	酒造業	皿田佐一	三七
〃	〃 三三一	酢釀造業	神田吉松	三二
〃	〃	醬油釀造業	高田美次	二一
〃	〃 麻里布町今津一三四四	醫師	吉村幸三	四八
〃	熊毛郡平生町	酒造業	富田新一	二八
廣島縣	廣島市段原町西地四三二ノ五	農業	椋本完一	四六
〃	御調郡向島西村江ノ奥	蚕種業	藤田俊夫	四一
福岡縣	福岡市下警固柳原二丁目	貸家業	加藤安次郎	四九
〃	〃 住吉町一五〇四	學生	溝部大丈夫	二一
〃	〃 東中洲町不二屋百貨店內	商業	坂本繁男	二四
〃	〃 古小路町	印刷業	山田純一郎	五九

59
13

59
13

〃	〃		山田サト	五四
〃	久留米市通町四丁目一二四		池上清廣	三三
〃	小倉市中島町五〇〇	器械商	平尾杢次郎	五七
〃	〃　貴船町二丁目	會社員	藤好南海生	四六
〃	〃　寶町二ノ三七	織物卸商	林省治	三四
〃	〃　下富野九八	織物業	神田八十治	三三
〃	〃　鳥町四丁目	荒物商	久光勘次郎	五六
〃	〃		久光鶴子	二一
〃	〃　魚町七九	呉服商	宮永イシ	五三
〃	〃　紺屋町二丁目	瓶問屋	岩岡豊次郎	五五
〃	〃　大字富野三八一	メタル製造業	福間清	三六
〃	門司市清見町二二六三	東神倉庫門司支店長	辻太一	四五
〃	〃　櫻町二丁目常盤方	會社員	新居平吉	四四
〃	〃		新居キシ	三五
〃	〃　西川端町三丁目	會社員	德永百二	三三

〃	〃　丸山町三丁目	高商講師	德永清行	二六
〃	八幡市蛭子町五丁目	酒類商	富田政一	二三
〃	〃　鬼ヶ原製鐵所官舍	官吏	蓮沼孝榮	四七
〃	〃　東通町四丁目一二〇九	商業	和田藤太	六八
〃	〃　製鐵所内山九運輸出張所内	會社員	早水藤太	三八
〃	〃　東鐵町四丁目		白井喜三郎	六五
〃	戸畑市殿町二ノ一六八	會社員	木下茂	四二
〃	若松市濱三番町四丁目	〃	高橋利秋	三七
〃	〃　土井町二丁目七〇	貸家業	豐澤賢	四四
〃	〃　西新町	質商	園山助次郎	四八
〃	〃　本町三丁目二七五	塗料商	小田祐三郎	五二
〃	〃　二八四	硝子商	高井祥太郎	五四
〃	〃　堺町三丁目四〇九	貸家業	楠野太一郎	三八
〃	〃　正保寺町三八五ノ一	〃	愛智丈一	四四
〃	〃　本町七丁目四五四	呉服商	谷尾善六	四七

〃	〃 堺町三丁目三六一	米穀商	松尾惣市	五三
〃	〃 惠比須通リ一丁目	石炭商	彌登佶太郎	二五
〃	〃 濱三番町二丁目五六	公吏	清水鐵次郎	五四
〃	三井郡宮ノ陣村八丁島一九〇六	農業	池上武彥	二八

第三班（一七名）

東京府	東京市麴町區東京朝日新聞社内	新聞記者	栗林貞一	三六
北海道	札幌市大通西六丁目九	貸家業	星澤長太郎	四四
〃	〃 南一條西二丁目一六	家具製作卸商	塚原東次郎	五八
〃	〃 南九條西四丁目四一九	貸家業	片桐儀三郎	五〇
〃	〃 南四條西二丁目四	寫眞台紙商	佐川捨藏	四七
山口縣	下關市外濱町		淺海コト	六三
〃	〃 丸山町一九二三		伊東園	四〇
〃	〃 新地町		山田シゲ子	三九
〃	〃 稻荷町六	置屋兼料理業	伊達ミツ	四九

〃	〃		齊藤千代	二八
〃	豐浦郡長府町	保姆	梶間靜子	三五
福岡縣	門司市本町二丁目一六	藥種商	鶴原綾	四三
〃	〃 寶町一丁目一九九五		堀野登女	三四
〃	戸畑市明專官舍	教師	花田ツネ子	二五
〃	〃	〃	高田發音	三〇
〃	築上郡椎田町一六八九		榎本靜子	二三
〃	〃		榎本文子	二一

第四班（四一名）

福岡縣	糟屋郡箱崎町	藥劑師	佐々木正一	四二
〃	〃 二五二〇	吳服商	戸次源三郎	五〇
〃	鞍手郡木屋瀬町大字木屋瀬八六五	醬油釀造業	松本與吉郎	六五
〃	〃		松本ハル	五六
〃	嘉穗郡稻築村山野	會社員	中並覺太郎	三五

〃	〃　桂川村瀬戸	農業	緒方正次郎	五三
〃	〃　飯塚町鶴三緒一三八三	〃	山本長太郎	六一
〃	朝倉郡甘木町甘木一〇四四	印刷業	高良廣吉	四三
〃	早良郡姪濱町三四〇七	製網業	吉牟田多作	五九
〃	〃	小間物商	柴戸忠次郎	四五
〃	企救郡松ヶ江村恒見八六七	商業	廣石音彥	四〇
〃	田川郡金田町	酒類商	板垣島治	五一
〃	〃	〃	原虎夫	三四
〃	〃　糸田村宮床	〃	井口善七	四三
〃	京都郡行橋町字大橋	金物商	瀧田典次	三四
〃	〃	紙商	泉武二	三四
〃	〃　苅田町字苅田一九七八	地主	村谷金三	七〇
大分縣	別府市此花町	竹商	永井一郎	二八
〃	速見郡龜川町湯ノ森		土方倉三	四〇
〃	日田郡中川村大字合田	農業	矢幡鐵之助	三〇

大分縣	直入郡竹田町一八六三ノ一	齒科醫	志賀信藏	五八
佐賀縣	佐賀市材木町六三	醫師	柴田圭一	四八
〃	〃　一四	〃	大庭芳一	四七
〃	〃　赤松町北堀端一六四	洋服商	山崎隆次	四二
〃	佐賀郡兵庫村大字瓦町五四	官吏	寺町喜一	三五
〃	西松浦郡有田町一六〇八ノ一	銀行員	蒲地益次	二八
〃	神埼郡神埼町字廣圓	醫師	副島太郎	六五
〃	〃		副島トミ	六二
〃	杵島郡北方村字志久	坑木商	德永貞吉	五三
〃	〃	酒商	田中關一	三三
〃	〃　橋下村字大渡	銀行員	本村助一	四七
長崎縣	南高來郡南串山村字門前甲ノ二七三六	農業	馬塲永三郎	七〇
熊本縣	熊本市新町二丁目二〇	礦油カーバイト商	米村勇三	二九
〃	〃　古桶屋町二〇	會社員	福島德次郎	二一
〃	八代郡八代本町	荒物商	高田喜三	五八

59.
13

〃	玉名郡高瀬町	印刷業	瀬口五四郎	五〇
〃	〃		瀬口フミ	四五
〃	葦北郡日奈久町五〇三	農業	蓑田充	四九
福岡縣	門司市花山通四丁目		宇野甚五郎	七一
〃	遠賀郡水巻村大字立屋敷	農業	尾上瀧太郎	五五
台灣	高雄州恒春郡恒春庄二五〇	醫學生	郭承榮	二六

第五班（四七名）

鹿兒島縣	鹿兒島市高麗町七三		永田網明	六三
〃	〃 上園町三一	教諭	安田尙義	四六
〃	〃 上荒田町五九八		中田文七	七八
〃	〃 平之町八七	豫備陸軍歩兵少佐	中原良平	四九
〃	〃		中原敬子	四二
〃	〃 鷹師町八		土橋辰之助	六二
〃	〃		土橋タカ	五六

〃	〃 西田町二三		指宿忠諄	五八
〃	日置郡伊作町	醫師	丸山雅成	六三
〃	〃	商業	松山覺志	五一
〃	〃	〃	松山覺藏	四四
〃	〃	〃	中島國介	四二
〃	薩摩郡上東鄕村鳥丸	醫師	瀬口幸一郎	六五
〃	〃	〃	島田宇兵衛	六四
〃	薩摩郡隈之城村大字川内町白和二六八五	農業	神崎藤藏	三七
〃	姶良郡加治木町反土二五五五	新聞記者	新名忠次	三三
宮崎縣	宮崎市橘通二丁目三三	謠曲家	兒玉氏雄	六〇
〃	〃 四丁目六六	製油業	關本雅弘	三五
〃	都城市前田町二丁目	米穀商	兒玉熊雄	三九
〃	宮崎郡佐土原町大字上田島三八六三	銀行員	江藤定吉	五五
〃	〃 三八〇二	〃	松尾秀夫	三五
〃	〃 那珂村大字東上那珂字津倉	農業	岩切七五郎	二九

〃	北諸縣郡山田村	米肥商	兒玉寶治	四四
〃	東諸縣郡穆佐村宮水流	酒造業	長友政太郎	四四
〃	〃		長友ヱミ子	四〇
〃	〃		長友アヤ子	一九
〃	西諸縣郡小林町南西方	肥料商	山下俊雄	二五
〃	兒湯郡妻町日向中央銀行妻支店内	銀行員	松村良美	二五
〃	高鍋町大字北高鍋一一九九	農業	矢野盛雄	五九
〃	都農町	雜貨商	萱島諸順	三四
〃	〃	銀行員	長友淺由	三一
〃	新田村大字新田一一四八三	農業	金丸佐太郎	三七
高知縣	高知市桝形	印刷業	仁尾進	四一
〃	本町	藥種商	德直左衛門	四〇
〃	種崎町	雜貨商	利岡喜久太郎	四〇
〃	本町	商業	吉岡勘平	三六
〃	通町	荒物商	竹崎友次	四九

〃	本町	洋服商	武藤三男也	五〇
〃	要法寺内	僧侶	川崎日忍	六二
〃	細工町五三	洋物卸商	堀見虎衛	四五
〃	種崎町	洋服商	熊澤兎吉	五〇
〃	蓮池町	雜貨商	山本竹吾	五八
〃	本町	藥種商	安部幸長	五〇
〃	〃	眼鏡商	芝藤濱市	四〇
〃	〃	履物商	須賀實吉	七一
〃	北奉公人町	味噌酒商	伊野權太郎	五五
〃	朝倉町	乾物並雜貨商	有光彝眞	三七

主催者世話係

山口縣	下關鮮滿案内所	滿鐵職員	石田芳雄
〃	〃	滿鐵准職員	岡田照三

案内係

朝鮮	朝鮮總督府鐵道局營業課	鐵道局書記	富永鐵五郎
〃	〃　京城列車區	旅客專務	岩出俊次郎
滿洲	滿鐵本社鐵道部營業課	職員	宮內政五郎
〃	滿鐵奉天列車區	旅客專務	西英作

59
13

昭和四年十二月十三日印刷
昭和四年十二月十八日發行

【非賣品】

發行兼編輯人　石田芳雄
印刷人　川本新一
印刷所　祥文社印刷所
門司市內濱町二丁目
電話六二四番

發行所　下關鮮滿案內所
（下關驛前
電話一九六二番）

594
136

594
136

594
136